

1 特色あるカリキュラムの編成と実施

特色ある学校づくりのために

上越市では、「上越市総合教育プラン」の重点施策として、「上越市らしい教育の推進」を掲げています。上越カリキュラムは、その施策の一環として位置づけられています。

上越カリキュラムでは、改訂された学習指導要領はもちろんのこと、上越市総合教育プランを踏まえた、市立学校のカリキュラムづくりの指針やモデル、教科等でおさえる内容を示します。

それぞれの学校が、学校課題を明確にした主張のあるカリキュラムづくりに取り組み、特色ある学校づくりに努めることによって、上越市全体の教育が活性化することを目指しています。

価値観の多様化に伴い、社会が学校に求める要望も多様化してきています。また、地方分権、規制緩和といった教育改革が進められるにしたがい、学校には、その独自性や地域の特色を生かしたカリキュラムづくりが求められるようになりました。

ところで、保護者が安心して子どもを通わせたいと思う学校は、学校として「何を大切にしているか」が明確であり、そのためのアプローチがより具体的にイメージしやすい学校なのではないでしょうか。

学校の説明責任が声高に叫ばれる今日においては、保護者に見える方針やPDCAサイクルに基づく学校評価とその公開などが、学校運営を進めていく上で大切です。そして、それらによる学校像が保護者のイメージと一致したときに、学校に対する信頼が生まれます。「学校の特色」を職員はもちろん、子どもも地域・保護者も認知できるように学校運営を進めていくことが、開かれた学校づくりの意味からも、重要といえます。

このようにして学校づくりを進めることで、職員の意識も変わります。如実に表れるのが、校内研究です。従来の校内研究に比べ、学校評価と重なる部分が大きくなります。「授業を変えることで学校が変わっていく」ことを実感できるようになります。それらは一つの筋の通った校内研究の流れを生み、カリキュラム評価を通して、授業評価と学校評価が連動します。今まで別物扱いであった二つの取組が有機的に結びつき、職員の多忙感を軽減することに結びつくのです。

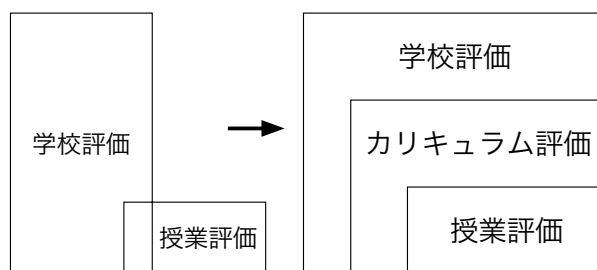
自校のカリキュラムを見直し、一つの筋の通ったカリキュラムを編成・実施し、特色として打ち出していくことは、これからの学校づくりに必須の条件です。

校内研究を変えるカリキュラム研究

「校内研究」のイメージは、これまでは授業研究が主体となっていました。「発問・指示」や「課題提示の工夫」、「展開～終末の在り方」など、実践的な評価が主となっていたことが多かったようです。

今、教育研究の方向は「カリキュラム研究」にシフトしています。すなわち、各学校のカリキュラムを創り、動かし、変えることについての理念と方略が問われるようになっていきます。

これは授業評価の枠を越え、学校教育全体を見直すことを進めようとするものです。これにより、授業評価と学校評価が自然に連結され、関連付けられていきます。全ての学校が年度初めに行う教育計画の策定を学級担任に返すこと、これが学校活性化に直結するものです。



上越らしさが生きる「カリキュラム」

「上越らしさ」とは、どんなものでしょうか？

上越では、かねてからいくつもの学校で生活科や総合的な学習の時間を対象としたカリキュラムづくりがなされてきました。それは、地域にある素材や学校をとりまく環境を有効に活用したり、子どもの学びから生み出された素朴な思いや願いを追究課題としたりしていました。まさに学校の強みを生かし、子どもと生成するカリキュラムづくりとなっていました。

しかし、こうした実践の多くは、学年主導で行われることが多く、学年が変わったり、実践者が異動したりすると、消失してしまうものも少なくありませんでした。

一方で、学校課題に正対したものとして位置づけることによって、学校全体に広げ、学年を越えた取組を展開する学校も多くありました。それらの実践は、裾の広い、まさに学校全体の特色づくりに直結するカリキュラム開発となっています。

A小学校では、生活科・総合的な学習を中核として、「思考力の育成」に取り組んでいます。教科・領域の枠を越えて、多用な考えを引き出したり、これまでの経験や学んだことを関係づけ、再構成したりする教育活動をカリキュラムの中に位置づけ、思考力の育成に成果を上げています。

B小学校では、人権・同和教育を学校課題解決の柱に据え、全教育活動を通じて、子どもたちの人権感覚を研ぎ澄ます取組を進めてきました。地域環境を強みとして、30年来積み重ねた研究は、学校の教育風土として定着しています。

C小学校では、地域の偉人を教材として、単元開発を行い、生活科・総合的な学習に留まらず、教科横断的に全教育活動で、対象に深くかかわっていきました。「人」を学ぶことによって、地域に住む人々の思いを知り、ふるさとを見直すことによって、ふるさとに自信をもち、郷土愛を育てる取組となりました。

D中学校では、キャリア教育を中核に据え、教科、総合的な学習、特別活動を関連付けた年間カリキュラムを作成しました。中学は、教科担任制ですが、横の連携が難しいという弱みを逆手にとって、教科を越えた取組へと深めていくことができました。

これら4つは、昨年度の「上越カリキュラム」で提案した13の実践モデルとして示しました。しかし、とりたてて本事業のために始めたものではありません。これまでに各校が、主体的なカリキュラム開発を指向し、地道な教材開発を積み重ねて自校のカリキュラムとして特徴づけたものに過ぎないのです。

こうした取組を整理し、その手法に市内の全ての学校が学び、自校化を進めようとするのを後押しするのが、上越カリキュラムです。学校の特色として位置づき、職員が自信をもって取り組むことができる取組にするためには、個々の学校でも中心となる課題を明らかにし、カリキュラムを工夫することが大切です。

「上越カリキュラム開発研究」では、上越市内の全ての小・中学校が、上記のように自校のカリキュラムに自信をもち、特色ある学校づくりに取り組むことを大切にしています。

「教育課程」と「カリキュラム」

「教育課程」の前身は明治初期の学制発布にさかのぼります。教育の近代化が急がれたという時代背景のもと、「教科課程」という名で示された教科の内容系列を意味しました。これに対して「カリキュラム」とは、アメリカの自主編制的な学習内容を指します。決められた内容はなく、各学校が自校の子どもたちに何を教えるべきかを学校の責任で取捨・選択、編成するというボトムアップの発想によるものでした。

今日、「カリキュラム」という言葉が日本の教育現場で使われるようになったこと背景には、学校に求められる今日的な要請があるものと再認識する必要があります。

カリキュラム開発1年次の成果から

昨年度、1年間取り組んだ研究成果を以下の3つに整理してみます。

(ア) 学校課題を「カリキュラム開発」の視点で見直すという提言

- ・教育活動を分断して考えるのではなく、それぞれを大らかなバランス感覚で関連付けることにより、学校の特色づくりに成果が上がることを事例で示した。

昨年度から始まった「夢づくり学校支援事業」の計画書を概観すると、様々な学校で、学校課題を柱に据え、大らかなカリキュラムを編成しようとする動きが増えています。特に、学校の特色を明らかにし、グランドデザインに位置づけたり研修の柱に据えたりする学校が増加していることが、学校を紹介するパネル展などにも表れるようになりました。

E 中学校「夢づくり学校提案」

夢や目標をもち、主体的に活動する生徒をはぐくむカリキュラムづくりと実践

～地域と進めるキャリア教育を中核にししながら「スクールコミュニティー」の創生を目指す～

同 校 グランドデザイン3つの柱より

「子どもが主人公である学校」の創造

キャリア教育の実践を通して、生徒一人一人の着実なキャリア発達を支援します。

このように、学校の特色を全面に出して、学校運営を進めていこうとする動きが広がってきています。

(イ) カリキュラム開発の手順を示し、5つの指針として整理したこと

- ・5つの指針を示し、自校化を図る際の手引きとした。
- ・カリキュラム開発の一連の手順を1年間のスパンで具体的に提案した。

昨年度、示した指針は以下の5つです。

- ① 学校・地域・子どもの現状を見直そう ～実態認識からの課題づくり～
- ② 学校の課題・目標を明確化・焦点化しよう ～グランドデザインの作成～
- ③ 学習内容の関連化・体系化を図ろう ～カリキュラム表の作成～
- ④ カリキュラムの評価・改善を図ろう ～カリキュラム評価の実施～
- ⑤ マネジメントのための組織やシステムをつくろう

～カリキュラムマネジメントの推進～

学校が時系列で行うべき取組などを考え、これらを3つにまとめました。これについては、次項以降に詳細を示します。

(ウ) モデル開発のタイプを3つに分け、それぞれのモデルを示したこと

- ・13のカリキュラムモデルを具体例で示した。

昨年度13の実践モデルを示しました。それぞれが地域の特色を生かし、全校を巻き込む実践となっていました。学校の特色がカリキュラムの方向性として職員の共通の認識となったとき、安定した学校運営が実現し、その繰り返しにより学校が固有にもつ教育風土として醸成され、定着していくことが実感として伝わる実践の数々でした。

しかしながら、その一つ一つが完成された取組であったため、逆に他校がそれを参考にして自校化を図る上では、難しい部分があった点も否めません。

そうした反省を受けて、2年度のまとめとしては、より一般化されたものを用意することにしました。どんな学校でも利用しやすいように活用しやすく典型化を図ったモデルプランを紹介したいと考えています。

カリキュラム開発3つの指針

昨年度示した5つの指針を以下の3つにまとめました。

S 1 学校課題の把握と解決に向けた戦略へのアプローチ

- ・一般的な理念や公的なカリキュラムの内容等々を踏まえ、自校の子どもの実態や学校をとりまく環境をもとに学校課題を明らかにすること
- ・学校課題の顕在化とともに、全職員が主体的にかかわりながら、学校としての方向性を明らかにし、グランドデザインにまとめていくこと

S 2 学習内容の構造化と体系化へのアプローチ

- ・明らかとなった学校課題を踏まえ、学習内容・活動を整理し、自学年・学級のカリキュラムを編成すること(視覚的カリキュラムの活用)
- ・学年・学級のカリキュラムを整理・統合して、学校全体として統一性をもたせること

S 3 マネジメントと組織づくりへのアプローチ

- ・どのようにしてカリキュラムを評価し、改善に生かしていくか、評価委員会の設定、校内研修のもち方など、協働性が発揮される組織運営を工夫すること

S 1とS 2は、時系列で進められ、S 3がそれらに要所々でかかわっていきます。これまでの学校づくりで多かったのは、実際に子どもの前に立つ担任レベルは、S 2を進めることに終始し、S 1やS 3には比較的にかかわりにくかったということです。管理職や研究主任・教務主任など、一部の職員により企画が進められていました。それはカリキュラムづくりに関して、現場が受動的になる背景にもなっていました。

したがって、これら3つのアプローチにおいて、それぞれ大切にしたいのは、協働性が発揮されることです。

組織が協働性を発揮する際には、その構成員が自立的に学校課題を受け止め、主体的に課題解決に携わることが求められます。そのためには、ある程度の幅をもたせた切り込み口を用意しつつ、見通しをもった年間の取組をイメージする必要があります。

そのために、トップダウン的なものではなくて、あくまで職員個々の認識が摺り合わされて創り上げられる過程を大切にします。20年度文科省主催の「カリキュラムマネジメント研修」でも、「学校課題」をどのように受け止め、学校全体として仕組んで行くかというテーマに、その多くの時間が割かれました。

そのための組織づくりや研修の在り方なども、多様な考えや意見が出されるような、例えばポストイットを活用したKJ法などのワークショップ型の話し合いを工夫します。単元開発にしてもウェビング法、概念化シートなどを用いて、可視化を図りながら、共通のイメージをもとに構成するようにします。

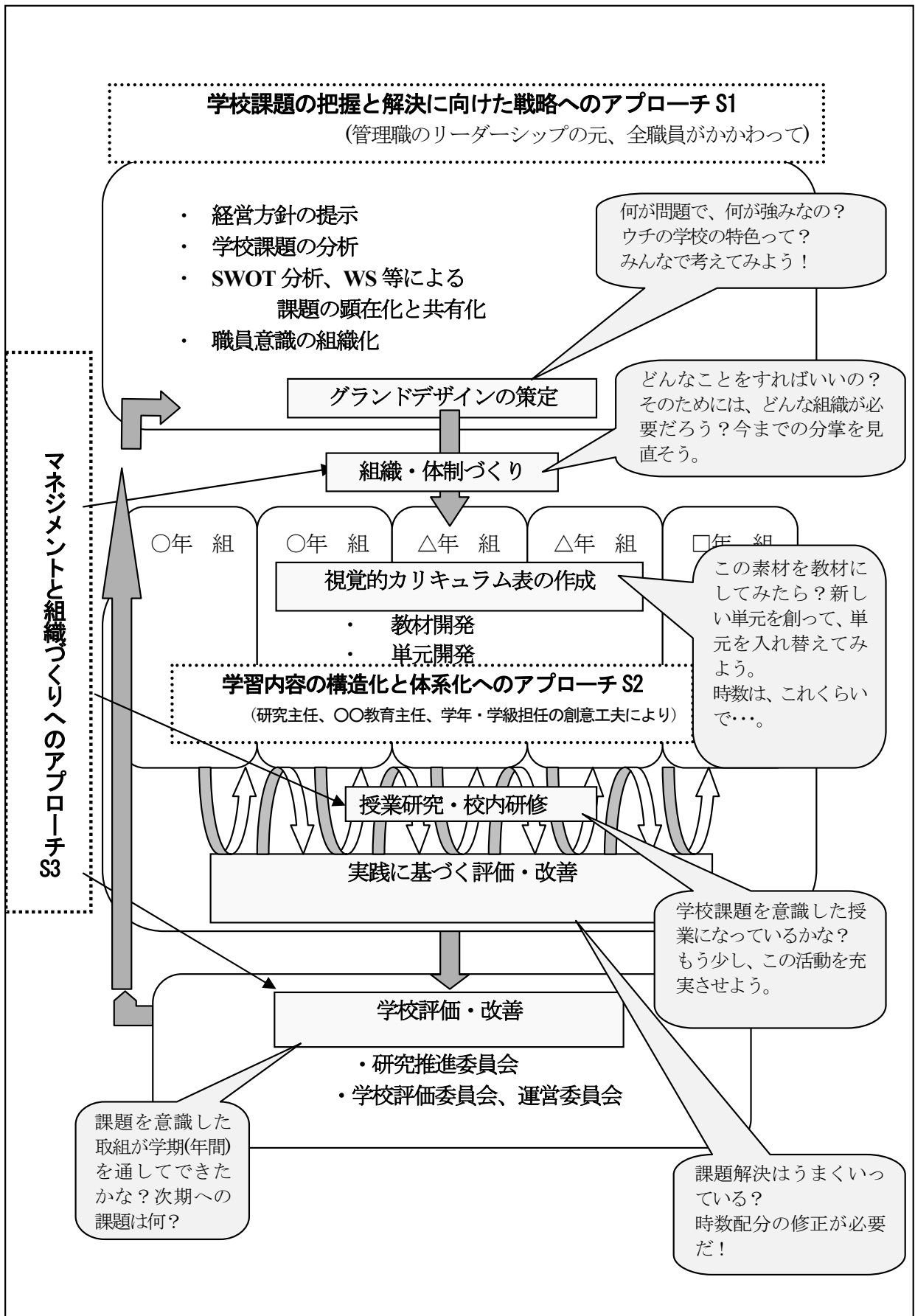
こうした取組により、職員個々の学校カリキュラム編成への参画意識が高まります。

「協働」性が発揮される学校づくり

協働の意義が社会的に注目されるようになったのは、「阪神・淡路大震災」以降だそうです。震災直後、被災者の多くは、公的な救援・救助が追いつかず、必然的に市民が相互に助け合い救助しあう状況が発生しました。このときを境に、神戸市では地域全体の助け合いが重要だと再確認され、「自助・共助・公助」の3つの支え合いによる防災まちづくりが推進されることになりました。この概念の中核にあるのが「協働」です。

「協働」を支えるキーワードは、「自立」と「連携」です。学校の教育活動に場所を変えたときに、職員が共通のベクトルを有し、一人一人が自立的に学校づくりに参画する組織づくりが大切です。「協働」性が発揮される環境をどう整えるかが、学校づくりの核といえます。

次の図は、3つの指針を構造的に示したものです。



学校課題の把握と解決に向けた戦略へのアプローチ…S1

学校課題の顕在化

学校では、年度初めに子どもの実態や地域環境などにより、学校課題を設定します。えてして管理職を中心とした一部の職員によって、トップダウン的に決められることが多いようです。組織の実働的な位置にある学級担任は、参画意識が乏しく、そのため教育活動が学校課題に正対したものになっていないケースが、ままあります。職員の意識が学校として一つのものにならず、組織的な動きにまで深まっていきません。

ポイントは次の3つです。

- (1) 職員個々の問題意識が顕在化され摺り合わされる過程を大切にすること
- (2) 具体的な学校の特性や傾向を明らかにすること
- (3) 多様な課題解決のアイデアが生み出されること

また実際に取り組を進める中で、修正が図られるような自由度の高いものでなくては、取組が硬直化してしまったり、一人一人の意識が継続されなかつたりします。したがって、ある程度窓口の大きな課題にした方が実際には機能させやすくなります。

良きに付け悪しきに付け、学校をとりまく環境は、学校課題設定の大きな要素です。学校に対して、家庭は、地域はどのようにかかわってきているか。また地域にはどのような教育的な価値のある素材があるか。こうしたことを職員間で十分に共有し、それらを踏まえた上で、カリキュラムを開発していくことが大切です。その一例としてSWOT分析という手法を紹介します。

外部環境要因	内部環境要因
支援的な場合(+) 機会(Opportunity) 豊かな自然環境 豊富なボランティア 保護者・地域の理解 地域の伝統芸能の継承 地域の連帯感 中学校区小・中の連携	学校の強み(+) 強み(Strength) 学力的に高い子どもたち 少人数指導の充実 熱意ある若手の多い職員構成 力量ある中堅職員の存在 力量ある栄養士の存在 伝統的な行事
阻害的な場合(-) 脅威(Threat) 少子・高齢化 世代間格差 後継者不足 兼業農家の増加 人口の流出	学校の弱み(-) 弱み(Weakness) 社会的経験の不足 表現力 児童の序列化 文化的経験・機会の不足

(参考 H16~17「学校組織マネジメント研修資料」マネジメント研修カリキュラム等開発会議 文部科学省HP)

学校運営にかかわる「強み」と「弱み」を内外の要素として整理していきます。このようにして学校がもつ要因を分析することによって、学校がもつ課題をあきらかにしていきます。

職員の一人一人がもつ認識をこの作業によって深めたり、より意識化したりするのです。一人一人が書いたものを摺り合わせる過程において、共通の課題が見えてきたり、強化して取り組むことを意識したりすることは、職員個々のベクトルを一つに集めていくこととなり、学校課題に正対した協働的な取組を期待することができます。

F小学校では、学校の強みと弱みを上のように分析しました。そして、弱みを強みとして生かす方を模索しました。小規模校の機動性や校区の地場産業が農業を中心としていること、意欲的な栄養職員の存在などを鑑み、「食農」を軸に地域行事とからめて、学校の特色として位置づけました。子どもたちが地域に出て体験的に学ぶ機会を充実し、子どもの学ぶ意欲やコミュニケーション能力など、生きる力をはぐくむ教育活動を構想しようとする共通のベクトルが生まれました。

ランドデザインへの位置づけ

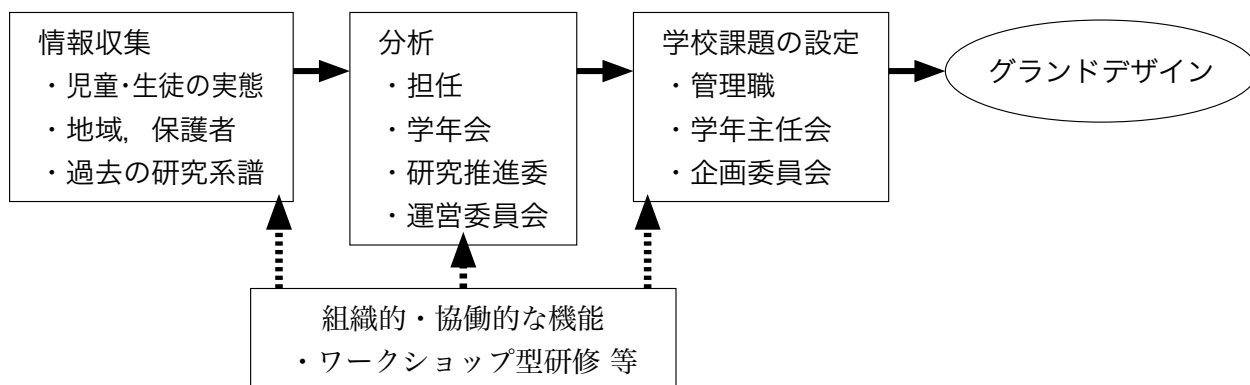
ある程度明らかになった課題を中核にして、ランドデザインを作成します。

県教育委員会の20年度学校教育の重点には、ランドデザインの位置づけとして、「保護者や地域の人々と共に取り組む学校づくり」のために「目指す児童生徒の姿やその実現に向けた教職員の取組について、年度の具体的な達成目標や実施目標を設定してランドデザイン等に明示し、評価方法を含めて保護者や地域の人々に説明する」としています。学校としての特色を地域・保護者にも知らしめ、理解と協力を得るために重要な位置づけにあります。

平成19年度の市内小・中学校のランドデザインを概観すると、各校とも非常に特徴的です。図案として表されたデザイン性の高いものや、内容と方法がマトリクスで示され学校として何を行うかが明確なもの、裏面に年間行事予定が盛り込まれ時系列で取組が見えるものなど様々です。

ところが、学校独自の特色が全面に出ているものはいえ、さほど多くありませんでした。「知・徳・体」のバランスのとれた教育の推進や「地域との連携」、「生活科・総合的な学習の充実」など、一見すると総花的で網羅的な印象を受けるものが少なくありません。

学校課題が如実に反映されたランドデザイン、それは「特色ある学校づくり」の設計図でもあります。ぜひ、「ああ、これは、〇〇小学校のものだな」と他校の先生にも分かるランドデザインにしたいものです。



上記は、ランドデザイン設定までの一般的なプロセスです。先にも示したように協働的な「分析」方法や研修を受け、職員個々の気付きや考え、意志が反映されるように留意します。

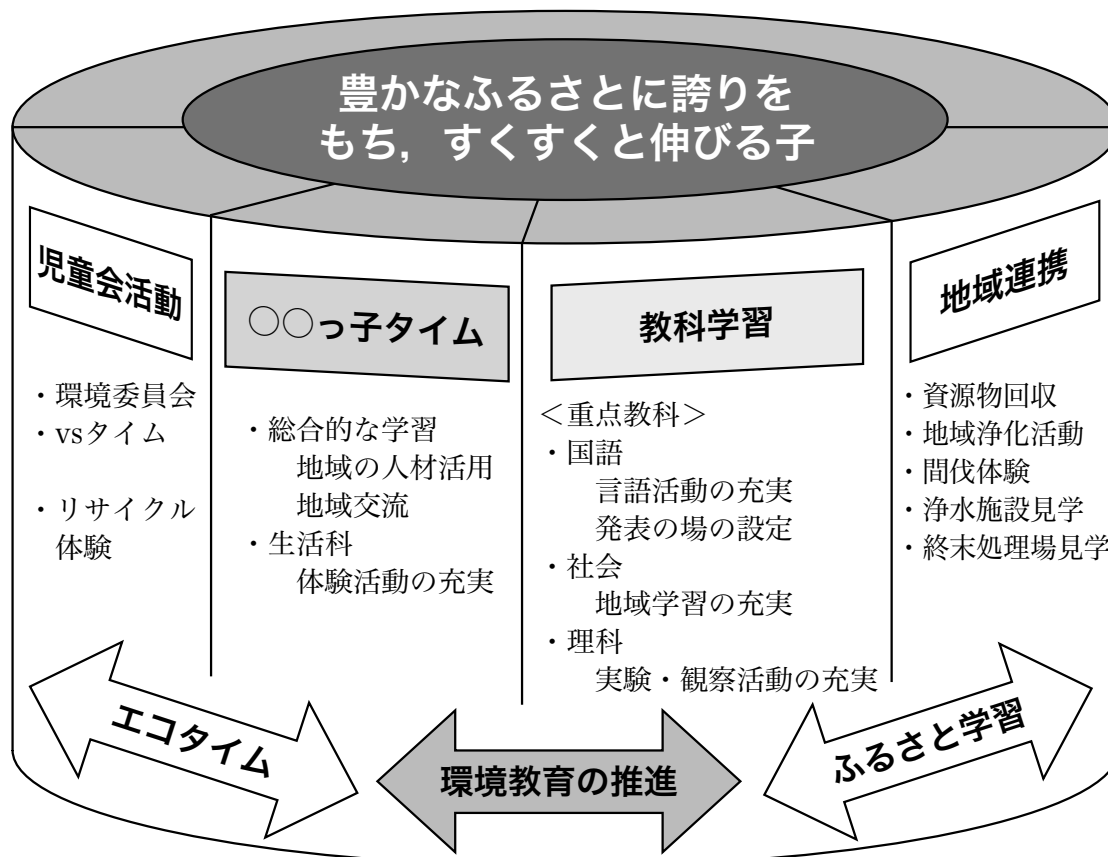
情報は、多ければ多いほどよいのですが、その全てを課題解決の方法やランドデザインの項目に盛り込むことは不可能です。多面的な分析を経て取捨選択していくことで、学校の目標や課題の焦点化が図られ、学校独自の課題へと収斂されていきます。またこの際、学校のもつ強みを強化する方向を考えることで、逆に弱い部分を補完したり相殺したりしていくことも考えられます。

G小学校では、地域に残された豊かな自然環境と終末処理施設の建設計画が地域であがっていることをもとに、環境教育を学校課題の中心に据えました。そして、これまでのカリキュラムの見直しを進め、環境教育を中核にしたランドデザインを作成することにしました。

環境教育の視点に立ち、全ての教育活動の見直しを図った結果、教科の中から、子どもたちが環境に目を向ける可能性の高い教材や、子どもがもつ思いや考えを共有する場を工夫しようということになりました。

見学や地域浄化活動などの体験的な活動を仕組んだり、環境保全に関する子どもたちの意識を発信する活動を設定したりするためにも、教科枠を越え、特別活動や道徳との関連を図った取組へと構想は広がっていきました。

こうして、学校課題に正対したランドデザインを作成し、それをもとにしてこれまでの教育活動を見直します。これら一連の営みが、年間を通して一貫して課題意識を共有しつつ、意図的計画的にカリキュラムを編成することにむすびついていきます。



(G小学校のランドデザインの概要)

このように「情報収集～分析～課題設定～ランドデザインの構築」という一連の営みに一人一人の職員が参加することで、各々が学校を理解し同じ方向性を有してカリキュラムを構築していくことが期待できます。そして、それぞれの職員が、直接的に学校づくりに参画しているという意識が、集団への帰属感を高めていきます。

職員一人一人がプロパーとしての自信を深めたときに、それぞれ教師としての職能の向上に役立つことにつながります。そして、ひいては職場集団の組織力を向上させることになるのです。

学校運営は、管理職だけがやるものではありません。子ども一人

一人を見ることで、学級は良くなるでしょう。しかし、その学級・学年だけに留まれば、学校全体が良くなることはありません。それぞれの職員が、分担された分掌だけに専念しても、良い学校ができるわけではないのです。「木を見て森を見る」広い視野を全ての職員がもつこと、それが特色ある学校づくりを推進します。その意味からは、ランドデザインの策定に全職員がかかわることは、共通のベクトルづくりの大切な視点といえます。

企業原理にみる組織づくり

世界のホンダとして有名な本田宗一郎氏は、車作りに関して、非常に興味深い話をしています。

「大工場でパーツを分担して作り、それを組み立てるようになってから、車作りはおもしろくなくなった。小さな工場では、頭をつき合わせながら、あ～でもない、こ～でもないと言い合いながら、作っていた頃の方が、楽しかった。」

部品を作っているだけでは、できあがった車をイメージするのは難しく、車作りの喜びは味わえません。

同じことが学校づくりにも当てはまります。一人一人の職員が自分の職責を果たすとともに、互いが刺激を受け、補い合いながら仕事を進めたときに、そのプロジェクトは活性化します。

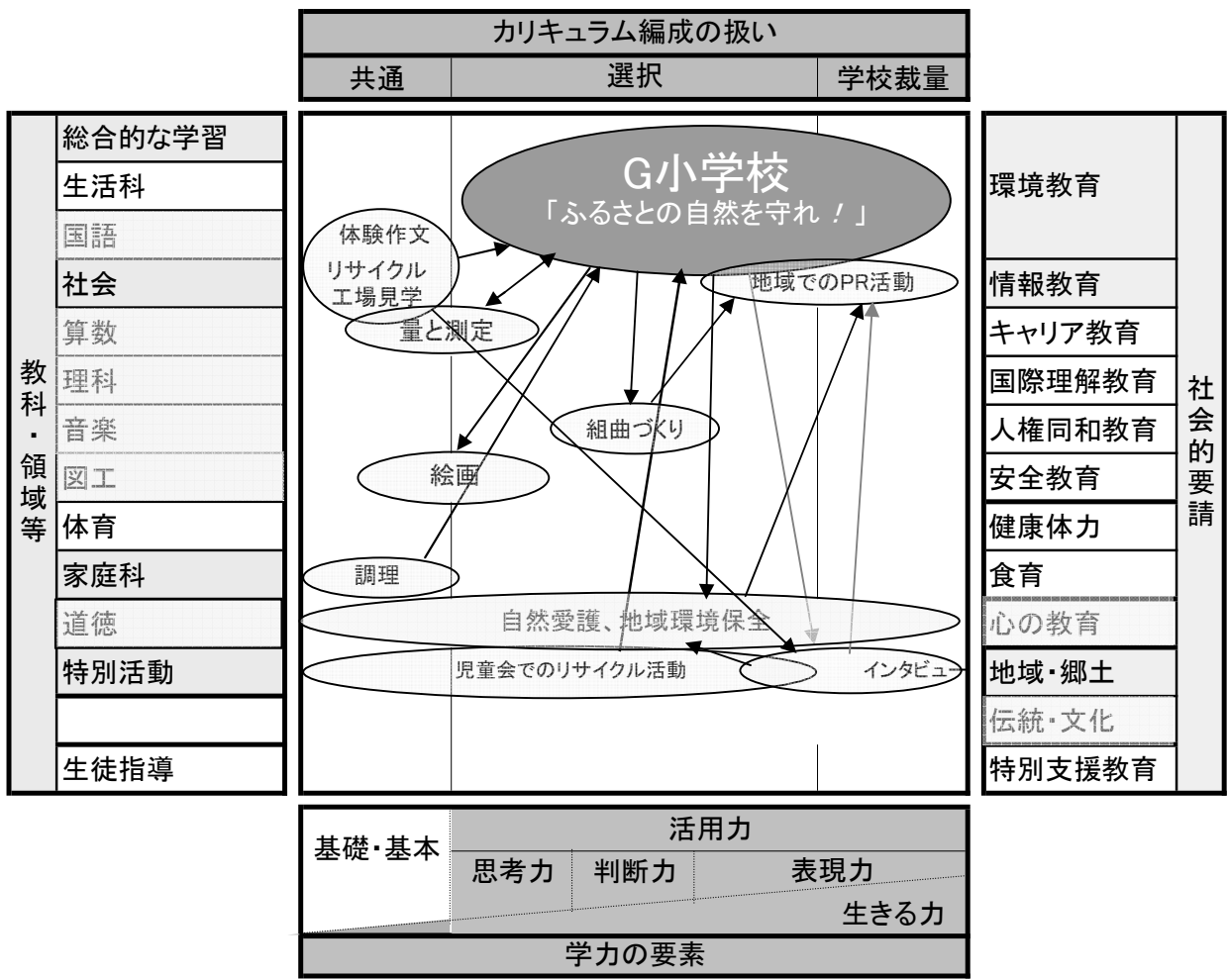
職員が組織のパーツである限り、新しい発想は生まれにくく、相互に高め合う姿勢は身に付きにくいものなのです。組織を構成する職員のモチベーションは、プロジェクトの全体像をいかにイメージしているかどうかによって、違ってきます。

学習内容の構造化と体系化へのアプローチ…S 2

カリキュラムの全体をイメージする

では、顕在化し、グランドデザインに示すことができた学校課題の解決を具体的にどのように行っていけば良いのでしょうか。

実際に教育活動に反映していくためには、授業や学校行事などの教育活動に生かされていることが必要です。そのためには、担任が授業をするときに、グランドデザインに盛り込まれた子ども像やはぐくみたい力などをもとに、教材を見直したり授業の展開を工夫したりすることが求められます。次に示すのは、「環境教育」を進めていく上で、どの教科・領域を対象に教育活動として位置づけるかをイメージすることを目的とした単元の構成表です。



- 縦軸に、教科・特活・総合的な学習の時間等の領域と今日的課題等、学習内容を置く。配列、順序は、各学校によって工夫する。
- 横軸に、学力の要素を「カリキュラム編成の扱い」と並列して置く。
*基礎・基本は共通(必須)とし、「応用～発展を選択・裁量」とタイアップする。
- 単元を楕円で示し、「」内に活動名等を記す。最も大きな楕円が基本単元となり、カリキュラム表の中核となる。
- 単元同士は、直線または → で結び、おおよその流れが見えるようにする。
- 縦軸のみ、色で区別し、実践場面がイメージできるようにする。

環境教育のカリキュラム構成表

これらをもとに、大単元と関連する小単元を構想していきます。そして、単元の相互関連を意識して具体的に時数などの操作をし、時系列で示したものが視覚的カリキュラム表です。

視覚的カリキュラムにを用いた特色の具体化

現行の教科・領域にあてはめにくい今日的な課題（例えば、環境教育、情報教育、人権・同和教育など）を扱うとき、それらは、従来のカリキュラム表には位置づかず、一部の教科や総合的な学習での取り出し指導など、やや場当たりの取組になりやすい現状があります。カリキュラム表の作成を行いながら、現行の教科・領域とのかかわりを考えていくことで、具体的な取組が実現できると考えます。カリキュラム表を作成することで、学習内容の関連化・体系化を考えていくことは、これまで上越で培われてきた教育風土でもあります。その上越の教育の特色を生かすべく、カリキュラム表の活用を進めていきます。

ここでは、学習内容を、その学年で指導する他教科・領域間の関連を図ったり、他学年との重なるの適正化や発達段階、系統性への配慮を行ったりしながら、カリキュラム表へ位置づけていくことを大切にしています。

「視覚的カリキュラム」とは、自校の特色が視覚的に現れるように、単元相互の関連や教科間の関連を明示したものです。様々な学習活動を貫く、特色ある取組が浮かび上がってきます。また、関連を明示することで、教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動のどの単元において学校課題解決に向けたアプローチをするか分かるようになります。

H小学校では、「伝え合う力」をはぐくみ、良好な人間関係づくりを目指した道徳教育の充実に取り組んでいます。そこで、重点教科として国語・道徳・特別活動を、伝え合う力を発揮し、具体的に人間関係づくりを行う場として生活科・総合的な学習の時間、学校行事を設定し取り組んでいます。

カリキュラム表では、国語・道徳・特別活動と生活科・総合的な学習の時間、学校行事のかかわりが分かりやすいように上部に配置し、重点的に取り組む単元を赤で囲むようにしています。単元間のかかわりや、年度内のバランス等が一目で分かるようになっていきます。

視覚的カリキュラム表作成の手順

特色ある取組を実現するために、カリキュラム編成時に、以下の視点から内容の充実を図ります。

- (1) 時間を増やす
 - a. 単元の順番を変え関連付けて指導し、実質的な学習機会を増やす。
 - b. 配当時数を増やす。
 - c. 人（指導者）を増やして、一人当たりの学習密度を増やす。
- (2) 指導方法を改善し内容を充実する
上記の視点を踏まえ、以下の手順で単元題材配当表の見直しを行います。

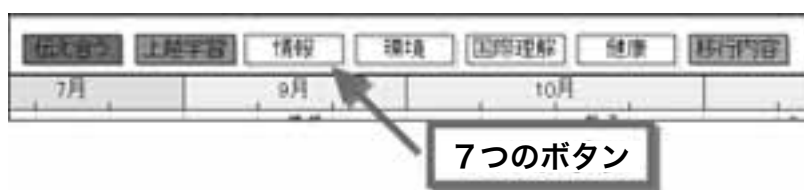
1. 重点を置く内容に、関連の深い単元を見付ける。
2. 関連付けて指導を行うことができないか、行事等を勘案しながら見渡す。
必要なら入れ替え。但し、発達段階もあるので安易な入れ替えはしない。
3. 重点を置く単元の時数を見直す。
必要なら増やす。その分を他の単元で削る。
4. 一人当たりの学習密度を増やすための方法を探る。
人を増やすことはできないか、学年内で工夫できないか。

これらの検討を行う中で内容の重点化が図られ、時間が確保され、戦略が決まります。これらが確かなものになったあとで、指導方法の工夫を考えていきます。

カリキュラムの視覚化 ～7つのボタン～

カリキュラム表の上部には、7つのボタンが並んでいます。参考例では、伝え合う力・人権・情報・環境・国際理解・健康・キャリアの7種類が設定されています。このボタンをクリックすると、それぞれの特色に応じて、重点単元が色づけされて表示されます。

学校が抱える様々な問題は一つではなく、多様です。多様な学校課題解決に向けた取組を、7つのボタンで色分けしながら視覚化することが可能です。このボタンの項目は、設定画面で変更することができるので、学校の実情にあわせて変更・活用することができます。



表示項目の変更例：豊かな心と情報を表示

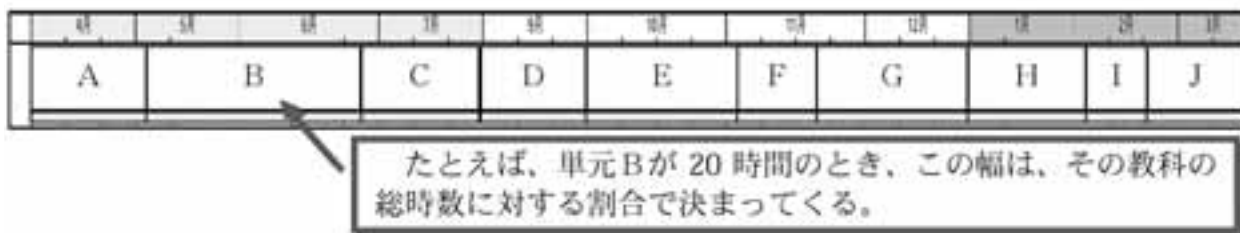
	スイッチ分類
項目1	伝え合う力
項目2	上級学習
項目3	情報
項目4	環境
項目5	国際理解
項目6	健康
項目7	移行内容

ボタンの項目設定画面

視覚的カリキュラムを活用した年間活動計画の策定

視覚的に分かりやすくなったカリキュラム表は、様々な場面で活用することができます。

カリキュラム表は、各教科の総時数をもとにして、各単元の時間の割合に応じた幅で表示されるようになっています。結果として、時間割にしたがって定期的に授業が進められるときの時期を示すこととなります。



カリキュラムの視覚化を目指した、重点単元の設定は、教科担当→学年・学級担任の順番で行います。それぞれの立場から特色ある学校を目指した取組を検討することで、全職員が主体的に学校づくりにかかわっていきます。重点単元の設定に当たり、職員一人一人の重点単元の認識を摺り合わせる過程で、組織の協働性が発揮されます。

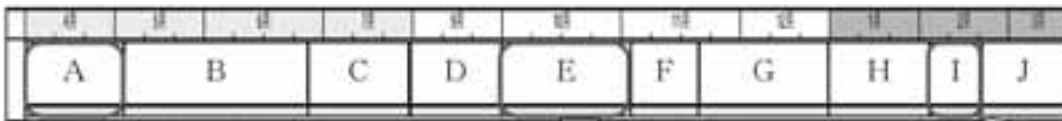
できあがったカリキュラム表は、学年間の取組を情報交換する場面で活用できます。カリキュラム表を並べてみると、どの学年がどの時期に、重点的に取り組んでいるかが見えてきます。全体研修の時に、カリキュラム表を見比べながら、学習内容の関連や学年間の関連を検討します。それにより、さらに学校カリキュラムの特色を明らかにすることができます。

できあがったカリキュラム表は、保護者や地域への学校の取組を紹介するときも利用することができます。色づけされた視覚的カリキュラムを示すことで、学校の特色や重点が把握しやすくなり、地域の理解を得やすくなります。例えば、地域と連携して学習を進めるとき、地域の協力者を募るときも、学習の流れが分かることで、協力を得られやすくなるというメリットがあります。

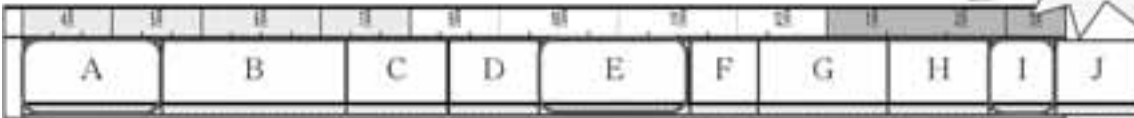
ICTを活用したカリキュラムマネジメント

年度当初、理想に燃えて作られたカリキュラムは、学習が進むにつれて変更を余儀なくされます。目の前の子どもの姿をとらえ、子どもたちのために学習活動を構成していけば、変更は必然です。子どもと共に生成されるカリキュラムは、変化を受けとめる柔軟性をもち合わせる必要があります。

【年度当初の計画】



【学習進行によるずれが生じた状態：特に重点単元が膨らみやすい】



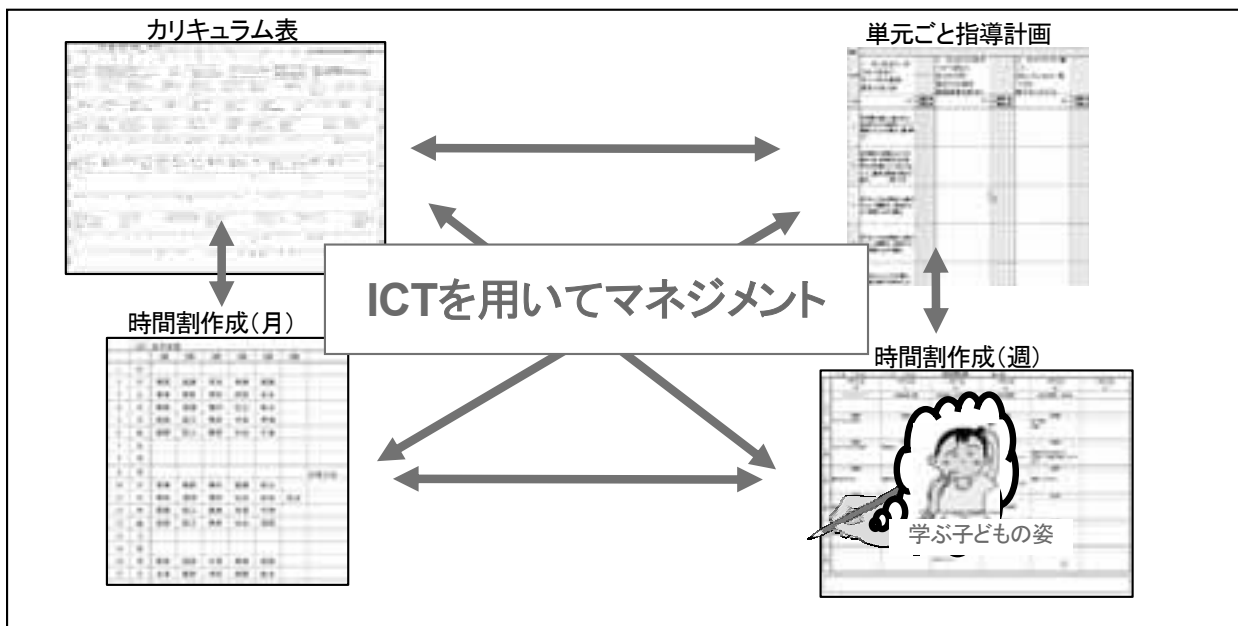
一方で、時間は無限ではなく、新学習指導要領に向けて各教科の標準時数は増えてきます。

担任は、年間を見通した俯瞰的な視野（マクロ的視点）と毎時間の指導（ミクロ的視点）の両方を生かして日々の学習をマネジメントする必要があります。そんな時、時数のずれや余剰時数の現状、達成状況がICTを活用することで、分かりやすくなります。

H小学校では平成21年度の年間授業日数を算出したところ、201日となりました。週授業時数から授業時間を計算すると、6年生

の総授業時数は1082時間となります。教科の標準時数と児童会・クラブ活動・学校行事を合わせた必要時数は、1062.5時間となります。差引で余裕時数は19.5時間と、かなり厳しい現状です。事前の時数の見通しをもとに、カリキュラムマネジメントを行っていく必要があります。また、時間の管理が十分であれば、重点単元に余裕時数を割り振ることが可能になり、より学校・学級の特色を大切にしたい取組を行うことができるようになります。





新学習指導要領の施行に向けて

国語や算数のような教科の学習は、多くは教科書を用いることを前提として学習の計画が構想されています。教科書を用いることを前提とした学習計画を用意しました。その計画をたたき台に重点化を図っていきます。

また、新学習指導要領の実施に向けて、移行内容に印を付けたデータを用意しました。指導内容の漏れ落ちがないようにするためです。

7つのボタンの一つに設定されていますので、どの時期にどの教科で移行期の指導内容を取り扱うのかを把握することができます。

データは年度ごとに更新され、上越市内の小・中学校へ配付される予定です。

DATA 読み込み	社会	90	低学年	上級学年	情報	環境	国際理解	健康	移行内容
5	県の様子 わが国における自分たちの 県の地理的位置 4.7 新潟県産の産物と位置	13							1
6	くらしと土地の様子	10							
7	土地の特色を生かした移住 と工業	5							

ふるさと学習としての活用

上越カリキュラムで作成している「ふるさと学習」の内容も、カリキュラム表の中に組み込まれています。「上越学習」という項目名で設定されています。

上越地域の小・中学校で必須の内容については実線で、各校・各担任が選択し実施する内容については、点線で囲まれます。選択で実施する内容については、それぞれの学校の実情に合わせて内容を吟味して組み込みます。

地域を学ぶ、地域で学ぶ「ふるさと学習」の内容は、生活科や総合的な学習の時間と関連があるものが多いです。カリキュラム表を作成する際には、生活科や総合的な学習の時間で行われる体験活動と関連付けて扱うことができないか考慮する必要があります。

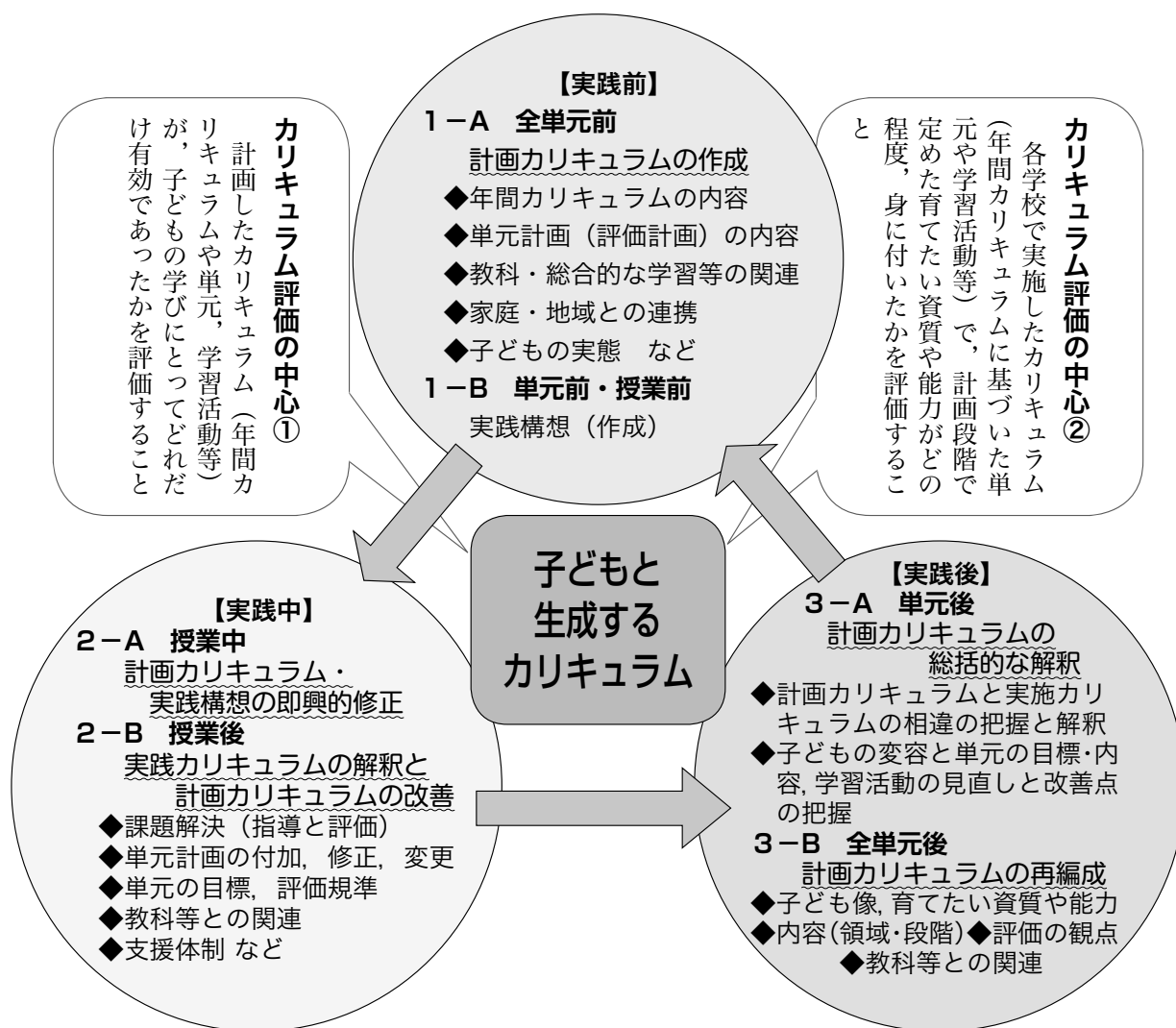
「ふるさと学習」がカリキュラムモデルプランとして準備されることで、「ふるさと上越」を基盤とした教育活動が充実していくことが期待されます。

カリキュラム評価とは

編成されたカリキュラムは、果たして妥当なのかどうか。学級担任のレベルで例にとると、単元によっては教科等の時数が増減します。特に生活科や総合的な学習の時間での体験活動や、理科の実験・観察、社会科の調査活動などは、時間をとりがちです。学期末の単元が駆け足になったり中途半端になったりしては、本末転倒です。

前出の「視覚的カリキュラム表」は、時数の変更が実際のセル幅に対応しており、目で見えて調整していくことが可能になり、見通しをもった単元展開が期待できます。単元によって学校課題を意識し、軽重をつけたり発展的な課題に挑戦したりすることが必要です。

このように、カリキュラムは、実践と評価を繰り返し、時数などの調整をしたり子どもの具体に基づき展開を改善・修正を図ったりすることが不可欠です。編成されたカリキュラムを実践し、その成果をもとに当初計画していたものを修正したり、新たな取組を生み出したりする柔軟さが必要です。

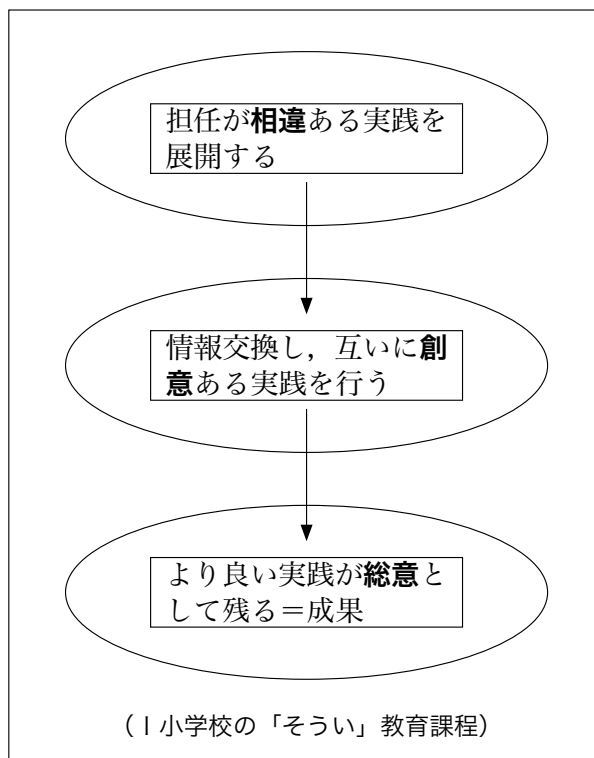


学級・学年のカリキュラムは、多くの学校では、学年会で検討されることでしょう。しかし、学校課題に正対した取組として位置づけるためには、学年間相互の実践について、情報を共有する必要があります。カリキュラム検討委員会や評価委員会といった組織を立ち上げ、意図的計画的な取組を促します。いかに学校全体の「総意としてのマネジメント」を加味するかが大切です。

カリキュラムマネジメントにおいても、協働的な要素を取り入れることは重要です。複数の目でも多面的な評価を行うことにより、より精度の高い評価が期待できるからです。また子どもの具体的な姿をもとに語り合うことで、数値に表れない成果を評価することもできます。

I小学校では、カリキュラム評価～改善のプロセスを即時的に行う取組をすすめています。担任は、学校課題解決に向け個々に実践を行います。その中から成果の上がった事柄を定期的にレポートし、それを持ち寄って、ブレーストーミング形式のワークショップで情報交流を行います。互いの実践に触発されることによって、良い取組を真似たり、自分の学級に合うように取り入れたりする動きが生じます。この繰り返しによって、良いものは学校中に流行り、そうでないものは淘汰されていきます。自然と成果として認知されたものだけが残っていきます。共通理解を促さなくても、一つのベクトルに学校がまとまる良い例です。I小学校では、「そうい(相違～創意～総意)教育課程」と呼んでいます。

またJ小学校では、グランドデザインや学校評価などとも関連付けて、カリキュラム評価を行っています。職員はもちろん、児童や保護者、地域の方々、学校評議員を含めた意見をカリキュラムに反映させています。評価内容も授業づくりに留まらず、グランドデザインや、学校評価と関連付け、学校運営、教育活動全般にわたり、幅広い評価がなされます。このようにして「組織的・協働的な機能」を帯びた組織づくりや場づくりを工夫することによって、学校課題の解決に向けたカリキュラム評価が実現します。



	評価者	実施時期	担 当	評価内容
内 部	職 員	年 2 回 (1・2学期末)	研究・生活指導・体育・学活・ 特別支援各主任	年度の重点指導自校にかかわる内容
		1 学期末	校務分掌担当・教務主任	学校運営全般にかかわる内容
	職 員	随時	研究・生活指導主任	実践レポート（学習指導）情報交換（生徒指導）
	職 員	年数回	校務分掌担当	学校行事，児童開業時の内容
関 係 者	児 童	年 1 回 (2学期末)	研究・生活指導・体育・学活・ 特別支援主任	生活アンケート 毎学期実施の「いじめアンケート」と連動
	保 護 者	年 1 回 (2 学期末)	教務主任・P T A 担当	学校生活の満足度(学習・生活など)
	保 護 者	年数回	各行事担当・学級担任	学校・児童開業時と授業参観(適宜)
	学校評議員	年 2 回	教頭・教務	職員や児童，保護者の評価結果及び学力・体力評価結果等による意見

(J小学校のカリキュラム評価)

カリキュラムの実際

昨年、1年次に示した13の実践モデルは、カリキュラム開発のアプローチの違いから大きく3つのタイプに区別していました。

- A 学習素材を中核に学習内容や学習活動を構成するカリキュラム
- B 「目指す子ども像」「はぐくみたい力」を明確にしたカリキュラム
- C 方法や手法、システムを工夫して開発するカリキュラム

しかしながら、Cについては、カリキュラム開発の方法を工夫することそのものでもあり、カリキュラムの内容構成と関係がなく進められることでもあります。言い換えれば、A,Bと併せてCを有効に機能させることで、より大きな成果が期待できることが分かってきました。したがって、今後は、下記のA,B 2つからカリキュラムを考えていくこととします。

A 学習素材を中核に学習内容・活動を構成するカリキュラム

地域にある学習素材をその特徴から「人・もの・こと」をカリキュラムの核にして開発する手法です。学校内外の物的人的資源を積極的に活用し、学校の強みを活かしてカリキュラム開発していきます。学習素材の教育的価値を探り出し、学習目的、学習内容を明確化し、各教科、総合的な学習の時間の目標及び内容との関連を図りつつ、内容配列を行っていきます。

校区にある具体的な事物を対象としますので、自ずと体験的な活動が主体となり、主として総合的な学習の時間が対象となる場合が多いようです。その場合、一つの学年に留めず、全校を対象にすることで、学校としての特色を生み出すこととなります。

保護者を含め地域に住む人々を巻き込む

ことで、非常にダイナミックな活動となることが多く、地域の活性化に一役かう場合も多々あります。

人……地域の偉人の功績、生き方

「川上善兵衛、上杉謙信、杉みき子」など

もの…自然の事物、歴史的な建物・史跡

「雪、森、川、がんぎ、寺、春日山城」など

こと…産業や文化・社会事象など

「米づくり、地域の特産、祭り」など

* 「人、もの、こと」の厳密な区分が難しいものもあります。子どもの学びの深化により、複数の事象を複合させて扱う場合が多いようです。

要は、何に焦点を当てて教材化し、それを組み合わせることでカリキュラムを構成するかです。各校のオリジナリティーが発揮されるカリキュラムです。

B 「目指す子ども像」「はぐくみたい力」を明確にしたカリキュラム

学校の子どもの実態から課題を明確にし、焦点化した形で子どもに培いたい力を柱とし、その達成に向けて取り組むカリキュラムです。

「目指す子ども像」「はぐくみたい力」を構造的に整理し、その達成に有効に働くように各教科・道徳、特別活動、総合的な学習の時間の有機的な関連を形成・構築し、内容の配列を工夫していきます。上越カリキュラムでは、特に「学力向上を目指すカリキュラム」と「今日的な課題に正対するカリキュラム」の二つに大別し、モデル化することを試みました。その多くは、生活科や総合的な学習の時間が中核に、教科の関連を図る実践となっています。これは、換言すれば、生活科・総合的な学習を軸にすることが、自校化の早道であることを意味しています。カリキュラム開発を自校化する上で、柔軟な取り扱いがポイントになることの証しでもあります。

モデルを自校化するために

ここでおさえておきたいのは、カリキュラムのタイプとして示したA、Bは、それぞれが独立するものではないということです。どちらも、一つの学校のカリキュラムを見つめる方向を変えているに過ぎません。

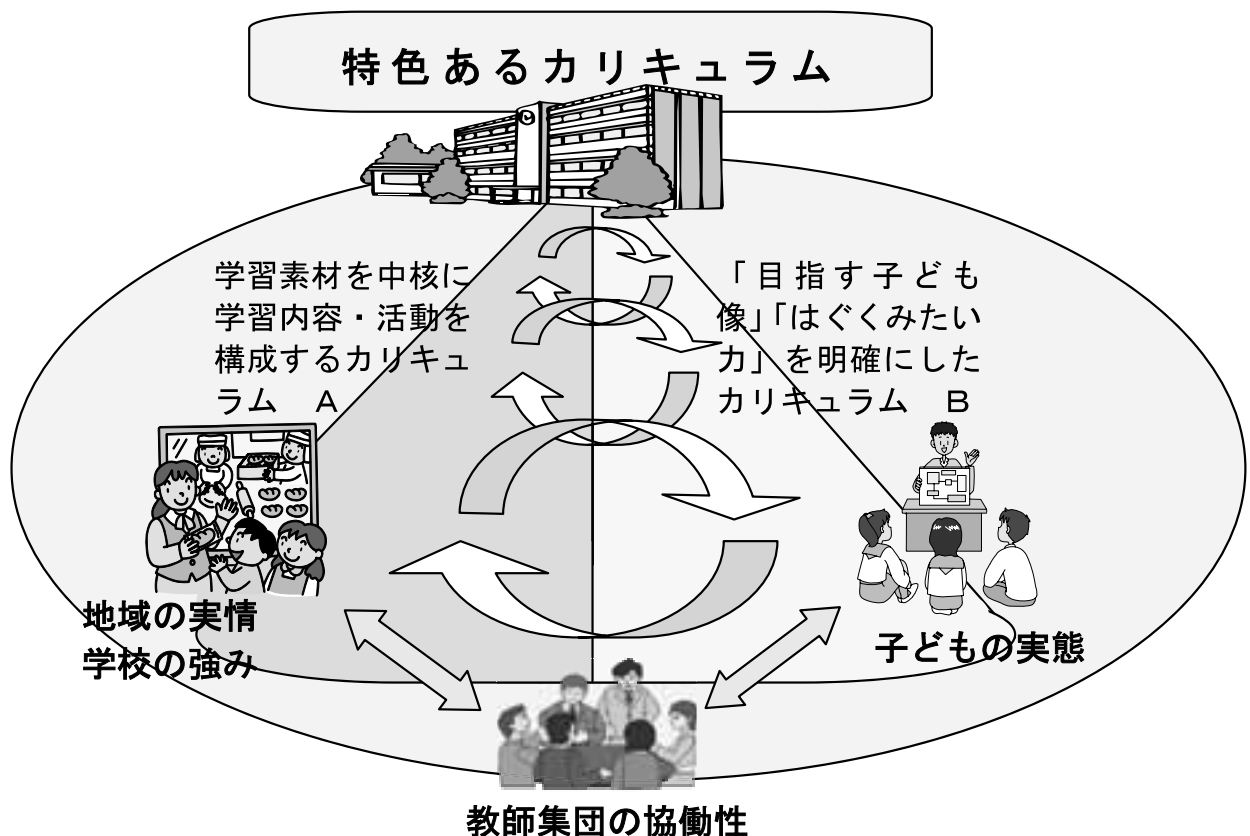
例えば、Aの「雪」や「川」を対象にして追究活動を繰り返していけば、当然Bの「環境教育」にかかわる課題解決に迫る展開が自然に生まれます。逆に「環境教育」を中核にすれば、「川」や「海」の浄化やゴミ問題としての「リサイクル産業」などを素材として扱うことも考えられます。Bのなかの「学力の向上～」も「今日的な課題～」も相互補完的な関係であり、同様です。

要は、どの角度からカリキュラムを見直し、どの切り込み口からカリキュラムを構成するか、そして両者のバランスをどのようにとっていくことが、自校の特色づくりに結びつくかを考えなくてはなりません。二つのアプローチは、実際には相互に関連しあいながら、豊かに一つのカリキュラムを形作っていきます。その過程においては、子どもの事実に基づいた評価や改善・工夫が不可欠です。

また、一つの特色づくりに基づいて教育活動を展開していくことで、意識しなくても新たな価値を生み出したり、別な特色へと深化したりすることも分かってきています。

例えば、環境教育やキャリア教育を突き進めていく過程において、様々な体験や地域の方々との出会いは、子どもたちにとって大きな道徳的な価値を生み出します。言い換えれば、『環境教育』や『キャリア教育』は道徳教育のカリキュラムづくりに通ずるということです。

これらは、子どもたちの実態と、共通のベクトルを有した教師の確かな見取りとの摺り合わせによって生み出されます。教師の柔軟なバランス感覚と教師集団の協働性の発揮によって、ダイナミックにカリキュラムを編成していく、まさに「学校が主体となり、子どもと共に生成するカリキュラム」の具現といえます。



2 特色あるカリキュラムモデルプラン

「夢づくり学校提案」に見る各校の実態

では、実際にどのようなカリキュラムができるのでしょうか？

右表は、平成20年度の市内小・中学校から寄せられた「夢づくり学校提案」事業計画書から、中核となっているキーワードを取り出したものです。

ご覧のように多岐にわたっています。傾向としていえることは、多くの学校で、地域を学びの場として大切にしていることです。地域にある素材や環境を生かしながら、特色ある学校づくりを進めようとする意志がうかがえます。

こうした学校課題とカリキュラムが一致したときに、それは学校職員の意志が一つの共通のベクトルとなり、

生き生きとした学校づくりを実現します。学校間で、カリキュラムづくりに関する情報が共有されることで、さらに共鳴・共振を呼び、カリキュラム開発が活性化していくことを期待しています。

	キーワード	計	小	中
地 域	ふるさとにかかわること	19	16	3
学力向上	自ら考え、自ら学ぶ力	2	2	0
	学ぶ意欲と確かな学力	8	7	1
	思考力・判断力・表現力	3	3	1
今日的課題	豊かな心・思いやり	15	8	6
	かかわり合い	7	5	2
	体力・健康	5	3	2
	環境教育	2	1	1
	キャリア教育	5	1	4
	国際理解教育	1	1	0
	人権同和教育	2	1	1
	情報教育	1	1	0
	特別支援	3	2	1
	その他	3	3	0
	合 計	76	54	22

(夢づくり学校提案事業 各校のキーワード)

モデルプランの示し方について

次章以降に、前述のA,B 2つのタイプから12のモデルを用意しました。これらは、上越市の学校教育目標にある「地域に根ざした信頼される特色ある学校づくり」の実践の方向を受けたものです。各学校が示した課題に正対し、具体的なカリキュラムづくりの手順や方法を前出の3つの指針をもとに構成して示しています。

具体的なモデルの示し方ですが、基本的には、先に提示したS1～S3の指針によります。

「S1 学校課題の把握と解決に向けた戦略へのアプローチ」については、学校の実態や地域性に即した独自性の高いものになります。学校規模や、小・中の別によっても、扱いが違ってきます。したがって、本誌では、「カリキュラムづくりのポイント」として、カリキュラム編成の手順も含め、その概要を提案するに留めました。

各学校が設定した学校課題をもとにカリキュラムを構成していく際に、ヒントとして使いやすいように、編成手順が分かるように一般化を試みました。それだけでは、具体的にイメージしにくいため、それぞれのカリキュラムで期待される活動を例として盛り込みました。これらのモデルをもとに、ぜひ自校の特色あるカリキュラムを開発していただきたいと考えています。

ここで留意して頂きたいのは、モデルの冠にある「〇〇教育」とは、あくまで学校課題を特徴的に示したものであるということです。前提として、地域の特性や子どもの実態から導き出した職員共通の認識があり、「〇〇教育」はあくまで特色づくりの視点であり、キーワードに過ぎません。自校の実態や取組の評価によって幅のある可変的なものであることが、カリキュラムマネジメントの根本にあることを忘れてはいけません。

郷土の偉人に学ぶ 上杉謙信が生きたふるさと

◆ カリキュラムづくりのポイント

■ 郷土に生きた「人」を学ぶことのよさ

上越市の学校教育目標では「ふるさとを愛し、学ぶ力、豊かな心、健やかな体をもって自立と共生ができる子どもを育てる」ことを掲げられています。また、新学習指導要領では、教育の理念として新たに、「伝統と文化を尊重する」、「我が国と郷土を愛する」ことを踏まえた教育活動の充実が求められています。郷土に生きた「人」について学ぶ活動をカリキュラムに位置つけることで、次のような成果が期待できます。

- ・その人の生き方や考え方を探ることで、自分を見つめ、これからの自分の生き方や在り方を考えることができる。
- ・その人を探るために地域の人々とふれ合い、かかわり合うことで、地域に生きる人々の思いや願いを知り、人とかかわり合うよさを実感し、地域に貢献しようとする。

上越には、たくさんの偉人がいます。子どもがその偉人や地域を学習対象とし、今を生きる地域の人々とふれ合う活動を進め、その人の生き方や考え方について探る活動をカリキュラムに位置つけていきます。郷土を学ぶことを通して、ふるさと上越に愛着を感じ、ふるさと上越のよさを実感し、「上越をよりよくしたい」「上越で生きていきたい」と願う子どもを育てていきたいと考えています。

【上越市の偉人】

- ・戦国武将「第一義」 上杉謙信
- ・日本のワインの父 川上善兵衛
- ・日本のスキー伝道師 レルヒ少佐
- ・日本画家 小林古徑
- ・郵便の父 前島 密
- ・日本のアンデルセン 小川未明
など

■ カリキュラム編成の手順

1 地域の教育資源や学習素材を発掘・収集・検証することで教育的価値を見いだす

各学校において、地域の教育資源や学習素材を教育活動に活用するためには、教職員自らが地域を歩き、地域住民とふれ合うことで発掘・収集していくことが大切です。その中から、子どもの実態や地域社会の要望などを考慮し、教育的価値を見いだすことで、特色あるカリキュラムを編成していきます。

K小学校では、「上杉謙信」にかかわる学習素材を発掘しています。上杉謙信の居城であり、今も観光客でにぎわう春日山城趾、上杉謙信が幼いころ修行した春日山林泉寺、上杉謙信を祀った謙信公祭など、職員が積極的に地域に出かけ、地域の人々とふれ合うことで、子どもの学習に生かせる学習素材を収集します。それを持ち寄り、ワークショップを開いて検証することで、カリキュラムにどのように位置つけていくか考えました。

そして実際に単元を構想し、子どもと共に実践することで、学習素材そのものの可能性や他教科等との関連、そしてカリキュラム自体についても評価をしています。

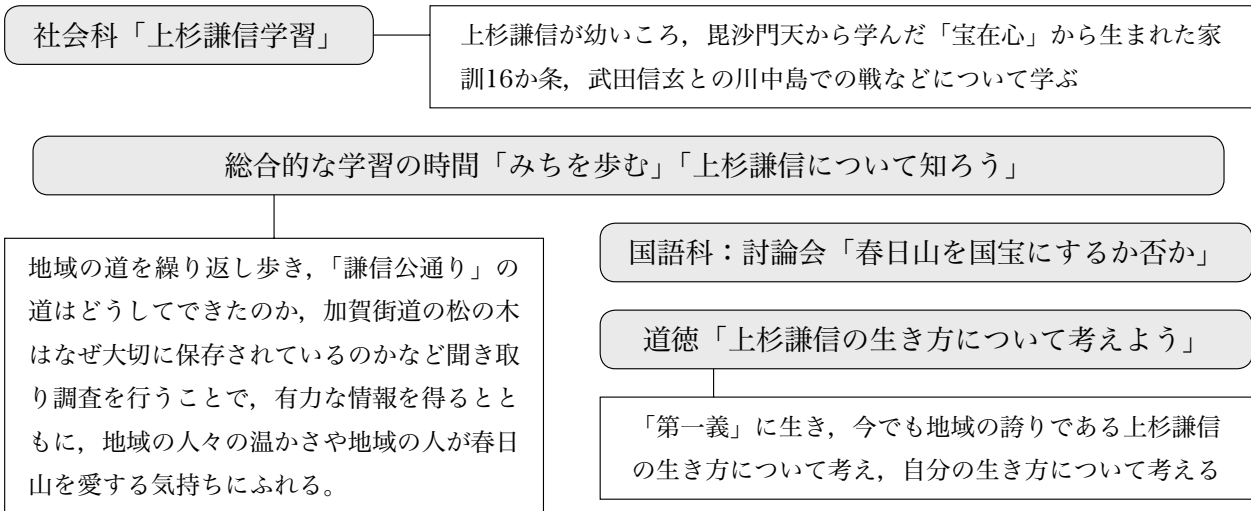
2 地域の学習素材を核としたグランドデザインやカリキュラム、大単元を構想する

地域の学習素材を教育課程の核に据え、グランドデザインを構想します。そのグランドデザイン

から各学年の発達段階に応じ、地域の学習素材が生きてはたらく教科・領域等で大単元を構想し、それを中軸にした各学年のカリキュラム表を構築していきます。

総合的な学習の時間は子どもが各学校の地域を対象とし、年間を通して息の長い活動を構想することで、地域に出かけ、地域を歩き、諸感覚を通して様々な気付き、思いや願いをもつことができます。地域の「人・もの・こと」とふれ合うことで、地域のよさを実感することができます。また、道徳の時間で郷土愛、自然や崇高なものとのかかわり、自分の生き方などを関連付けていくことで、子どもにとって自分事としてとらえることができます。したがって、地域の学習素材を生かせる総合的な学習の時間を教育課程の核に据えることで、各教科・領域等と関連させやすく、ダイナミックな活動を展開しやすいと考えます。

K小学校の6年生では以下のような大単元を構想しました。



子どもにとって、各教科、道徳の時間、総合的な学習の時間、特別活動…といった枠組みはありません。子どもの中にいくつもある「意欲」「探究心」「思いや願い」の線をどのように束ねていくか、関連付けられるようにしていくかがカリキュラムづくりの大切な部分であると考えます。子どもにとって「地域」ほど身近なものはありません。いつでもその場所に行くことができ、自分の思うように活動することができます。その地域を有効活用したカリキュラムづくりが学校にとって一番自然な形であると考えます。

3 「地域を学ぶ」「地域で学ぶ」ことについて共通理解を図ることで、知識の習得や理解を目指すとともに、資質・能力をはぐくむカリキュラムを構想する

郷土を学習素材として取り上げて学習を進めようとするとき、その地域の特色について必要最低限の知識を習得する必要があります。子どもが地域を対象にして追求活動を進めていくとき、「地域を学ぶ」ことによって、得た知識と関連付けたり活用したりすることで追求活動が深まります。また、「もっと知りたい」「もっと調べたい」という追求意欲をもつ姿が期待できます。

その後、「地域を学ぶ」ことで、子どもは地域という学びのステージに立ちます。追求活動を進めながら地域の人々とふれ合い、地域に愛着をもち、自分も地域に生きる一人の人間としての自覚をもち始めます。子どもはこれらの一連の学びを通して、学び方やものの考え方、人とのかかわり方や自分の生き方を考えていきます。これが「地域で学ぶ」姿であると考えます。このとき、「地域を学ぶ」「地域で学ぶ」ことが螺旋状に絡み合うことから、単に知識の習得を目指すだけでなく、どのような資質・能力をはぐくみたいかというねらいを定めることが重要です。そのためには、息の長い活動を保障し、長いスパンの中で子どもの変容や成長を評価していくことが大切です。これらのことを教職員間で共通理解を図ることで、各学年の子どもの発達特性に合わせたダイナミックなカリキュラムを構想できるようになります。

◆ 学習内容の構造化と体系化へのアプローチ

■ 視覚的カリキュラム（小学校6年生での実践）

並べる！		調す！		単元・題材 配当一覧表		第6学年		伝え合う力		人権		道徳		環境		国際理解		健康		
		4月		5月		6月		7月		9月		10月								
行事等																				
国語	続けて本に親しみ、自分 みようと対話しよう はじめ『カレーライス』 に『愛 漢字の形と音・意 義』を 漢字の読みかたを つなぐ	大命を授け で、自分の 考えをもと 『生き物は つながりの	短歌・俳 句の世界 を 『ガイドブックを作ろう の『春へ ／『よりよい文庫に』 漢字の広場 漢字の読みかたを（エッセ	読書の世界 を深めよう の『春へ 漢字の広場 漢字の読みかたを（エッセ	学習討論会を しよう 漢字の大き さ（漢字と漢 字）を知ろう	「船／リ んご」 同じ調を もつ漢字 文字の結 ぶかた	ともに考えるために伝えよ う 『みんなで生きる町』 漢字の広場 日本で使う漢字													
学級活動	○高学年のスタート ○学級の縦断作り ○学校生活をリードし よう	○あいさつ運動をしよ う ○体育祭を成功させよ う ○学年部SSB	○思い出に残る書道体験学 習しよう（2）	○1学期を振り返ろう ○かけはし運動をふり 返って ○新しい夏休みにする ために	○2学期のスタート ○2学期の学級作り ○かけはし遠足を成功させよ う	○よりよい学級作 めざして ○音楽と人間関係														
道徳	4-6愛校心 2-1礼儀 4-1社会的役割の自 覚と責任	1-1節度ある生活の 美 4-0国際理解と親善 4-4勤労、社会への 奉仕	1-0自由・規律 3-1自然愛、動植物愛護 2-0信頼友情、異文化の協力 1-4正直誠実・明瞭	3-2生命の尊厳 2-5尊厳と規則 4-0国際理解と親善	4-7郷土愛 2-1礼儀 2-2思いやり、親切	4-2権利・義務 4-4勤労、社会への奉仕 4-5家賃費 4-1社会的役割の自覚と														
総合	○みちを歩く ・いろいろな道歩き、自分なりの気持ち、道に対する 思いや願いを書きためていく。	○道徳の人と出会う ・書道体験学習で道徳に生きる多く の人々とふれ合うことで、その人々 の生き方を考える。	○人と出会う ・地域に生きる人々と出会い、その人の生き方を 知る。 ・様々な職業の人々と出会い、その人の生き方を 知る。	○人と出会う ・地域に生きる人々と出会い、その人の生き方を 知る。 ・様々な職業の人々と出会い、その人の生き方を 知る。	○ロングワーク ・長い距離を歩くことで、周りの ・道を歩いている自分と人生を 合わせ、これからの生き方に	上杉謙信の生き方をさぐる														
社会	『わ たし の地 域を めぐ	1 米づくりのむら から古墳のくにへ の大仏	2 聖武天皇と奈良 の文化	3 源頼朝と鎌倉幕 府	4 上杉謙 信学習 9人の武 将と全 国統一	5 徳川家康と 江戸幕府	6 江戸の文化 をつくりあげた 人々	7 明治維新をつく りあげた人々	8 世界に 広がる日本											
算数	4 1 分数と約数 2 3 4	3 分 数 と 約 数	4 いろいろな立 方体	5 面積	6 単位量あたりの大き さ	7 分数のかけ 算とわり算(1)														

- ◆始めにカリキュラムの中核とする教科・領域等をカリキュラム表の中心に位置づけます。次に、はぐくみたい資質・能力や学習内容を考慮し、関連させる教科・領域等をその周りに位置づけます。そして関連させる単元を色付けし、指導時期や子どもの学びを見通し、大単元として構想していきます。
- ◆K小学校の6年生は総合的な学習の時間を中核に据えました。様々な道を歩くことで、地域を知り、道に対する思いや願いを書きためていきます。また、様々な人々と出会うことで、「人の道」についても考えていきます。社会では、戦国時代初期を学習した後、「上杉謙信学習」を実施し、上杉謙信の生涯や上杉謙信が貫いた「第一義」について学習します。総合的な学習の時間における学びをもとにして、国語で自分の考えたことを伝え合う学習活動を関連させていきます。これらの学習をもとに、地域の人や様々な職業の人々と出会い、その人の生き方を知ったうえで、道徳の時間に自分の生き方について考える活動を展開していきます。

◆総合的な学習の時間をカリキュラムの中核に

□総合的な学習の時間のスタートや学びのステージはどの学年も同じ場所や対象から



◆活動内容ばかりではなくはぐくみたい資質・能力から活動を構想する

□大単元では、横断的なねらい（はぐくみたい資質・能力）を設定する

◆まずは「地域を学ぶ」ことで、「もっと知りたい・調べたい」という意欲をもつ

■ カリキュラムの実際

1 地域の教育資源や学習素材をもとに、カリキュラムを構想する

(1) 総合的な学習の時間をカリキュラムの中核に位置つける

地域という学習素材を中核にカリキュラムを構成するための一番の近道は、総合的な学習の時間をカリキュラムの中核に据えることだと考えます。各学年の子どもの実態や発達段階に応じて、地域と密接にかかわる活動を構想できるからです。

(2) 総合的な学習の時間はどの学年も同じ対象や場所からスタートする

K小学校では、どの学年も「春日山」を総合的な学習の時間のスタートとしています。3年生の「地域探検」、4年生の「愛鳥活動」、5年生の「米作り」、6年生の「みちを歩む」は春日山から、または春日山を目指して春日山の麓に広がる地域を自分の足で歩き、諸感覚を通して自分の課題を見つけていきます。そして地域の人から学んだり、地域の人と共に活動したりする活動を保障しています。活動の内容は違っていても、常に春日山は子どもにとっての学びの起点であり、学びのステージなのです。

このように、総合的な学習の時間をカリキュラムの中核に位置づけ、数年にわたって繰り返し「地域を学ぶ」「地域で学ぶ」ことで、地域と密接にかかわり、地域を愛する子どもになっていきます。

(3) 育てたい力、はぐくみたい資質・能力を明確にする

活動内容が学年によって違っていたり、子どもの追求テーマが個によって違っていたりしたとしても、はぐくみたい資質・能力が明確であれば、教師は的確に子どもの学びを見取り、評価し、支援していくことができます。また、子どもが必要な知識を習得する場については、子どもの実態に合わせて設定していきます。

K小学校では、はぐくみたい資質・能力を次の4つに定めています。

- | | |
|-----------|--------|
| ・課題を見付ける力 | ・追究する力 |
| ・表現する力 | ・振り返る力 |

年間活動計画を構想するとき、各学年の発達段階や活動に合った、はぐくみたい資質・能力を設定し、評価できるようにしています。

また、各教科・領域等との関連を大切にした横断的な大単元を構想するとき、各教科・領域等の独自の評価項目を設定するとともに、はぐくみたい資質・能力についても評価規準を設定します。このことで、「地域を学ぶ」「地域で学ぶ」ことの両立を図っていきます。

2 子どもの発達特性と各領域・教科等との関連を図った大単元の実践

～6年生の実践 郷土の偉人に学ぶ～

(1) 「地域を学ぶ」

6年生は、総合的な時間の活動テーマは違っていても、繰り返し地域とかかわることで、多様な切り口から地域について学びを深めてきました。また、6年生という発達特性から、ある程度専門的な知識を習得・活用できる力を身に付けてきていると考えられます。

K小学校では、地域の代表的な偉人である「上杉謙信」をテーマに学習を進めました。社会科の歴史学習「戦国時代の3人の武将（織田信長、豊臣秀吉、徳川家康）」の単元が終わった後、その時代に共に生きた地域の英雄「上杉謙信」について学ぶ場を設定しました。上杉謙信の生涯の年表作り、上杉謙信が心を寄せた「毘沙門天」、武田信玄との激戦「川中島での闘い」、そして信念である「第一義」。上杉謙信と春日山について学ぶことで、子どもは上杉謙信についてもっと「詳しく知りたい」「調べてみたいな」という思いをもちました。

「地域を学ぶ」活動をせずに「郷土の偉人の生き方について知ろう」といきなり呼びかけても、子どもは何を足がかりに追究活動を進めたらよいか焦点を絞れません。どの学年も学びのステージが同じことが、子どもの追究活動の手掛かりや意欲を生み出します。

(2) 「地域で学ぶ」

地域について、その素地を習得した子どもは、自分の追究テーマを考えます。これまで繰り返し地域で学んできた子どもであれば、「そこへ行って詳しく調べよう」「地域の人に聞いてみよう」という解決方法が浮かんできます。

上杉謙信について調べているK小学校では、「謙信が小さいころ育った林泉寺にいきたい」「林泉寺の住職さんなら有力な情報を教えてくれるかも」「謙信公祭があるけれど、かかわっている人たちは謙信に対してどのような思いをもっているのかな」というような解決方法が真っ先に上がります。そして、実際に話を聞いたり、謙信が住んでいた場所に行ったりすることで、謙信の生き方や地域に今もなお語り継がれる上杉謙信について心を寄せる姿が見られました。

追究活動の解決方法はややもすると、書籍やインターネットに頼りがちですが、これまで地域の「人・もの・こと」とかかわり、学びを積み上げてきた子どもにとって、地域自体を活用することが最良の解決方法となるのです。

(3) 自分たちの体験や経験が各教科・領域等での学びの必然を生む

地域について多様にかかわり、学びを積み重ねてきた子どもは、やがて自分を育ててくれた地域に対して、感謝の気持ちをもったり、親しみを感じたりしてきます。地域を学び、地域で学んできた自分について自身の変容や成長を振り返り、実感することで、地域に貢献したいという気持ちが生まれてきます。

K小学校では、国語科の学習で「春日山を国宝にするか否か」というテーマでディベートをしました。春日山が世界的にも有名になることから賛成意見が多い中、「春日山に観光客が増えると自然環境が乱れて鳥が住めなくなる」という反対意見が出ました。この意見をもとに、子どもの中で葛藤が始まりました。「観光客が捨てていったゴミは、私たちがボランティア活動をして拾う」「春日山の地域みんなが団結してボランティア活動をしようと呼びかけよう」「春日山は有名になるのを望んではいないと思う」これらの意見は、まさに総合的な学習の時間で学んできたことや道徳の時間で学んできたことが生かされ、そして自分の地域への愛着がにじみ出た発言ととらえることができます。

子どもが自分の中にある知識や経験を引き出し、結び付けて考えたり、新しい考えを生み出そうとしたりするとき、子どもの学びは一層深まっています。



◆「地域で学ぶ」では、これまでの学び（知識・資質・能力）が存分に発揮・活用される活動を展開する

□地域の人とふれ合い、かかわり合う機会を設定する

◆各教科・領域と関連させることで、自分の学びに自信をもち、学びが一層深まる

◆ マネジメントと組織づくりへのアプローチ

■ 保護者や地域との連携，協働

学校は保護者及び地域住民と連携を深め、教育活動を進めていく必要があります。それぞれ本来の教育機能を発揮し、全体的にバランスのとれた教育が行われることで、子どもは充実した生活を送り、豊かな心をはぐくみながら安心して学習に取り組むことができます。

そのためにも、教育活動の計画や実施の場面では、家庭や地域住民の積極的な協力を得ながら、子どもにとって大切な学習の場である教育資源や学習環境を積極的に活用していくことが重要です。地域社会で人の温かさを知り、地域に感謝の気持ちをもちながら育った子どもは、やがて地域に生き、郷土のために貢献する人材になると考えます。

地域学習が充実すると、子どもはその成果を保護者・地域に発信したいと考えます。それを保護者・地域の人たちから認められることで、学習活動について達成感をもつとともに、自分の地域を誇りにもちます。一方、地域にとっても、子どもが発したうねりが保護者を巻き込み、やがて地域をも巻き込む大きな渦になっていくことで、地域活性化に向けての一つの起爆剤となり得ます。このようにして、地域と学校が共に歩み寄り、互いに信頼し合い、支え合う関係がつけられます。

K小学校では、郷土の偉人として「上杉謙信」を学習素材として取り上げ、謙信の生き方や春日山について子どもが自ら学ぶカリキュラムを実施しています。春日山地区では、8月末に行われる「謙信公祭」をメインとし、平成21年NHK大河ドラマ「天地人」で脚光を浴びている春日山城趾や上杉謙信を観光資源として、地域を盛り上げようとしています。まさに、両者が互いを必要としているのです。

■ 子どもの学びを信じ、バランスを考えた活動の構想

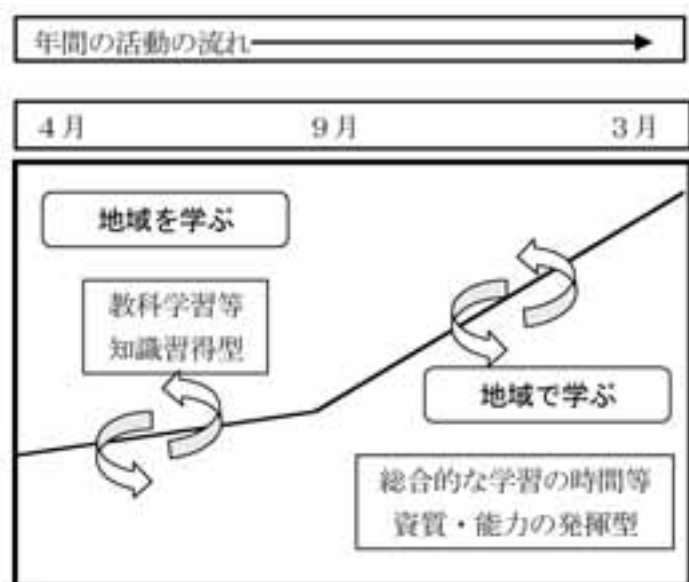
「人」を学習対象とし、子どもの心に迫る活動にするためには、子どもの思いや願いを大切にしたい活動を展開していく必要があります。教師が押し付けるのではなく、子どもの学びを信じ、息の長い活動の中で、人の生き方や在り方について考える、地域を愛する気持ちが生まれてくるという共通理解（指導観・子ども観）をもって臨まなくてはなりません。

「地域を学ぶ」段階では、各教科等と関連させ、基本的な知識を習得できる活動構想が必要です。そのうえで「地域で学ぶ」段階では、自分なりの問題解決を目指して、もち合わせた知識や学び方、ものの考え方などを総動員して活動に当たることができるようにしていくことが大切です。

そのためには、単なる知識習得を目指すのではなく、その知識をどのように活用しているか、人とかかわることで何を心得、何と結び付けて考えているかなど、資質・能力についての評価を大切にしていける必要があります。

このような評価を積み重ねていくことで、子どもにとっていつ知識が必要なのか、どのような資質・能力が発揮されたとき、知識が一層身に付いたかなどが見えてきます。

両者のバランスを考えたカリキュラムづくりが子どもの思いや願いを実現するための一番の近道であると考えます。



「雪」のふるさと上越に学ぶカリキュラム

◆ カリキュラムづくりのポイント

■ 上越市における「雪」のふるさと上越に学ぶ活動の位置づけ

上越市では学校教育の課題として「ふるさと上越を愛し、学ぶ力、豊かな心、健やかな体をもって、自立と共生ができる子どもを育てる」ことを掲げています。新学習指導要領の改善点でもある「伝統や文化の尊重」も踏まえつつ、自分の生まれた地域と触れ合い、かかわり合いながら、ふるさと上越のよさやすばらしさを体得し、愛着がもてるようにしていくには「雪」は格好の学習素材といえます。

「雪」は上越に暮らす人々の冬の生活に深くかかわっています。したがって、子ども達は雪を通して人々の営みに気づき、その息づかいを感じ取ることができます。

上越市の学校教育として、「地域に根ざした信頼される特色ある学校・園づくり」には、以下の実践の方向が掲げられています。

○地域や学校・園の実態を生かし、目指す子ども像やはぐくみたい力を明確にしたカリキュラム開発

また、「未来を拓く『生きる力』をはぐくむ小・中学校教育」の「夢・希望・未来をつなぐ教育の推進」には、以下の実践の方向が挙げられています。

○環境への感受性と環境に配慮した態度を育てる。

子どもたちが具体的に「雪」を観察し、体験し、共感的に理解できる地域に根ざした学習を大切に、その基礎に立って、しだいに視野を広げ、未来を開いていくたくましい思いやりのある子どもを育てたいと願っています。

■ カリキュラム編成の手順

1 学校の地域性や特色が生きる学習素材を見付けること

地域や学校の実態を生かした特色ある学校づくりと強く結び付けた自然に学ぶカリキュラムは、実は既にどの学校においても行っている生活科や総合的な学習の時間のカリキュラムの中にあるのです。それを教職員組織がいかに意識して、指導計画に明確に位置づけていくかが課題となります。

Y小学校は、「もったいない」という言葉を合言葉に、各学年に応じた資源の節約等の実践を進めていく中で、自分たちの学校の「雪冷房」に着目するようになりました。冬の「雪」を、夏に活用する雪エネルギーのすごさに気付いたのです。

雪を使つてのアイスクリーム作り、雪中保存食品の試食、温度差発電の実験等の活動が考えられてきました。また、全校で雪室を作り、その中に米やジャガイモなどの食材を保存し、6月に取り出してその食材を給食で使って、その風味を楽しみました。

雪冷房などの当校の特徴や地域の環境、生活を取り上げて、雪と共に生きている地域の環境やくらしへのはたらきかけについて理解を深めさせていきたいと考えています。さらに、雪に対して少しでも前向きにいらしていく気持ちを向上させ、雪のふるさとである地域への愛情をはぐくんでい

きます。また、地球の環境にかかわる課題や、自分たちにできることを考えて実践していくことを通して、自分の生き方を見つめる力を付けていきたいと考えました。

2 季節や行事などの適切な活動時期を生かすこと

カリキュラムの作成においては、1年間の季節や行事の流れを生かすことが大切です。地域や校内の行事等にあわせ、学習内容を結び付けたり、関連付けたりすることが大切です。

<季節の変化を追う>

定期的なまわられるような季節発見コースを設定し、季節の変化を追っていきます。児童は散歩気分でコースを回りながら、季節による木々の変化や雪の降り方（積もり方）や、人々の生活の変化を発見します。

<地域の行事を楽しむ>

上越地方には、冬に独自の行事があります。その行事を楽しむことを軸に活動が構想できます。スノーフェスティバル、さいのかみ、鳥追いなど、児童は行事を楽しみながら全身で「冬（雪）」を感じていきます。

<校内の行事等で全校のみんなで楽しむ>

各学年で行う活動とともに、全校や、全校縦割り班の仲間を楽しむ活動を設定していきます。グラウンドでの雪室作りや児童会の行事のスノーフェスティバル（雪上運動会）などを設定し、全校で「冬（雪）」を感じていきます。

<人の技にふれる>

庭木を守る冬囲いをしている方、雪で食品を保存する方法（「にお」）で、今でも自分の畑で収穫した野菜を保存している方など、地域にはさまざまな技をもった人がいます。その人に出会い、技にふれることにより、児童はますます地域に興味をもち、地域に生きる人たちのすばらしさに目を向けていきます。

3 各教科等との関連を見通すこと

年間指導計画の作成に当たっては、各教科等の内容を確認し、関連的な指導が可能な単位については、相乗効果が得られるよう実施時期や指導方法を調整していくことが大切になります。関連的な指導は、Y小学校では特に国語、社会、理科、生活科、総合的な学習の時間（エネルギー環境教育）及び特別活動において大切にしていますが、横断的・総合的な学習を行う観点から総合的な学習の時間との関連が多くなっています。

4 外部の教育資源の活用及び連携を図ること

「雪」のカリキュラムを効果的に実践するには、保護者や地域の人、専門家などの様々な人々の協力、社会教育施設・設備など、様々な教育資源を活用していくことが大切です。

上越地域では雪エネルギーを導入している施設（安塚小学校、安塚中学校、雪のまちみらい館、やすらぎ荘・ほのぼの荘、雪だるま物産館、ふれあい昆虫館 他）があります。児童はその施設での雪の利用の仕方や概要を知り、地域と雪との深いかかわりについて実感します。また、そこで働く人とコミュニケーションをとることで、そこで働く人の苦労や工夫に気付くことができます。

また、以下の外部講師の方から、「雪」に関する具体的なご指導をいただくことができます。

- ・NPO雪だるま財団（「雪冷房施設の見学」「雪室作り」「雪エネルギーの活用」）
- ・上越科学館学芸員（「雪を知ろう」「酸性雪について」「雪を科学しよう」）
- ・地域の理科支援員（「雪を科学しよう」「アイスクリーム作り」）
- ・地域の方（「にお（雪を使った簡易冷蔵庫）作り」）

◆ S2 学習内容の構造化と体系化へのアプローチ

■ 視覚的カリキュラム例（小学校3年生での実践）

		4月		5月		6月		7月		9月	
行事等		迎える会		体育祭		宿泊体験		林間学校		祖父母参	
国語3年H21		つづけてみよう 一 本と出会う、友だちと出会う きつつきの商売 漢字の音と訓		二 まとまりに気をつけて読もう ありの行列 漢字の広場① 国語辞典を使おう わたしと小鳥とすずと		三 分かりやすく書こう おもしろいもの、見つけた／様子をつたえる くわしくする言葉 漢字の広場② 道あんないをしよう／たしかめなが		四 本と友だちになろう 三年とうげ 本は友だち／本のさがし方 漢字の広場③ キリン へんとつくり		五 進んで話し表しよう 「分類」というビュー 反対の意味の	
ふるさと学習		安塚つとどんなまち		家の近くの目慢探し ・聞き取り調査 ・安塚探検隊 ・現地での目慢発表							
社会3年		学校のまわり				市のようす				スーパーマーケットではた	
理科3年		●しげんたんけんをしよう	1植物を育てよう	2チョウを育てよう		3植物のからだをしらべよう	4こん虫をしらべよう		○夏休みに研究しよう	5花と実をしらべよう	6日なたと
音楽3年		☆階名になれよう ・友だち・春の小川(共) ・ドレミで歌おう・茶つみ(共) ◎海風きって ・ゴーゴーゴー(体育祭応援歌) *春日山節				☆リコーダーに親しもう ・小鳥のために(鑑) ・小さな花 ・かりかりわたれ ◎さよなら			☆いろいろな音のちがいをかんじとろう ・うさぎ(共) ◎おかしなすきなまほう使い ・茶つみ(鑑)・金かんがっきの音楽(鑑) *音楽フェスティバルの曲		
体育3年		体ほぐしの運動 多様な動きをつくる運動⑥	かけっこ・リレー	鉄棒運動⑥		ネット型ゲーム		浮く運動、泳ぐ運動			表現、リズム
図工3年		ためしなながら	きせつの中で	これでかけるよ		くっつけくっつけ	グルグルかくかく	風パワーぜんかいウインドカー	心キラリ	絵はがき	み
		1	5	4		2	3	6		4	

◆ 「『雪』のふるさと上越」の学習の流れを「ふるさと学習（総合的な学習の時間）」と「教科」との関連を図っています。関連した単元（活動）が分かりやすいようにカリキュラム表の「ふるさと学習」の上下に「国語」と「社会」の一覧を配置しました。

◆ 「ふるさと学習」を核にしながら、それぞれの学校の地域性や特色が生きる学習素材（「雪」）を年間通して観察や体験できるように計画を立てています。

■ カリキュラムの実際

1 「雪」にかかわる年間スケジュールの作成

地域の1年間の季節の移り変わりや行事の流れを生かすことが大切です。地域や校内行事にあわせ、学習内容を結び付けたり、関連付けたりしていきます。また、保護者や地域の人、専門家などの様々な人々の協力、社会教育施設・設備など、様々な教育資源を十分に活用していきます。

「雪」がなければ実践ができないのではなく、「雪」のない時期において「雪」がどう生かされているか、また、「雪」を通してこの地域の人々はどのようにくらししているか、その息づかいを感じ取らせていくことが大切になります。年度当初に各学年で行う活動、学年部で行う活動、全校で行う活動について調整をします。また、外部の教育資源を活用する活動については、計画的に関係団体の方と連絡を取り合う必要があります。

〔「雪」にかかわる年間スケジュール〕

*は地域行事 ☆は校内行事 ◎は外部の教育資源活用

	1, 2年生	3, 4年生	5, 6年生
4～6月	<ul style="list-style-type: none"> ・春の自然観察 ☆雪室開き（雪室で保存した食材を給食で味わおう） 	<ul style="list-style-type: none"> ☆雪室開き（雪室で保存した食材を給食で味わおう） ◎雪冷房施設の見学 	<ul style="list-style-type: none"> ☆雪室開き（雪室で保存した食材を給食で味わおう） ・清水、湧き水を調べよう
9～12月	<ul style="list-style-type: none"> ・昔の雪遊び・冬の支度、冬の工夫 	<ul style="list-style-type: none"> ・冬の暮らしや雪の利用に関する聞き取り調査 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の農業と水
1～2月	<ul style="list-style-type: none"> ◎「雪」を知ろう（上越科学館の見学や雪にかかわる実験の観察） ☆雪室作り，食品保存 ・雪遊び *キャンドルロードでの雪燈籠作り ☆スノーフェスティバル(雪上運動会) ◎雪を使っのアイスクリーム作り ・冬芽の観察 	<ul style="list-style-type: none"> ◎雪冷房のしくみについて（NPO雪だるま財団の方から雪エネルギーのしくみや利用法について学ぶ） ◎「にお」作り ☆雪室作り，食品保存 ☆スノーフェスティバル(雪上運動会) ・動物の足跡を追いかけてみよう，自然の音を感じよう（クロスカントリースキー） 	<ul style="list-style-type: none"> ・雪国にかかわる物語を読む ☆雪室作り，食品保存 ☆スノーフェスティバル(雪上運動会) ・雪の上でのかんじき綱引きや斜面すべり（圧力や摩擦） ・雪の下の植物の様子を観察 ◎雪を科学しよう ◎酸性雪について ・雪に守られている植物を調べよう



雪室の見学



雪燈籠づくり



におづくり



雪室づくり

2 外部の教育資源の活用及び連携を図った実践

◇「動物の足跡を追いかけよう」

冬、雪の上ではよく動物の足跡が見られます。クロスカンリースキーを使って雪原に出て、動物の足跡をたどりながら、雪国で生きる野生動物の行動などを観察しましょう。

- (1) 必要な道具 動物の足跡図、メジャー、わりばし、ビニル袋、ルーペ、デジタルカメラ、クロスカンリースキー用具、記録カード、活動エリア図
- (2) 適した活動場所 雪原、林や森の中
- (3) 主な学習活動
 - ①活動計画を立てる……雪の上では、夏では見ることのできない動物の足跡や食べ跡、糞などを発見しやすいことを話します。6人ぐらいのグループごとに活動計画を作成します。
 - ②主な活動例……林や森をグループで散策し、動物の足跡を見付けます。動物の足跡に沿って追跡し足跡の種類、間隔、食べ跡などを調べます。
 - ③調査方法例
 - ・デジタルカメラで足跡を記録する。
 - ・足跡の大きさや形、指の数、歩幅、前足と後ろ足の区別を記録する。
 - ・食べた跡、糞をした場所など、発見した場所や時刻を記録する。
 - ・歩幅が変わったところ、複数の足跡があるところなど足跡の変化があったところで野生動物が何をしたのか想像し、カードに記録する。

◇「雪を科学しよう」

雪は私たちにいくつもの姿を見せてくれます。様々な雪の姿を調べることを通して、雪の不思議さを科学しながら、総合的に「雪」について調査したことをまとめていきます。

- (1) 必要な道具 スコップ、温度計、デジタルカメラ、クロスカンリースキー用具、ルーペ、ビーカー、はかり、電卓、記録カード、活動エリア図
- (2) 適した活動場所 雪原など雪が自然に積もった場所
- (3) 主な学習内容
 - ①活動計画を立てる……雪は、降っているときや積もった後、どのように変化するのか、調べる計画を6人ぐらいのグループごとに作成します。
 - ②主な活動例……雪の穴を掘り、断面に現れた雪の層の様子を観察し、カードに記録する。各層から雪を取り出し、その粒の大きさや結晶などを観察し、分類して記録する。雪の結晶の違いをルーペを使って観察する。
 - ③調査方法例
 - ・デジタルカメラで雪の各層を記録する。
 - ・各層から雪を取り出し、雪の結晶と雪の粒の大きさを記録する。
 - ・降ってくる雪の結晶を記録するには、板に黒い布を巻き付け屋外で十分冷やしてから降ってくる雪を直接板に載せ、ルーペ等で観察する。

(参考文献 「たのしいスキー・雪遊び事例集」 新潟県学校スキー研究会)



雪うさぎ



そり遊び



雪迷路遊び



保存した食品

◆ マネジメントと組織づくりへのアプローチ

■ 「ふるさと学習の記録」を大切にしたい評価・改善のサイクル

Y小学校では、毎学期学級（学年）ごとに「ふるさと学習の記録」を作成しています。「実践事項」と「内容と反省（評価の仕方）」を時系列と写真で詳しく記述するとともに、この一連の活動において「身に付いてきた力」及び「次学期に関する考察と今後の見通し」についてまとめています。その過程において、活動内容の変更を年間指導計画に朱書きしたり、エネルギー環境教育と教科等との新たな関連（矢印）を明記したりしています。「来年度の『ふるさと学習』の年間指導計画を考える際に参考になるように」という意識をもちながら記述することが、より学校の地域性や特色が表れてくると考えられます。

「身に付いてきた力」は4つの観点により評価しています。年間指導計画は、①活動のねらい②年間指導計画（表）③評価の観点で構成しています。前述の3年生の評価の観点は以下の通りです。この評価の観点により評価していきながら、次学期や次年度の活動を改善していきます。

<課題を設定する>

- ・地域のよさに関心をもち、地域の自慢を見付けようとする事ができる。

<追求する力>

- ・聞き取りや観察、体験活動をしながら地域のよさを見付け出すことができる。

<伝える力>

- ・調査した得られた情報から、自分の考えを分かりやすくまとめることができる。

<自己の生き方を見つめる力>

- ・地域のよさを大切にしたいという願いをもち、自分にできることを考えることができる。

また、年度末には実践内容や成果を「パンフレット」にまとめ、保護者や地域の方に配付して意見や感想をいただき、活動の改善に結び付けています。

■ 「雪への想い」を広げ、雪を再発見していく活動を大切に

Y小学校では「エネルギー環境教育推進委員会」を設置し、エネルギー環境教育を推進するとともに各学年の年間指導計画の調整や集約を行っています。また各学年のテーマに対して専門性を交え複数の教師がチームを組んで協力して指導に当たることが必要です。担任だけでなく級外職員がどこかの学年とTTを組み活動を進めています。

「ふるさと学習」に取り組むとき、取り上げるテーマについて担任がすべて分かっている必要はないということはありません。むしろ専門的なことは知らなくても、子どもといっしょに学びながら活動を進めていくという構えが大切になります。活動する中で生じてくる問題の解決策に困ったときなどは、専門家の方を訪ねて話を聞いてくるなど、どんどん地域の方々や専門家の皆さんに協力していただきましょう。

「雪のふるさと」である上越地域には、「雪を利用する」（雪冷房、雪室等）という考えもありますが、「雪と親しむ」行事（校内スノーフェスティバル、キャンドルロード、アイスクリーム作り等）や、「雪を想う」お話（昔話、杉みき子さんのお話等）がたくさんあります。まず、担当する教師が自分の時間を有効に使いながら、地域の人々や保護者の方とのかかわりを深めていくことが大切です。児童と共に教師も「上越の自然（雪）」から学ぶという姿勢をもちたいものです。そして、「雪国に住む幸せ」を児童一人一人の心にしっかりとほぐくむとともに、「雪国に生まれてよかった」と思える児童を育てていきましょう。

「米作り」から見る上越市に学ぶカリキュラム

◆ カリキュラムづくりのポイント

■ 上越における「米作り」活動の位置づけ

子どもたちは、毎日のように米を食べています。日本人の歴史や食生活に深くかかわっている米は、上越市の特産物でもあります。一歩郊外に踏み出せば、そこには、広大な田園や美しい棚田が広がっています。身近な米について調べたり、自分たちの手で育てたりしていくことにより、上越における生産者や消費者の米に寄せる思いや願いに直接触れ、「米作り」の現状を見つめることができます。そして、これからのふるさと上越の産業全体について思いを馳せることができる活動へと発展させていくことができる可能性を秘めています。

一方、新学習指導要領の改正点として、「伝統や文化の尊重」が挙げられています。また上越市学校教育目標では、「ふるさと上越を愛し、学ぶ力、豊かな心、健やかな体をもって、自立と共生ができる子どもを育てる」ことが掲げられています。自分の生まれ育った地域で様々な人と触れ合い、かかわり合いながら、ふるさと上越のよさやすばらしさを感じ、愛着がもてるようにしていくには「米」は格好の学習素材といえます。

たくさんの学校が米作りを総合的な学習の時間の中核に据え、地域の人々と直接触れ合いながら追求を連続する活動を通して、ふるさと上越のよさを見つめ直す子どもを育ててほしいと願っています。

■ カリキュラム編成の手順

1 目的の明確化とカリキュラムへの位置づけ

地域の特色を生かした栽培活動を取り入れたカリキュラムづくりは、生活科や総合的な学習の時間を中心に、実は既に多くの学校でも取り組まれていることでしょう。「米作り」においても然りです。学校田を所有していたり地域から借りたりして米作りに取り組む学校も多いはずですが、それらをもとに「ふるさと」に目を向けた展開はそう多くないようです。栽培活動を通して、子どもたちに「どんな力を育てたいのか」、「体験活動を通して何を学ばせたいのか」を考えたときに、「ふるさとを見つめ直す」視点として位置づけることに大きな意義があります。

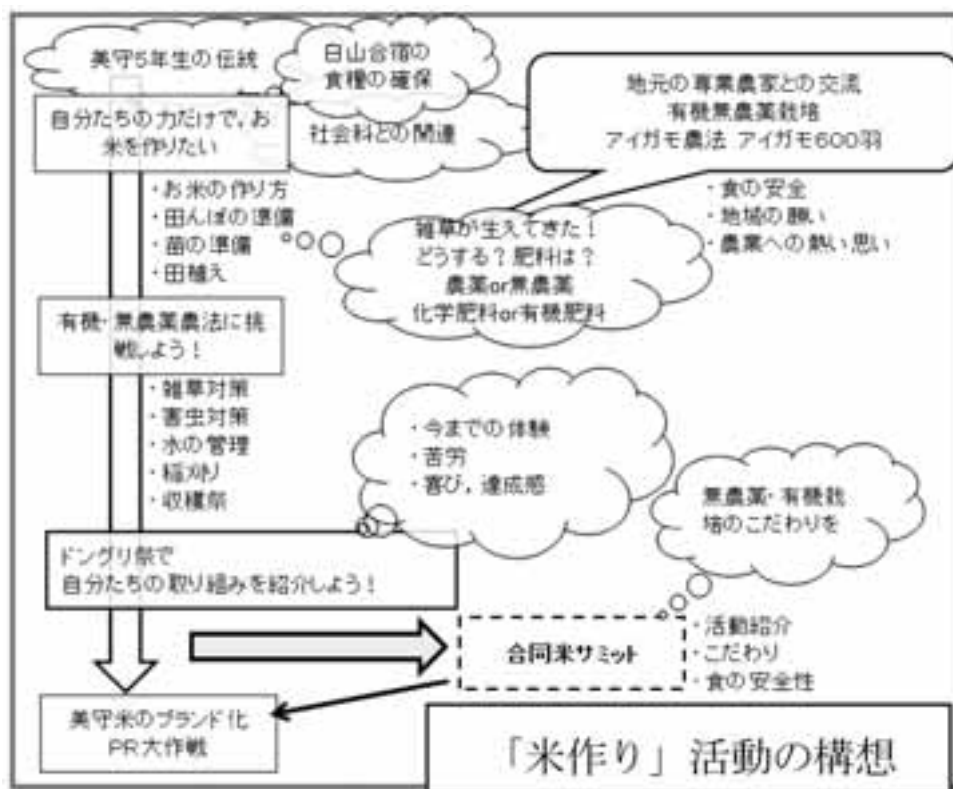
また、栽培活動を進めていく上では、「時機」というものがとても重要になってきます。この「時機」を失することによって、期待される教育的効果が半減されてしまうこともあります。そのためにも、その地域に合った、その土地の時機に適した栽培方法を習得してきている地元の営農家や地域の特産物の事情をよく知っている関連団体との連携が必要となってきます。これらのことを、教職員自らが意識して活動を仕組み、カリキュラム表に位置づけていくことが大切です。

H小学校では、全校を通して地域の特色である「農」「食」を中核にカリキュラムを組んでいます。各学年の生活科・総合的な学習の時間に中核的な栽培体験の活動を仕組み、他教科と関連させながら、取り組んでいます。

これらの活動を支えるには、専門家の知識や知恵が必要不可欠となります。そこで、4月当初、地元の営農家の協力を得、各担任と打ち合わせをする機会を設け、年間の活動の計画を立てました。また、H小学校として、地域の地産地消グループや関連団体にも協力を呼びかけ、生活科や総合的

な学習の時間の内容を説明する会を開き、地域の特色ある情報を得たり、協力体制を確保したりすることができました。

その中で、アイガモ農法による有機無農薬栽培を行っている地元の専業農家の協力を得ることになりました。右の「米作り」活動の構想は、地元の営農家と打ち合わせを行い、担任が年間の栽培活動の流れに合わせて総合的な学習の時間の活動を構想したものです。



2 特別活動との関連を図ったカリキュラムの作成

生活科や総合的な学習の時間においては、活動の拡散や集約によって追究の連続が図られます。特別活動における学校行事等は、拡散した活動を結合・集約し、発信・表現する活動として位置づけることができます。地域や学校行事等に合わせ、学習内容を結び付けたり振り返りの場を設けたりして、子どもの意識が連続するように展開することが大切です。さらには、学校だけではなく、保護者や地域を巻き込んだ活動を展開することによって、ダイナミックな活動を構想することができます。

H小学校では、米作りに合わせて年間の教育期を下記のようにI期～V期の5つに分けています。各期の学校行事に、それぞれ意味をもたせ、米作りにかかわった学習や体験活動を据えて各学年の学習や活動が結合・集約しています。

教育期	主な行事	主なねらい
I期（4月～5月）	田植え	全校合宿の主食の確保を目指して、田起こし～苗植えの一連の活動をする。
II期（6月～7月）	学校泊による全校宿泊体験活動	昨年度の栽培した米を用いて、自給自足体験をする。
III期（9月～10月）	文化祭	生活科、総合的な学習の時間の学びをまとめ、地域へ発信する。
IV期（11月～12月）	収穫感謝祭	収穫物を持ち寄り、指導いただいた地域の方々に感謝の気持ちをもつとともに、発信する。
V期（1月～3月）	卒業式	今年度栽培した米を用いた卒業のお祝い給食を通じて、1年間のまとめとする。

◆ 学習内容の構造化と体系化へのアプローチ

■ 視覚的カリキュラム（小学校5年生での実践）

5年 年間カリキュラム表(知)		1期			2期			3期	
教育期	日	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	
理科		天気と気温の変化 [10] 植物の発芽と成長 [12]	田植えの時期に合わせて、「天気と気温の変化」と平行もしくは先に実施すると、より効果が上がると思われる。	生命のたんじょう [9]			花から葉へ [6] 台風と天気の変化 [4]	流れる水のはた	
社会		わたしたちの生活と食料生産 [27] 米づくりのさかんな産内平野	水産業のさかんな筑前市	これからの食料生産とわたしたち			わたしたちの生活と工業生産 [2]	自動車をつくる工業 どんぐり祭の準備発表の発表方法や発表の仕方について関連させて学習を進める。	
国語		本に楽しみ、人間を見つめよう [1] お願いの手紙、お礼の手紙 [5]	要旨をとらえよう [6] 調査・取材活動と関連させて実施する。	インタビュー名人になろう 半年の絆にいとむ [13]	千草の絆にいとむ [13]		伝え合って考えよう [14] 読書の広場 未読読書行状簿	目的に合った伝え方を考えよう [14]	
どんぐり活動		1期：自分たちの力でお米を作ろう			2期				
		白山合宿に向けて、お米作りに挑戦しよう！	田おこし、代かき、田植え、波板づくり	草が生えてきた。農業を使う？使わない？	無農薬有機農法に挑戦！アイガモ農法		稲刈り、はさがけ、脱穀、精米、収穫の喜び	お米の収穫祭をしよう！	
道徳		暑さでまげろ、寒さでまげろ（不機嫌） 学年新聞作り(寛容) 場所も場所(個性尊重)	すてきなおりもの(誠実) 1枚の卒業がけ(生命尊重) 日本の心と祭り(礼儀)	ミレーとリリー(物類) スイミー作歌・(公正) おさがり(感謝・反省) 世界の文化遺産(郷土愛)	自然を守る(自然愛) チャイキンのマンゴー(誠実) 一筆に声をしよう(敬愛)		富士観測所・(不機嫌) やっぴいご、しなればなら 私達の委員会活動(勤労)	嵐が来た(敬けん) 島の仕事(勤労) 家族の紹介(家族愛) 文技のため息(自由祝賀)	
学級活動		学年組作り 学年目標 食事のマナーを考えよう よくマイクに向かって 学年目標の朝のめあての振り返り	体育大会のめあてをもち 本取学習の仕方を考えよう 安全な生活(避難訓練)	畜舎の衛生週間について 読んで四書等を判別しよう すこやか健康ネットワーク	白山合宿をしよう 秋祭準備委員会参加 1学期の振り返り(振り返り)		学年組作り 生活習慣病予防教室 運動会への手紙を書こう 学年目標の朝のめあての振り返り	どんぐり祭を企画させよう 2日 祭活動を見よう	
図工		自剪をもって [2]	トローリかたまり [4]	ゲートを抜けて ゴールイン [6]	教科書美術辞 [4]		遠い景色と近い景色 紙をくりぬいて [6]		
家庭		家庭科の学習を生活に活かそう [1] 見つめよう家庭生活 [9] ①家庭の仕事を見つめよう	見つめよう家庭生活 [8] ②できる仕事を増やそう	見つめよう家庭生活 [2]			料理って楽しいね、おいしいね [12] ①1日の食事を調べよう ②簡単な調理をしよう、作ってみよう ③なぜ食べるのか考えよう		

- ◆総合的な学習の時間である「どんぐり活動」を中核に据え、特別活動における学校行事等に向け、各教科・領域において、関連を図りながら活動を結合・集約していくように活動を構想していきます。
- ◆知、徳、体のバランスを考えながら、関連する教科等に矢印を引き、色分けをして視覚的にとらえやすくしていきます。
- ◆色分けした教科の単元に吹き出しを付け、生活科や総合的な学習の時間との関連付けの理由を書き込みます。
- ◆実践を通して、効果があったことや改善点等を吹き出しの種類を変えて書き込み、次の活動の構想を練ります。

■ カリキュラムの実際

1 全校宿泊体験活動に向けての米作り

H小学校の5年生は、次年度の全校宿泊体験活動の主食確保をきっかけに米作りに取り組んでいます。「全校のみんなに美味しいお米を食べてもらいたい」という願いが伝統的に受け継がれているのです。

本年度は、アイガモ農法による有機・無農薬栽培に取り組んでいる地域の専業農家への取材活動を機に「安心・安全なお米作りをしたい」という強い思いをもつようになりました。その思いから、学級での話し合い活動で、5年生23名全員が協力して、無農薬・無化学肥料栽培に挑戦することになりました。

学校のグラウンド横で稲作をしている農家の方をお願いをして、水田の一部3アール分をお借りすることになりました。



スコップを使って
田おこし



ペレットまき



しっかりと打たれた
波板



かわいいアイガモが
到着

2 地域の専業農家の協力を得て

(1) 田おこしも手作業で

「みんなで協力して」という5年生のこだわりから、田おこしから手作業で行うことにしました。地元の専業農家の方から指導を受け、わずか3アールではありましたが、手作業での田おこしの大変さを体感することができました。「いつまでやるの?」「終わるまで!」担任とのやりとりでこんな声も聞かれましたが、すべての作業が終わった後に「やったあ、やっと終わったあ」「自分たちの手で最後までできたね」という子どもたちの声があちらこちらからあがってきました。「みんなで協力して最後までやり抜いた」という達成感と充実感が、「代かきや田植えへも手作業で」という意欲の向上につながったのでした。

(2) 雑草対策は…、害虫対策は…

「雑草対策は、ペレット（米ぬかを固めたもの）をまくといいそうだよ」

「ドジョウを放すといいそうだよ」「アイガモを放すといいつて」

安心・安全なお米を作るにはどうしたらよいかを地域の専業農家の方や家の人から情報を収集し、毎日のようにどろんこだらけになりながら実践する5年生の姿がありました。ところが、一つ大きな問題が発生しました。子どもたちが調べてきた雑草対策を行うには、常に田に水を張っておかなければならないのです。借りた田は、地主さんと地続き、しかも、地主さんは、有機・無化学栽培をやっているわけではありません。当然、時期になれば田から水を抜かなければなりません。困った子どもたちは、「波板作戦」を調べ上げてきました。地主さんの了解を得て、水が漏れないように自分たちの田んぼの周りに波板を打ったのです。単に波板を打つといっても簡単にはいきませんでした。強風が吹いた翌日には、波板が倒れてしまっていたのです。「どうしたら風が吹いても倒れないようにすることができるのだろうか」「波板を挟み込むように杭を打つといいんだって」「もっと深く波板を打ち込んだ方がいいんだって」とすぐに解決策を調べてきました。

アイガモ農法にチャレンジするころには、ペレット等の取組が功を奏し、田にほとんど雑草がない状態でした。「アイガモは、雑草を食べるだけでなく、田の土をかき回したり、フンが肥料になったりして稲にいいんだって」ということを調べ上げていた子どもたちは、アイガモの世話を一生懸命に行って

いました。

アイガモも引き上げ、実りの秋を迎える頃、田の様子を見に行ってきた子どもたちが、「大変だあ。イナゴが大発生している。このままじゃ、稲がみんな食べられちゃうよ」と、教室に駆け込んできました。今まで無農薬に挑戦してきた子どもたちは、「イナゴ捕獲大作戦」を考え出しました。また、祖父母の時代には、捕まえたイナゴを佃煮にして食べていたことを調べ、イナゴの佃煮作りにも挑戦しました。さらに、イナゴの佃煮は、昔の人にとっては貴重なタンパク源であることを知り、命を無駄にしない昔の人の知恵に驚いていました。

子どもたちは問題が発生するたびにみんなで話し合い、解決策を考えたり、地域の専業農家の方やお家の人から情報を収集したりしながら、一つ一つ問題を解決していきました。

3 文化祭、収穫感謝祭に向けて

稲の収穫の時期になり、穂の様子、実の入り方を見た子どもたちは、次年度の宿泊体験活動の主食を確保できたことに安堵するだけに止まらず、さらに「おいしいお米」をとこだわりをもち、稲の乾燥方法をはさかけで行うことにしました。後日、脱穀したお米を地元のJAに依頼して行った等級検査では、コシヒカリ1等Aランクをいただくことができました。「安全・安心なお米を作るために」「おいしいお米を作るために」自分たちにできることは、みんなで協力して何でもチャレンジしてきた成果の表れの一つとなりました。それと同時に、5年生の子どもたちにとって、胸を張って誇れる「こだわりのお米」となったのです。

この「こだわりのお米」を作り上げた体験が、文化祭で販売するお米の価格を決めるとき、「23人みんなで協力したんだから、230円」という発言につながっていきました。また、収穫感謝祭では、「お世話になった方々に、自分たちが育てたおいしいお米で『究極のおにぎり』を作って食べていただきたい」という強い願いにつながり、感謝の気持ちを伝えることができました。

4 米サミットに向けて

米サミットに向けて、近隣の小学校の取組と自分たちの取組を比較する機会を設けました。他校の発表を聞いているうちに、子どもたちは「広い田んぼでは、機械化も必要ではないか？ 農薬も必要なのではないか？」という疑問をもつようになりました。そこで、自分たちが住んでいる地域の農家の現状について詳しく調べることになりました。ある子どもが家の人に農薬のことについてたずねてみると、「人はかぜをひいたとき薬を飲むだろ。稲も同じなんだよ。稲も病気になったとき薬が必要なんだよ。農薬は、稲の薬なんだよ」という答えが返ってきたのです。自分たちの取組に絶対的な自信をもっていた子どもたちでありましたが、この言葉を聞き、その心が揺らぎ出したのです。さらに、北陸農政局の方を講師として迎え、上越の米作りの現状について学習しました。そこでは、米の消費の落ち込みや国の減反政策、後継者問題等々、機械や農薬を使わざるを得ない現実を知らされたのです。自分たちが考えていたように、簡単には、無農薬、有機栽培ができないことを知らされたのです。そして、自分たちが体験したことを振り返りながら、これからの上越の米作りについて真剣に考えるようになったのです。



イナゴ捕獲大作戦



実りの喜びを
かみしめながら



おいしいお米は
いらんかね



お家の方と一緒に
究極のおにぎり作り



ぼくたちは手作業だったけど、機械で田おこしをすると…

◆ マネジメントと組織づくりへのアプローチ

■ 学校としての協働体制づくり

生活科や総合的な学習の時間において、ダイナミックな活動を構想するとき、保護者や祖父母、地域の方や関連団体等の協力は不可欠です。保護者や祖父母への協力の呼びかけは、担任が直接かわることができますが、地域の方や関連団体等になると新規で開拓する難しさがあります。そこで必要になってくるのが、学校として地域や関連団体等に協力を呼びかけ、協働体制を構築する機会と場の設定です。H小学校では、年度当初から計画して、「教育ファーム」や社会福祉協議会・区の老人クラブとの協働体制を組むなどの取組を進めました。こうした動きは、一学年の取組に留まらず、全校的なものへと発展していきました。各学年の要望を教務が受け、教頭を窓口地域の方や関連団体と折衝する協働体制ができあがったのです。栽培活動のまとめとして位置づけた収穫祭では、5年生は、地域の専業農家から指導を受けて育てたおいしいお米で「究極のおにぎり」を保護者と共に考え出してにぎりました。6年生は、地域のそば打ち名人と一緒に手打ちそばを作り、1年生は、区の老人クラブと一緒に育てたサツマイモを地域の方から分けていただいた初殻で焼き芋を、2年生は、地域の地産地消グループの方から教えていただいた白菜と大根の漬け物を、3年生は、区の豆腐作り名人と一緒に作った豆腐を豚汁の具材として提供しました。また、オープニングイベントでは、4年生が作ったもち米で餅つき大会を行いました。保護者はもちろん大勢の地域の方々が駆け付け、息を合わせて餅をつく姿に、子どもたちは感嘆の声を上げていました。まさに、学校と保護者や祖父母、地域や関連団体と協働して創り上げた収穫感謝祭になりました。

■ 「米作り」から見えるふるさと上越

子どもたちは「米作り」を通して、地域の人々と直接触れ、地域に住む人々の「米」に対する思いや願いを直接肌で感じ取ることができます。そして「米作り」を通して、子どもたちは地域のよさを改めて実感します。そして地域に住む人々の温かい人情に触れます。そして、その地域にはぐくまれた伝統・文化に誇りをもつようになります。こうした思いに裏打ちされた種々の取組は、そのまま学校の特色づくりに結びつくのです。

H小学校の子どもたちが指導を受けた地元の専業農家は、アイガモ農法による有機無農薬栽培を行っています。その指導のおかげで、子どもたちは、「安心・安全でおいしいお米を作り上げた」という自信をもつことができました。しかし、近隣の学校と米作りに関する情報交換会を行ったとき、農薬や機械化の良さも知ることができました。3アールの田んぼを、力を合わせて手作業だけでやってきたことが本当に正しかったのだろうかという疑問をもつようになりました。そして子どもたちにとって、地域の農業の現状を見つめるきっかけとなりました。

こうした新たな課題は、子どもたちだけではなく、私たち大人にとっても、たくさんの視点を与えてくれます。「確かに手作業で米作りをすると、お米を作る楽しさを肌で感じる事ができて楽しい。でも、広い田んぼなら、機械の力も必要なのでは？」「農薬を使わないで栽培すれば、確かに安心・安全なお米ができる。でも、その分収穫が減ってしまう。営農の立場からいえば、それは必要なことではないか。」こうした課題は、そのままこれからの上越市の農家の課題でもあります。

こうした学びを経た子どもたちは、今後の上越市の在り方について、様々な角度から考える視野を広げたことでしょう。「米作り」から見えるふるさと上越とは、将来の上越を支える子どもづくりにも結びついています。

目指す「子ども像」「はぐくみたい力」の育成を目指すカリキュラムモデル<学力形成>

言語活動を通して、学びを深め、 言語力をはぐくむカリキュラム

◆ カリキュラムづくりのポイント

■ 上越市における言語力の位置づけ

上越市では、生活科や総合的な学習の時間への先駆的な取組と並行して、学びをもとに交流・発信する活動が盛んに行われています。それに伴い、子どもたちは、相手や目的に応じた「話すこと、聞くこと」の知識や技能を身に付けてきていると言えます。

しかし、上越市の「全国学力・学習状況調査」（平成19・20年度）の結果から、次のことが指摘されています。

- ・ 基礎的な知識は概ね定着しているが、論理的な思考や「情報の取り出し、利用・熟考」としての読解力などが十分とはいえない。
- ・ 国語科では、「目的に応じて必要な情報を取り出して整理し、分かったことや考えを明確にして書くことができる力を高めること」にやや落ち込みが見られる。

この状況を踏まえ、上越市では、学校教育の目標として、「確かな学力の向上を図り、学び続ける基礎を培う」学習指導を掲げ、そのために全教育活動で言語活動を充実させながら、言語を活用する能力を培い、指導方法や指導体制、学習活動を改善・充実していくことを「実践の方向」として示しています。

また、新学習指導要領では、総則 第4「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」として、

各教科等の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること。

と謳っています。この言語活動を支える言語力育成の中核を担う教科として、国語科の改定のポイントに注目すると、

生活や学習に必要な能力を身に付けるため、記録、報告、解説、推薦などの言語活動を充実すること

が挙げられています。

今後は、言語を活用する能力である言語力を思考力、判断力、表現力等を支えるものにとらえ、その開発を図ったカリキュラムの作成をさらに進めていく必要があります。

■ カリキュラム編成の手順

1 言語力育成の必要性を全職員が共有する

言語の役割は、思考力、判断力、表現力等の知的活動の基盤であること及び他者や社会と関わる上での感性・情緒の基盤であることです。

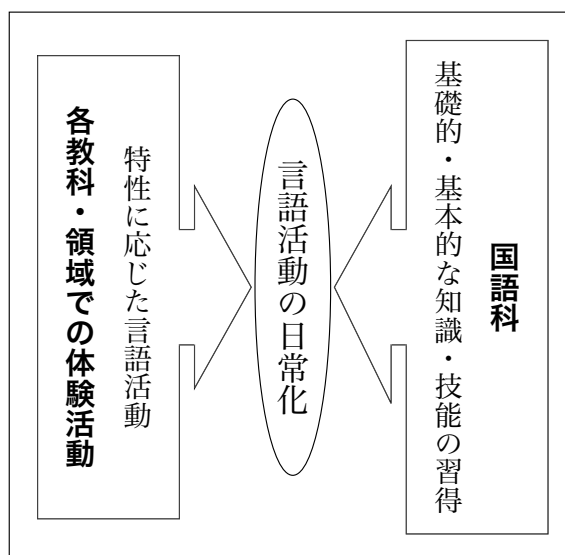
このような言語の役割の認識のもと、自校の教育活動や子どもの学力実態から言語活動に関する課題が浮かんできたら、それを支える言語力をはぐくむ必要性について全職員で確認する場をもちます。全職員共通理解のもとで、学習活動はもちろんのこと、子どもの日常生活における言語環境の整備に取り組む体制づくりを行います。

2 言語力育成の場を検討する

語彙量やその使い方に関する知識・技能の豊かさが、思考力、判断力、表現力等の育成、及び他者や社会との関与を支えます。この言語活動を支える言語力を育成する場の中核となるのが国語科です。

ただし、国語の教科書に載っている教材だけでは、子どもに言語について学ぶ目的意識が芽生えにくいことがあります。

そこで、国語科と他教科等との関連を図り、横断的単元を構想する必要があります。子どもに感動をもたらす体験活動に基づいて、言語活動の充実を目指した単元を構想することにより、表現欲求が高まり、言語の活用を生じさせる学習過程を構成することが必要です。



3 各教科における言語活動の充実を図る

各教科等では、国語科で培われた言語力を活用した言語活動を取り入れることにより、学習をより深めることができます。一例を挙げてみましょう。

国語科	各教科等	言語活用場面
インタビュー・メモ	社会	施設見学，地域探検等で，知りたいことを聞き取る。
手紙文	総合的な学習	見学，インタビューの依頼状や礼状を書く。
説明	算数	自分の解決の仕方を友達に説明する。
話し合い	理科	仮説を立て観察・実験し，その結果に基づいてグループで考察し，文章にまとめ，発表する。
	体育	ゲームの作戦について図示したり動きを伴って確認したりする。
	学級活動	学級の問題として取り上げたことについて，グループでまたは全体で意見交流をし，より良い方向を出す。
文意の読み取り	音楽	歌詞の解釈を通して演奏表現に生かす。
文章表現	図工	自分の作品の見どころや，友達や画家の作品を鑑賞した感想を文章で表す。
	家庭科	布製品や料理の作り方を，順序に気を付けて表し，その通りに活動する。
新聞作り	社会	学習したこと，調べたことを新聞形式でまとめ，掲示により公表する。
	総合的な学習	調べたこと，知らせたいことを発信する形式の一つとして活用する。

以上の各教科・領域内での言語活動のほかに、学校生活全般の様々な場面での言語活動の場を設定します。日常化を図ることにより、言語環境の整備を進めます。

4 各学年の年間指導計画の作成・見直しを行う

言語活動を重視した指導の充実を学校の中心課題に据えて年間指導計画を作成する場合、その中核をなす国語科の学習内容を確認し、各教科・領域の学習活動と関連を図ける単元を設定し、年間カリキュラム表に示します。

作成後は、それにとつて指導を進めます。そして、定期的に児童・生徒の言語環境の点検を行い、必要に応じて年間指導計画の見直し・改善を行います。

◆ 学習内容の構造化と体系化へのアプローチ

■ 視覚的カリキュラム (小学校5年生での実践)

	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
言語力	上越必須	特色3	予備	予備	予備	予備	
行事等		会相模大 べんたくわい	マ海岸 マラソン	祭国府子とも	人権週間	パワエカシ ステイ	会校内書初大 スキー学習 首大会百人一
総合		○お年寄りのためにできること PART 2 ・交流以外にできることを考えよう ・作品を見てもらおう		○みんなが住みよい地域を目指して ・ここは住みよいか? ・住みよい地域づくりに向けて、提言しよう		○発信! みんなが生きる町 ・交流から学んだこと ・わたしたちにできること	
学級活動	○思い出に残る林間学校にしよう ○1学期をまとめる活動 ○楽しい夏休み	○係を決めよう ○2学期の学級作り ○給食を楽しく食べよう ○エンカウンター	○目の愛護週間 ○よりよい学級作りをめざして ○言葉について考えよう	○エンカウンター ○読書に親しもう ○学級集会の計画 ○異性への関心	○お楽しみ会 ○冬の安全な登下校 ○2学期を振り返ろう	○3学期のスタートだ! ○3学期の係 ○風邪を予防しよう	○心の鬼を追い出そう ○学年集会の計画 ○6年生を送る会を成功させよう
道徳	3-3 敬けん 4-2 公德心 4-1 社会的役割の自覚と責任	1-2 不とう不屈、希望 1-4 誠実、明朗 4-2 規則の尊重	2-3 信頼友情、男女の協力 3-2 生命の尊重 2-2 思いやり、親切 4-7 郷土愛	2-4 寛容、謙虚 1-5 創意工夫、進取 2-1 礼儀 3-3 敬けん	4-7 郷土愛 2-2 思いやり、親切 2-5 尊敬感謝	1-1 節度ある生活態度 4-3 公正公平、正義	4-1 社会的役割の自覚と責任 3-2 生命の尊重 4-4 勤労、社会への奉仕 1-6 個性の伸長
国語	読書の世界を広げよう ①千年の釘にいとむ ②本は友達 漢字の広場②	詩を味わおう 未確認飛行物体 カン	思い出を言葉で伝えよう 「私の流木ストーリー」 漢字の広場③	人物の考え方や生き方を考えよう 和語・漢語・共通語 漢字の広場④	言葉の伝え方を考えよう ① ニュース番組作り ② 理屈から	目的に応じた伝え方を考えよう ① ニュース番組作り ② 理屈から	漢字の読み方 「失敗」をめぐって 物語を作る 漢語の広場
図工	動くよ動く絵が動く アニメーションボックス	心広がる場面	それは海からやってきた	ほって刷って	こんなとき感じることを書くこと	曲げてね板を じって つま	
社会	3 これからの食料生産とわたしたち	1 自動車を作る工業	2 工業生産と工業地域	3 工業生産と貿易	1 放送局の働き	2 情報と社会	1 さまざまな自然とくらし 2 わたしたちの生活と環境
算数	5 いろいろな四角形 ①	●計算のしかたを考えよう 6 小数のわり算	●高さくらべ	7 図形の面積 8 図形の面積	9 分数 ●復習②	10 円 ●円周率の歴史	11 割合とグラフ ●グラフで見る学校
理科	3 生命のたんじょう	4 花から実へ	5 台風と天気の変化	6 流れる水のはたらき	7 てのはたらき	8 ものどけかた	9 おもり
音楽	☆いろいろなひびきを味わおう ・美しきロスマリン(鑑) ・白鳥(鑑) ◎わたり鳥と少年	☆重なり合う音の美しさを味わおう ◎静かにねむれ ・それは地球 ・威風堂々第1番(鑑)	☆曲想を感じ取ろう ・秋にさよなら ・アイネクライネナハトムジーク第3楽章(鑑) ・冬げしき(共) ◎キラマンジャロ	☆日本の音楽を味わおう ◎浜辺の歌(鑑) ◎待ちぼうけ(鑑) ◎荒城の月(鑑) ・スキーの歌(共)	☆心をこめて演奏しよう ・タぐれ ・失われた歌 ◎天空がむかえる朝 ・朝日をあびて *6年生を送る会での合唱		
家庭	料理って楽しいね! おいしいね! 1 1日の食事を調べよう 2 な調理をしよう ▲調理の計画を立てよう 3 なぜ食べるのか考えよう	ぬって! 使って! 楽しい生活 1 くらしの中の布製品を探そう 2 つくり方を調べよう ▲どのようにできているのかな 3 楽しくつくってたくさん使おう	▲ミシンの使い方 ▲整理・整とんをしよう ▲そうじをしよう	くふうしよう! かしこい生活 1 身の回りの物を見直そう 2 身の回りをきれいにしよう ▲整理・整とんをしよう 3 不用品になった物を生かそう			
体育	鉄棒 水泳	走り幅跳び・ハードル走 体ほぐし 体力を高める運動	サッカー	表現 心の発達	縄跳び バスケットボール	マット運動 跳び箱	

- ◆児童・生徒の言語力の課題を洗い出し、目指す姿に迫るために有効だと思われる国語科単元を選択します。
- ◆選択した国語科単元の学習を進めるに当たり、横断的に扱うことで双方の目標を達成できる教科・領域の単元や題材を選択します。
- ◆日常化を図るには、各教科・領域以外に有効な教育活動があるので、日課表や週予定、学期ごとのサイクル等に位置づけます。

学校課題の把握、共通理解

取組の方針決定！



思いのこもった
図工作品
＜それは海から
やってきた!？＞

(前略)その時間は、流木を種に落ちて
いる物をひたすら拾
い続けた。この木の
ぼうたちは、どうな
るだろうと手を止
め思った。きつとい
いのが作れると思っ
た。

■ カリキュラムの実際

各教科・領域における言語活用の充実のために、そのもととなる言語力育成の中核となるのは国語科です。

K小学校では、国語科の学力検査等から以下のような課題を見いだしました。

- ・資料と自分の考えを結び付けて考える経験が不十分である。
- ・根拠に基づいて自分の考えを述べることへの抵抗感がある。
- ・自分の思いや考えを伝えるのに効果的な文章表現に関する知識・技能が不足している。

そこで、国語科を中心とし、言語活動の場を保証して言語力向上を図るために、次のような取組を始めました。

- 国語科と他教科・領域との横断的単元構想の工夫
- 言語に関する基礎的な知識・技能の確実な習得の場の設定
- 子どもの言語活動を促す資料の選択と提示の工夫

○国語科と他教科・領域との横断的単元構想の工夫

各教科・領域では、観察や実験、鑑賞、制作、探検、見学等の体験活動から学びや感動が生まれます。それを絵や文等に表す機会は多々あります。児童・生徒は、豊かな体験活動により「伝えたい」という思いをもちます。それを文章に表現する活動と国語科の学習内容とを関連付けることにより、子どもが言葉や文章表現にこだわり、学びや感動を表す機会とします。

《実践例》

左の写真は、5年生図工科「それは海からやってきた!？」と国語科「思いを言葉で伝えよう ～私の流木ストーリー～」を横断的に扱った単元の図工作品です。

材料を求めて海岸に行ったときから制作過程、完成に至るまでの「流木日記」に綴った思いと、教師が準備したある作家の作品解説書をもとに、自分の作品の解説書を書く学習です。

制作活動ではぐくんできた作品への思いがベースになり、それを見る人に理解してもらうために言葉や表現を吟味して解説書を作るまで思いをつなげるところに価値があります。

○言語に関する基礎的な知識・技能の確実な習得の場の設定

前述の学力課題の解決に向けた学習を進めるに当たり、習得されているべき基礎的な知識・技能があります。その習得状況を見取り、必要に応じて取り出し指導をすることにより、学習活動を効果的に進めることができます。例えば、資料に基づき自分の考えをもつ学習において、資料から必要な情報を取り出す過程があります。課題に照らして有用な情報にのみ線を引くという技能が生きる場面です。これは、小学校1年生2学期に学ぶ技能です。このような簡単なことでも、その有用性と習得したことの自覚により、活用する意欲が増し、活用力がはぐくまれます。

K小学校では、言語活動を支える基礎的・基本的な知識及び技能の習得を図った上で、一部の主要な単元に入るといふ単元構想を採り入れています。この習得を図る時間を「ミニ単元」とし、一校時をあてます。

《実践例》

2年生では、生活科の地域探検での見学・インタビューメモから必要な言葉や文を抜き出し、簡単な文章構成の作文を書きました。

手順；①見学メモから、見て知ったこと、聞いて分かったこと、感想を色分けした付箋に必要な短文を書き出す。

②文章構成の枠を示したシートに貼る。

③各メモ群で書きたい順に番号を書く。

④必要に応じて言葉を補いながら原稿用紙に書く。

段落の意識がめばえてきたばかりの低学年です。必要な言葉や文節、短文を書き取り、順序を考え、段落を意識しながら200字程度で4段落構成の見学作文を書き上げることができました。

この学習でおさえた知識・技能は、付箋への情報の取り出し、文末表現(常体→敬体、～だそうです等)、段落の3つがありました。やや難しいかと思われましたが、スモールステップで理解を確認しながら進めたので、ほぼ全員が課題を達成することができました。このような学習の機会を十分にもつことで、知識・技能が定着し、活用できるようになるでしょう。

○子どもの言語活動を促す資料の選択と提示の工夫

子どもが思考・判断する際には、その根拠となる資料が必要です。また、効果的な表現技法等は、それらを含む資料から知識を増やし活用できるようになります。教師がどの資料が有効かを吟味し提示することが、児童・生徒にとって大きな支援となります。

《実践例》

小学校1年生2学期に「じどう車くらべ」という説明文教材があります。自動車の仕事と仕組みを書いた段落構成を知り、書かれている内容を確実に読み取ることが目的です

教科書教材での学習の後、自分で選んだ自動車の図鑑を作る流れです。教師はこの学習に向け、子どもの実態に合わせて市立図書館から借りた乗り物図鑑を参考に資料を自作しました。子どもは、赤と青の色鉛筆で仕事と仕組みを色分けしながら読み取り、線を引いていました。

各教科・領域では、文章だけではなく表やグラフ、写真、絵等が資料として示されることが多々あります。初めてこれらの見方や書き方、読み取り方を学習する際、確実な理解とその自覚を促すことが大切です。それにより、様々な形で提示される資料を思考・判断の材料とし、その内容を言葉に表すことでより理解が深まります。

○言語活動の日常化

言語は、知的活動の基盤であると同時に、コミュニケーションや感性・情緒の基盤としての役割をもつものです。言語力の育成は、国語科はもとより、各教科・領域の目標や内容をよりよく実現させるためであることを確認します。また、相手の表情等を見ながら対話や発表をするなど、日常の生活場面で有効に活用する場を設定します。言語活動により、豊かな人間関係がはぐくまれることを望みます。全職員が、このような言語の重要性を確認し、「目指す子どもの姿」に向けて全校体制で言語活動の日常化に取り組むことにより、大きな効果を上げることができます。



付箋を使って
情報の整理



シートから
原稿用紙へ



必要な情報の取出し用
の教師自作資料

◆ マネジメントと組織づくりへのアプローチ

■ 子どもの学ぶ姿を通して、カリキュラムを評価・改善する

① 授業研究による子どもの学びを評価

子どもの言語力の育成は、全教育活動を通じて言語環境を整えることにより促進します。その中でも国語科は、言語力育成の中核を担う教科として生活や学習に必要な能力を身に付けるための言語活動の充実を図る場として重要です。

K小学校では、言語活動の中でも「書くこと」の力の育成を目指して校内研修に取り組んでいます。指導案検討や協議会では、以下の2点について子どもの学びについて話し合います。

- 体験活動との関連を図ることにより、言語を学ぶ目的意識をもって取り組んでいたか。
- 「書くこと」につながる基礎的・基本的な知識及び技能を身に付ける手だては、有効か。

協議会で、子どもの目的意識や手だての有効性が確認できれば、それは全職員の財産として共有します。もし、その有効性が確認できなければ、単元構想や指導の手だてに問題があると見なして改善点や代案を考え、次の実践に生かします。

② 各教科・領域を横断する単元構想の見直し

言語力育成を目指して国語科と各教科・領域とを横断する単元構想の利点は、次の2点です。

- 言語を学ぶ意欲の高揚
- 習得した言語の基礎的な知識・技能の活用の促進

学期末には、体験活動の実施状況と言語力育成の成果について評価します。その評価に基づいて次学期の計画を練り直します。

■ 日常の言語活動を充実させるために

言語力の育成を学校の課題として掲げたら、言語環境の整備を図ります。教職員は、授業で身に付けた基礎的・基本的な知識・技能を日常の学習や生活の場面にいかに生かすか考えます。例えば、「朝のスピーチは、メモをもとに話す」「時間と字数を決めて、テーマにあった文を書く」「資料に線を引きながら読む」「短文で考えを書く」などを日常の学習や活動に取り入れます。このような取組は、学年や学年部、全校等で共通理解のもとで行うことが大切です。職員と子どもが共通目標に向けて進むことで、効果を上げることができます。

言語活動の日常化を図ったら、学期に1～2回、その実施方法や成果を見直し、改善します。

言語環境の整備や言語力の活用場面づくりに、外部機関を利用することも有効です。以下は、その例です。

- 上越市教育プラザ内 教科書センター；(複数の教科書出版社発行の教科書があります。)
- 開場時間帯；午前9：30～午後4：30
- 手続き；利用するときは、あらかじめ連絡をする。
- 上越市民図書館(高田図書館、直江津図書館)
- 貸出業務；貸出冊数1団体100冊、貸出期間は1ヶ月。
- 手続き；団体用図書貸出カードを使用。学校担当者が本を選ぶ。
- 地方紙新聞；文字からの情報活用、読者欄への投稿の機会の利用

私たちは、言語が、思考・判断・表現等を支えるものであり、豊かな人間関係を築くものであることを認識することが大切です。日常の言語環境を大切に、子どもの言語感覚を高めることを心がけます。

目指す「子ども像」「はぐくみたい力」の育成を目指すカリキュラムモデル<学力形成>

階層モデルをもとにした授業づくりを通して、 「思考力・判断力」をはぐくむカリキュラム

◆ カリキュラムづくりのポイント

■ 上越市における思考力・判断力の位置づけ

市全体の学力傾向としては、基礎的な知識・理解はおおむね定着していますが、論理的な思考力や「情報の取り出し・利用・熟考」としての読解力などは十分といえません。

それを受けて、上越市では、学校教育目標「II未来を開く『生きる力』をはぐくむ小・中学校教育」の中で、「I学ぶ意欲と確かな学力の育成」のための実践の方向として、次のように思考力・判断力の育成の必要性を述べています。

子どもたちが「習得」した知識・技能を、実際に授業で思考力・判断力・表現力を高めながら「活用」したり、「総合的な学習の時間」などでの教科横断的な「探究」活動に発展させたりすることで、確かな学力の向上を図り、学び続ける基礎を培うことが必要です。

新学習指導要領の中でも、「基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得」、「思考力・判断力・表現力等の育成」「学習意欲の向上や学習習慣の確立」を図り、「確かな学力」に支えられた「生きる力」を育成することが重視されています。また、新潟県は、以前から確かな学力の向上のために、基礎学力（A学力）や基礎・基本（B学力）を包括する「自ら学び自ら考える力（C学力）」を育成することに取り組んできました。

PISAや全国学力調査などから、考える力や活用する力の低下が指摘されている現在、思考力・判断力・表現力等を高める学習指導の在り方を明らかにして取り組んでいくことは、今後の重要な課題です。

■ カリキュラム編成の手順

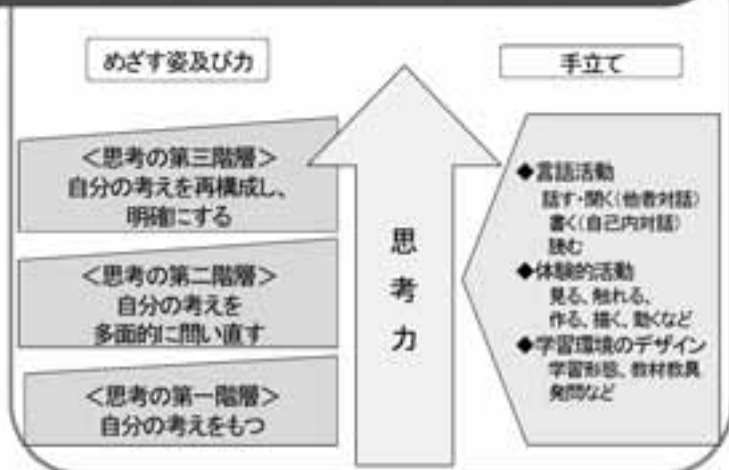
1 思考力・判断力を構造的に把握する

思考力・判断力の定義とそのはぐくむ方法を明確にすることは容易なことではありません。教育界が長い間抱えてきた課題です。かといって、「思考力・判断力とは？」と論じていても、前に進むことはできません。だからこそ、各校で思考力・判断力を定義し、実践することが肝要と考えます。

O小学校では、これまでの実践研究から、思考力を「自己と学習対象がもつ文化世界（本質）との関係をつくっていく力」と定義づけました。一般的に思考力というと、「論理的に考える」「筋道立てて説明する」「テキストを読み解く」という言葉に代表されるように、狭義の知的な作用のみに限定されている感があります。しかしながら、思考力は、諸感覚を働かせて対象とかかわる体験や活動を通してはぐくまれ、活動に没頭する姿や体験したことを生かして工夫する姿において表出します。思考力の中から子どもの「情・意」が除かれることはあり得ないと考えます。

よって、O小学校が定義する思考力は、感性・身体性を伴う「知・情・意」を包括した、新学習指導要領でも重要視されている思考力・判断力等を広義に解釈したものです。子どもが、思考力を発揮して本質に迫るとき、揺れ動いたり、悩んだり、驚いたりといった生き生きと躍動感あふれる姿が表れます。この思考力こそ、生きる力を支える確かな学力であり、子ども一人一人が実感する真の学力であると考え、実践を進めています。

思考力をはぐくむための階層モデル



2 実践のモデルを構築する

このモデルは、〇小学校が指針としている「思考力をはぐくむための階層モデル」です。生活科・総合的な学習の時間において、子どもが学習対象に対して探究しながら学ぶ姿から明らかにしたものです。

思考力がはぐくまれる過程は、学習履歴等の違いによってスパンは異なりますが、「自分の考えをもつ→多面的に問い直す→再構成し明確にする」という道筋をたどりながら、階層的に高まっていくことがわかりました。このモデルは、習得した知識・技能を活用していく探究型の学

習過程を意味しています。また、各教科・領域においては、年間レベル・単元レベル・授業レベルでの子どもの学習過程にも相当します。よって、日々の授業づくりや評価・改善、年間カリキュラムの評価・改善の指針としても機能しています。

3 構想と展開のポイントを明らかにする

思考力をはぐくむ授業の構想のポイントとして、思考の第一階層では「触れる・浸る・慣れ親しむ」、思考の第二階層では「多様な経験」や「試行・模倣」、「比較・検討」、思考の第三階層では「取捨・選択」や「応用・活用」、「生活化・実践化」を掲げています。

思考力をはぐくむ授業の展開のポイントとして、言語活動、体験的活動、学習環境のデザインの3つから整理しています。言語活動では、対話を重視します。対話には、他者との対話と自己との対話の二つがあります。一つは、学ぶ主体同士の交流の中で、互いの考えの違いをもとに話し合う他者対話（話す・聞く活動）。もう一つは、内なる自分と向き合い、吟味しながら納得いく考えを形成していくための自己内対話（書く活動）です。対話を手だてとして効果的に位置づける際は、「いつ、どこで、何を（内容）、どのように（方法）対話をするのか、を明確にする必要があります。体験的活動（見る・聴く・味わう・嗅ぐ・触れる・作る・描く・動く・演じる・表す等）は、生活科・総合的な学習の時間のみならず、全教科・領域において多く取り入れます。体験的活動において、子どもは諸感覚をはたらかせて対象とかかわり、実感的にとらえることができます。そして、体験的活動を通して考えたことを話し合い、書くことによって理解が深まり、本質に迫ることができます。また、学習環境のデザインとして、学習環境、教材・教具、ゲストティーチャー、補助教材、学習プリント、ICT、板書、発問などの工夫をします。

〇小学校では、思考力をはぐくむ階層モデルと構想と展開のポイントを生かし、思考力をはぐくむ授業実践を積み重ねています。

4 生活科・総合的な学習の時間を中核に据えて教科横断的に思考力をはぐくむ

〇小学校の生活科・総合的な学習の時間は、年間を通じたテーマを設定し、直接体験をベースにした自己と対象の関係を重視した活動を行っています。言い換えれば、年間レベルで思考力をはぐくむ階層モデルに則した構想・展開が可能になります。そこで、〇小学校では、縦軸（6カ年）と横軸（各教科・領域）のつながりが深い生活科・総合的な学習の時間をカリキュラムの中核に据えています。そして、各教科・領域において思考力をはぐくむ階層モデルに基づいた授業を構想・展開することにより、教科横断的に、全教育活動を通して思考力をはぐくむことができます。

◆ 学習内容の構造化と体系化へのアプローチ

■ 視覚的カリキュラム（小学校3年生での実践）

	4月		5月		6月		7月		9月	
行事等	新任式、始業式、入学式、各種健康診断、一年生を迎える会		避難訓練、運動会、歯の衛生週間、教育実習		校内読書週間、学校保健委員会、体力テスト		国語力・算数力テスト、終業式		始業式、避難訓練、教育実習、持久走大会	
音楽	☆階名になれよう ・友だち・春の小川(共) ・ドレミで歌おう・茶つみ(共) ◎海風きって		☆リコーダーに親しもう ・小鳥のために(鑑) ・小さな花 ・かりかりわたれ ◎さよなら		☆いろいろな音のちがいをかんじとろう ・うさぎ(共) ◎おかしなまほう使い ・茶つみ(鑑)・金かんがっきの音楽(鑑)		☆ふしの ◎パー1 ・馬にの ・ふじ山 ・ねむた ・エーデ			
理科	●しぜんたんけんをしよう		1植物を育てよう		2チョウを育てよう		3植物のからだをしらべよう		4こん虫をしらべよう	
社会	学校のまわり		町のようす		スーパーマーケットではだらく人					
総合	高田の自慢を見付けよう！伝えよう！ 思考の第一階層＜見付ける＞ 校区の各町内を探検し、見たり聞いたりしながら、それぞれの町の特徴に目を向け、高田の自慢だと思えるものを見付ける。		高田の自慢を見付けよう！伝えよう！ 思考の第二階層＜ひろ いろいろな店や施設を							
国語	つづけてみよう 一 本と出会う、友だちと出会う きつつきの商売 漢字の音と訓		二 まとまりに気をつけて読もう ありの行列 漢字の広場① 国語辞典を使う わたしと小鳥とすずと		三 分かりやすく書こう おもしろいもの、見つけた／様子を つたえる くわしくする言葉 漢字の広場② 道あんないをししよう／たしかめなが 話す・聞く		四 本と友だちになる 三年とうげ 本は友だち／本のさがし方 漢字の広場③ キリン へんとつくり		五 運んで話し合い、発表しよう 「分類」ということ／インタビュー 反対の意味の言葉	
図工	ためしな きせつの中で		これでかけるよ		くつつけ くつつけ		グルグルかくか 風パワーぜんかいウインドカー		いキラリ 絵はがき みんなでつく	
体育	体ほぐしの運動 多様な動きをつくる 運動◎		かけっこ・リ レー		鉄棒運動◎		ホット型ゲーム		浮く運動、泳ぐ運動	
道徳	・3年生になって ・学級づくりスタート ・元気にあいさつ		・がんばるぞ体育祭 ・エンカウンター(友達づくり) ・安全な生活をしよう		・雷の役割を知ろう ・学級集会の計画 ・雨の日の過ごし方を考えよう ・赤ちゃん誕生		・学級集会をしよう ・1学期を振り返ろう ・楽しい夏休みにするために		・2学期もがんばるぞ ・2学期の係を決めよう ・ものを大切にしよう ・エンカウンター(友達のよしがし)	
学級活動	・3年生になって ・学級づくりスタート ・元気にあいさつ		・がんばるぞ体育祭 ・エンカウンター(友達づくり) ・安全な生活をしよう		・雷の役割を知ろう ・学級集会の計画 ・雨の日の過ごし方を考えよう ・赤ちゃん誕生		・学級集会をしよう ・1学期を振り返ろう ・楽しい夏休みにするために		・2学期もがんばるぞ ・2学期の係を決めよう ・ものを大切にしよう ・エンカウンター(友達のよしがし)	

◆O小学校では、教科横断的なカリキュラムを次の手順で構想しています。

(1) 生活科・総合的な学習の時間をカリキュラムの中核に据える

- ・生活科・総合的な学習の時間を他教科・領域の学習内容と関連を図り、その体験を生かす。
- ・生活科・総合的な学習の時間で経験した学び方を他教科・領域の学習に活用する。

(2) 各教科・領域における思考力をはぐくむ単元を開発する

- ・各教科や領域の特性を踏まえ、その単元の本質に迫る特有の思考力を明確にする。
- ・年間を見通して重点単元を定め、思考力をはぐくむ階層モデルに則した単元を開発する。

(3) すべての教育活動に目を向ける

- ・学級経営案で示した方針を単元レベルで具体化するよう、生活科・総合的な学習の時間を中核に据え、各教科・領域の重点単元を示した年間指導計画(カリキュラム表)を作成する。
- ・教師の問題意識や担当教科・領域を中心に個性的なカリキュラムを実践する。

各教科・領域の特性

+

子どもが獲得すべき

知識・理解

+

授業者の問題意識

↓

単元の本質

↓

単元構想



地域探検を繰り返し、「自慢」を見付ける



お店の人との出会いから「人」という自慢に気付く



自分の考えを「自慢新聞」に表す



詩や台詞に表すことで自慢を問い直し、明確にする

■ カリキュラムの実際（3年生）

総合的な学習の時間「高田の自慢を見付けよう！ 伝えよう！」

授業者は、まず、活動の特性を「子どもは、対象と継続的にかかわる中で、多様な見方・考え方ができるようになり、自己の生き方を問い続けることができる」としました。また、子どもに身に付けさせたい知識・技能として、「歴史的・伝統的、地域の生活に役立つ文化的な人・もの・こと」を掲げました。そして、「一人一人の感性や感覚を通して、これらの知識・技能を習得・活用しながら自分の暮らす高田に対する思いや願いを深めていきたい」という授業者自身の問題意識を明らかにします。これらの要素を組み合わせ、「高田の町への思いを深めていく（高田の町への愛着・郷土愛）」という本単元を貫く本質を描き出しました。この本質に迫るべく、「自分の考えをもち、多面的に問い直しながら、再構成する」という探究型の思考のモデルを指針に単元構想を図ります。

<思考の第一階層：探検を繰り返して、「高田の自慢」を見付ける>

思考の第一階層では、社会科と関連させ、まずは、ひたすら町内をめぐる探検活動を行いました。そして、各地で感じた気付きを、言語活動（話す・聞く活動、書く活動）によって、自慢とその理由として蓄積しました。

<思考の第二階層：「自慢」を観点に調査活動を繰り返し、「自慢」の見方・考え方を広げる>

思考の第二階層では、意図的に場所を選び、調査・比較・検討しました。また、これまでの自分の見方・考え方を整理し、問い直すために、「自慢発表会」や「高田の自慢新聞」などの表現活動を行いました。そうすることで「自慢」の意味づけを「人・もの・こと」の「もの」だけでなく、「人・こと」にも広げたのです。

<思考の第三階層：他者に「高田の自慢」を伝える活動を通して、「自慢」の見方・考え方を吟味し、高田についての思いを深める>

思考の第三階層では、音楽科と関連させ、高田の自慢をミュージカルに表しました。ミュージカルづくりは、自慢の見方・考え方を意味づけ、吟味しながら表現するというよさがありました。そして、発表会という形で他校との交流の機会をもちました。他地域との比較を通して、改めて高田の自慢を問い直したのです。

活動の最後に、1年間調べてきた高田の町について考え、一人一人が、高田ならではの自慢を、町の「人・もの・こと」から振り返りました。

「わたしは、探検に行くたびにたくさんの発見をして、新しいことをたくさん知りました。高田には、にぎやかなところ、楽しいところ、きれいなところ、落ち着くところ、昔のものなど、いろいろな雰囲気の場所がありました。そんな高田が好きになりました。探検で人と会って話をして、高田の人って優しいな、がんばるなということが初めて分かりました。そして笑顔で働く人がいっぱいでした。わたしも笑顔になれました。それから、お店とか自分の働くところをがんばって守っていることも知りました。もっともっと工夫をして、自慢がいっぱいの町にしたいです。（後略）」

子どもたちは、高田の町を実際に見て、聞いて、調べて、体験する中で町のよさを様々な視点から語るできるようになりました。そして、高田の町を好きだと感じるようになった自分の変容に気付くことができたのです。

理科「こん虫のからだを調べよう」

思考の第一階層では、自分で調べてみたい生き物を選び、体のつくりを観察し、チョウの仲間といえるかどうか、自分の考えをもちました。

思考の第二階層では、友達の作った模型と自分の模型、実物をそれぞれ比較しながら体のつくりに対する気付きを深めていきました。そして模型を作りかえるという行為で、自分の生き物に対する見方を深めていきました。次に、グループ内で自分たちの調べた生き物がチョウの仲間といえるかどうかの話し合いを行いました。比較の視点と課題を確認することで、「昆虫」という言葉は知っているものの、その認識は曖昧なものだということに気付き始めました。そして話し合う中で、チョウの仲間と考えられる生き物の共通点を整理し、昆虫の定義を明確にしていきました。

思考の第三階層では、他の生き物が昆虫かどうかの判別を行ったり、人の体との共通点を考えたりすることで、昆虫の体に対する考えを明確にします。まず、これまで扱ってこなかった生き物を例に挙げ、昆虫といえるかどうかを話し合いました。子どもは昆虫の定義を使って簡単に判定していきました。次に、昆虫と人との体の共通点や差異点についても話し合いを行いました。「昆虫の羽は動くために使うので、人間にとっては足と同じだ」「昆虫にはにおいを嗅ぐ鼻がない代わりに触角があるんだよ」など、子どもは、器官の存在や形状だけでなく、その機能にまで目をむけて昆虫と人の体のつくりを比較していったといえます。これまでの活動で、生き物の体のつくりに対する気付きを積み重ね、昆虫という生き物に対する考えを深めた姿です。

国語科「分かりやすく書こう」

思考の第一階層で、子どもは、無理な要求をする架空の「〇小学校の子どもを大事にする会」の人に反論する作文を書きました。子どもは、多くの分量を書けば相手に自分の考えが伝わると考え、思いついたことを次々に書いていました。ただし、文章構成を意識している子どもはほとんどいませんでした。

思考の第二階層では、二つの作文を読み比べる活動をしました。はじめに示した作文は、段落をつくらずに思いついたことを次々と書いたものです。次に示した作文は、内容は同じですが、段落をつくり、文章構成を考えて書いたものです。二つのうちのどちらを「〇小学校の子どもを大事にする会」の人に届けたらよいかと問うと、全員が後に提示したものを選びました。そして、二つの作文のどちらが分かりやすいかを対比しながら検討することで、分かりやすく書くためのポイントに気付くことができました。子どもは、「前回書いた作文のままでは全然だめだ」「書き直したいな」とつぶやきました。そして、前に書いた作文を見直し、意欲的に直し始めました。子どもが書き直した作文の量は、前回書いたものよりも少なくなりましたが、文章構成を意識し、段落や接続語を効果的に使った内容になりました。子どもは、分かりやすく書くためのポイントに気付き、自分の文章を評価することができたのです。

思考の第三階層では、分かりやすく書くためのポイントを意識しながら新たな題材「朝市のよさを伝えよう」で書き、それを読み合うことにより、分かりやすく書くための表現を確かめました。



生き物の体のつくりを詳しく観察して粘土で表す



粘土で作った模型を比較し、話し合う



調べた生き物の共通点を整理する



二つの作文を読み比べ、検討する



気付いたポイントをもとに書き直す

◆ マネジメントと組織づくりへのアプローチ

■ 授業研究によるカリキュラム評価・改善のサイクル

〇小学校は、思考力をはぐくむ階層モデルの階層ごとに子どもの思考する姿を描きます。そして、次の階層への指導・支援に生かすために、単元全体を貫く「評価の観点」を設定するとともに、階層ごとの評価基準を明確にして評価しています。とかく思考力とは見えない学力であり、評価することは困難であると言われます。しかし、子どもが対象との関係をつくっていく姿を具体的な子どもの姿で示すことにより、思考力を評価することは可能になります。

右表は〇小学校の平成20年度の研究計画の一部です。授業者は、思考力をはぐくむ階層モデルに基づき授業を構想し、公開します。次に、他の職員と共に、子どもの表出（表情、つぶやき、動きなど）や言語活動により表現したものの（話し合いの様子、ノートやシートの記述など）などを手掛かりに、いかに思考力がはぐくまれたのか評価し、検討します。さらには、いかに生活科・総合的な学習

月	公開授業等			全体研修会	研究推進部
	低学年部	中学年部	高学年部		
4月	・日程検討	・日程検討	・日程検討	・研究の概要の共通理解	・研究概要構築 ・研究日程検討
5月	・2年道徳	・5年図工	・5年理科	・総合的な学習構想検討会	・各研究部の研究方法構築
6月	・1年生活	・3年国語	・6年社会	・部会検討	・実践から見えたもの集積・検討
7月	・1年国語	・4年総合的な学習 ・3年保健	・6年総合的な学習 ・5年社会	・部会検討	・実践から見えたもの集積・検討
8月	・実践レポート作成 ・カリキュラムの評価・改善			・総合的な学習実践検討会 ・実践レポート検討	・研究全体の更新点等の検討
9月	・公開授業構想検討	・公開授業構想検討	・公開授業構想検討	・公開授業指導案検討	・指導者を迎えての拡大研推（指導案検討）

の時間と他教科・領域との関連がなされたのか、などを検討していきます。そして、その後の活動や単元開発の構想を練ります。

思考力・判断力に関するスキルなどを中核に評価・改善することで完結している研究も少なくありません。しかし、子どもがいかに思考したのか、いかに思考できるようになったのか、といった子どもの学びを大切にしている〇小学校では、授業研究そのものをカリキュラムの評価・改善の中核にしています。

■ 協働性を大切にされた組織の在り方

思考力をはぐくむカリキュラムの実践及び評価・改善において大事なことは、教師自身が問題意識をもち、各教科・領域の特性、単元の本質、子どもが思考力を発揮している姿をいかに描き出せるかです。しかしながら、このことは容易ではありません。そのため、〇小学校では、教師の個性（個人性）だけでなく、協働性（集団性）をも重視して、カリキュラムづくりに取り組んでいます。

研究授業では、個人の提案→授業者と研究推進部による検討→授業者と学年部研究部による検討→授業者と研究推進部による最終検討という流れで、「みんなで授業をつくる」スタイルを貫いています。特に、思考力をはぐくむ重点単元については、事前検討を行い、公開授業後、事後検討会を行います。授業者は、事前・事後レポートを、参観者は参観レポートを書きます。さらには、月数回の全体研修会を実施し、研究便りを発行し、研究の共通理解を図っていきます。

これらの方法を通して、各教科・領域における思考力の特性、思考力をはぐくむ有効な手だて、評価の在り方（内容と方法）などの研究内容及び課題の共有化を図り、思考力をはぐくむカリキュラムをつくっています。

目指す「子ども像」「はぐくみたい力」の育成を目指すカリキュラムモデル<学力形成>

教科や総合的な学習を関連させて 表現力をはぐくむカリキュラム

◆ カリキュラムづくりのポイント

■ 「表現力」育成の重要性

今、学校で学んでいる子どもたちが社会で活躍する時代は、今以上に様々な価値観をもつ人たちと共生・協働の時代になることが予想されます。そんな時代には、自分の思いや考えを的確に相手に伝える、相手の思いや考えを正確に理解することがとても重要になります。

上越市では、上越市学校教育目標 第二章 未来を拓く「生きる力」をはぐくむ小・中学校教育の1 学ぶ意欲と確かな学力の育成・実践の方向で、次のように述べています。

子どもたちが「習得」した知識・技能を、実際に授業で思考力・判断力・表現力を高めながら「活動」したり、「総合的な学習の時間」などで教科横断的な「探究」活動に発展させたりすることで、確かな学力の向上を図り、学び続ける基礎を培うことが必要です。

子どもたちの表現力をはぐくむことを重視したカリキュラムを編成するためには、この内容を自校化し、年間を通して各教科等での実践を計画的・継続的に進めることが大切です。

新学習指導要領でも思考力・判断力・表現力をはぐくむことが重視されています。これは、学力の重要な要素として、「知識・技能」「学習意欲」「思考力・判断力・表現力」を受けているからです。したがって、各教科では学習意欲を高めることを念頭に置き、知識・技能の習得とこれらを活用する思考力・判断力・表現力等を相互に関連付けながら伸ばしていくようにします。また、総合的な学習では、様々な情報を整理・統合しながら、教科等の学びと関連付け、思考力・判断力・表現力をはぐくむ活動を仕組んでいきます。

■ カリキュラム編成の手順

1 教科等の指導計画を共有する

習得した知識・技能を活用する際の表現力等の先行研究には様々なものがあります。先行研究を学び、表現力の定義やはぐくむ手だてを明らかにすることはもちろん大切ですが、まずは先行研究に学びつつ、表現力をはぐくむために自校で何できるのかに焦点をあてる必要があります。

A中学校では、表現力をはぐくむために、「相手に伝えたいことをもつこと」「学んだことをもとにして、自分の考えを整理すること」「相手に的確に、効果的に伝えること」「伝わったかどうか振り返ること」に主眼を置き、単元開発を試みています。表現力は表現の技法と考えられがちですが、表現したい思いと表現したい内容があることがとても大切です。表現することは学習意欲や学んだことを活用することと連動します。このことを念頭に置き、指導計画の作成に当たります。

各教科の部員で毎時間の授業の留意点や重点を置いて指導する単元・題材の共有
(各教科の取組を全職員で理解)

+

総合的な学習で表現する場の設定と総合的な学習と各教科等や学校行事との関連付け

2 各教科で表現力をはぐくむ

教科担任は教科の研修を積み新学習指導要領の趣旨やそれぞれの教科の目標や内容等を十分理解した上で、表現力をはぐくむために自教科の授業で何ができるのかを考え、実践することが大切です。各教科で表現力をはぐくむ際、次のような取組が可能です。

○相手に伝えたいことをもつこと	○課題提示の工夫 ○「見付ける」「気付く」場の設定 ○感動体験の利用 など
○学んだことをもとにして 自分の考えを整理すること	○課題と既習と事項との関連を明確にする工夫 ○分かったことを意識化する場の設定 など
○相手に的確に、効果的に伝えること	○教科独自の表現方法の習得と利用 ○作文、レポート等の作成 ○発表・表現活動の重視 など
○伝わったかどうか振り返ること	○評価の視点の共有 など

教科部内での検討は、教材観や生徒観を深めるよい研修です。教科主任が中心となり、共通実践を提案し検討します。そして、各教科の取組を全職員で共有します。他の教科の取組には意見しにくい面がありますが、意見を交わすことにより自教科にも使える考え方や方法を学ぶことができます。

また、生徒のどんな点を伸ばしたいのか、実態から考えることもできます。

A中学校の今年度の研修テーマは「聴き手を意識した伝え合う力の育成」です。上の表の「相手に的確に、効果的に伝えること」に重点を置いて取組を進めています。このテーマ設定の理由は、各種アンケートや日々の授業の様子から、生徒は自分の考えを表現するときに相手意識の乏しいことが分かったためです。全職員が共通したテーマをもち、それに迫る取組を行うことで、より表現力がはぐくまれます。全職員が教科毎に独自の取組をしながらも、「生徒がどんなことができるようになってほしいのか」など具体的なイメージをもって共通実践に取り組むことで、大きな成果が期待できます。

3 総合的な学習の時間との関連を図りながら各教科の年間指導計画の作成・見直しを行う

多くの中学校では、学年部職員が中心となり総合的な学習の計画・実践・振り返りに取り組んでいます。総合的な学習は、各教科の学びを生かしたり、自らの在り方・生き方を考えたりする活動です。そこには、考えたことや伝えたいことをまとめ、表現する活動が不可欠です。まさに、表現力を全職員ではぐくむためには、最適な学習活動と言えます。総合的な学習で表現力をはぐくむために、プレゼンテーションする場、レポートを書く場、意見交換をする場などを計画的・継続的に取り入れます。

総合的な学習の時間の年間計画ができたなら、各教科、道徳、学級活動、学校行事との関連を検討します。検討内容は、総合的な学習の活動と各教科の学習内容や道徳、学級活動、学校行事の内容の関連を図ることとそれぞれの実施時期です。

総合的な学習を学年部で実施する場合は、道徳や学活との関連は図りやすくなります。反面、教科担任制である中学校では、総合的な学習と各教科との関連は図り難い面が出てきます。これまでの実践例をみると、総合担当者が教科部員に具体的な教科の関連を提案した方がうまくいくようです。まずは、時数の少ない教材や題材で十分ですので、例えば、人権劇では国語担当者に「抑揚をつけた音読」の場を設けるような要望をだしたり、教科主任会に人権劇の内容や時期を提案したりして、双方の関連を図りましょう。

総合的な学習の活動の修正



各教科等の内容・時期の修正

◆ 学習内容の構造化と体系化へのアプローチ

■ 視覚的カリキュラム例（中学校3年生での実践）

	人権	環境	国際理解	健康	キャリア	
	9月		10月		11月	12月
行事等	体育祭		音楽祭			いじめ0(ゼロ)スクー
総合	人権問題とは？	人権問題の追及活動	ロールプレイングを学ぼう	演劇づくり	脚本づくり	演劇練習
学級活動	2学期の心構えと体育祭に向けて学習習慣の見直し 赤ちゃんふれあい教室		音楽祭に向けて人権・同和教育性に関する学習		進路計画の検討 いじめ0(ゼロ)スクール集会に関する学級討議	2学期の反省と冬休みの計画 生活習慣の見直しとストレス
道徳	他人を受け入れる心 心とかたち 自然とともに「佐潟と生きる」		充実した生き方 生きるIV 生命の尊重 男女の敬愛		人間愛 正義を貫く 謙虚に学ぶ	強度の戦陣 日本文化の本質
国語	本の3状況に生きる 挨拶一原爆の写真によせて 故郷 [言語②] 比喩と慣用句 [漢字③] 熟語の読み方 重箱読み・湯桶読み	4	10	話す・聞く 話し合って考えを深めよう パネル・ディスカッション	5	4 古典を楽しむ 音読を楽しもう 古今和歌集 仮名序 君待つと一万葉・古今・新古今 夏草一「おくのほそ
書写	漢字と平仮名の調和 行書と平仮名の調和【自然を守る】 硬筆 行書と平仮名の調和① 硬筆 行書と平仮名の調和②		生活に生かそう 色紙・短冊・額・掲示物・封書・伝票・のし袋		5 論理の展開 生き物として生きる 説得力のある文章を書こう 意見を主張する [文法の広場②] コミュニケーション	
数学	3章 2次方程式		4章 2乗に比例する関数		5章 相似な図形	
社会	3章 現代の民主政治と社会		4章 わたしたちの暮らしと経済			
	12		15		16	
	18		18			
	【1分】		【2分野】 6 地球と宇宙		【1分野】 7 科学技術と人間	

◆総合的な学習と各教科等の学習を関連付けています。総合的な学習を核にしなが、関連が深い各教科や道徳や学活などを矢印で示しています。

◆概要については、「カリキュラムの実際 2 総合的な学習の時間での取組」をご覧ください。

■ カリキュラムの実際

1 各教科での取組

(1) 目指す生徒像、目指す教師の姿等の共有

表現力をはぐくむために、中学校では教科の壁を越え、全職員が共通したものを目指して共通の実践をすることが重要です。

そこでA中学校では、教科の枠を越えて目指す生徒の姿として、次の内容の共通理解を図っています。

- 自分が伝えたい内容を明確にし、的確な言葉で伝えている。
- 相手の伝えたいことやその思いを聴き取っている。
- 個が集団の中で生かされ、所属感や満足感を味わっている。

そして、この内容を支えるために、目指す教師の姿として、全職員が共通して次の内容に留意し日々の授業実践を行っています。

- 生徒が自信をもって伝えることができるように個を支援している。
- 聴き手が話し手に注目するように学習過程を構成している。
- 評価の物差しを多様化しながら望ましい集団の方向付けをしている。

また、これまでの表現力をはぐくむ授業実践から、授業改善の視点として次の5点を挙げるすることができます。

- 1 学びがいのある、意欲を高めるような課題を提示している。
- 2 課題解決に向けて主体的に取り組む学習活動を工夫している。
- 3 学んだ内容を活用できるような課題設定や学習活動を工夫している。
- 4 学び合い、響き合い、高め合う活動形態を工夫している。
- 5 自他の学習活動を振り返り、次の学習活動に生きる評価の方法を工夫している。

ここまで共通理解を深めたら、各教科の取組など具体的なイメージができます。

(2) 各教科独自の取組

各教科部では、授業改善の視点に基づき、年間指導計画に具体的な課題、重視すべき学習活動、生徒の自他評価の場面を位置づけます。また、教科部員で共通して支援を継続する留意点や表現力をはぐくむために特に重点を置いて支援する単元・題材を検討します。そして、定期的に教科部会を開き、授業の進め方の検討や実践をしての意見交換、評価方法の工夫を図ります。

A中学校の英語科では、毎週、教科部会を開き、表現力を育成するように、授業で扱う課題や活動、評価方法を部員で検討し、授業者によって取組に大きな差が出ないようにして共通実践を図っています。

教科や学校規模によっては、各中学校に1名しか該当教科の職員がいない場合があります。このようなときは、教科群をつくり、互いに授業参観、意見交換をすることで実践を積み重ねます。

B中学校では各教科1名ずつの職員しかいないため、3つの教科群（国英音美、数理保体、社・理・技家）をつくり、教科群毎に指導案検討、授業公開、授業検討会を進めています。また、定期的に教科群部会をもち、それぞれの実践を振り返ります。

目指す生徒像

+

目指す教師像

↓

共通した

授業実践

授業風景



2 総合的な学習の時間での取組

総合的な学習は、表現力をはぐくみやすい学習活動です。生徒の興味・関心に応じて伝えたい内容を見いだす場、効果的かつ的確に伝える方法を学ぶ場、実際に伝える場、活動を振り返る場を位置づけます。また、教科等の関連を図り表現力をはぐくむには、総合的な学習担当者が積極的に教科部員や道徳・学活担当者に関連する内容や時期を具体的に提案します。

A中学校の総合的な学習は、学年部が計画・実践を行います。概略は、右のようになります。

それぞれの学習では、伝えたいという気持ちの醸成を図り、最終段階で、相手を意識し表現する活動を設けます。加えて、活動の過程で、相手を意識し

1年	○A中パンフレットづくり ○地元情報誌づくり
2年	○職場体験 ○修学旅行調査活動
3年	○就学旅行記づくり ○人権劇発表会

て、自分の思いを表現することを繰り返し行います。目的に向かい相手を意識し自らの思いなどを繰り返し表現することを通し、表現力をはぐくみます。

3年生は、人権問題を学び、学んだことから仲間に伝えたいこと決め、グループをつくり「劇」という手法で仲間に伝えます。活動の流れは下の表のようになります。総合的な学習担当者は、活動を計画・実践する過程で、関連しそうな教科に内容と時期の関連を提案し、総合的な学習と教科等の指導計画を修正します。各教科との関連の概要は視覚的カリキュラムを参考にしてください。

【人権問題について考える】

- ・社会科、道徳の授業、講演などで人権問題を学ぶ。
- ・人権問題を調べる、各自が調べた人権問題を学級で共有する。

【演劇を学ぶ】

- ・発声、演技、衣装や道具、効果音を学ぶ。
- ・ロールプレーを行う。

【人権劇をつくって発表する】

- ・学級で2つの劇団をつくり、さまざまな人権問題から、劇団の伝えたいことや考えてほしいことを決める。
- ・テーマのそったシナリオ、衣装や小道具などを作り、演技練習を行う。
- ・人権劇を発表し、振り返る。

3 良好な人間関係づくり

表現力をはぐくむ素地は、学級や学年内の生徒同士、学年を越えた生徒同士の良好な人間関係です。生徒同士の良好な人間関係を構築するために、学級・学年でのいじめ防止学習プログラムを自校化した取組や異年齢集団の活動が有効です。

A中学校では、良好な人間関係づくりのため、道徳や学級活動の時間と生徒会行事とを関連付けて様々な活動を行います。全生徒が「ありがとうメッセージ」を書き、その内容を放送で紹介したり掲示したりしています。異年齢集団での清掃や保護者を巻き込んだ町内毎の生徒奉仕活動を行っています。Q-Uテストを年2回実施、分析し学級担任と教科担任が連携して子どもの支援を行っています。

人権劇

●演劇タイトル

そんな関係ないんじゃない？

●伝えたいこと・考えてほしいこと

「障がいがある人」も「障がいがない人」もそんなのは関係なくみんな同じなんだってことが伝わってくれたらうれしいです。



ありがとう

メッセージ

図書委員へ

「読書週間の企画や運営、とても素晴しかったです。おかげでたくさんの方にふれることができ、とても感謝しています。これからもこの企画を続けてください。」

◆ マネジメントと組織づくりへのアプローチ

■ 授業研究によるカリキュラム評価・改善のサイクル

1 視点を明確にした授業公開・検討会を行う

カリキュラムの中核をなすのは授業です。授業評価・改善がカリキュラム評価・改善に直結します。

A 中学校では教科の授業研究を推進しています。教科部員，学年部職員，教科の枠を越えた4人～5人の小グループの授業公開・検討会を，次のように実施しています。

- 授業者は指導案に表現力をはぐくむための本時の工夫を視点として明記する。
- 参観者はこの視点を中心に授業を参観し，検討会では意見交換を行う。
- 意見交換を通して課題や改善点がある程度明確になれば，その時点で指導計画を修正する。
- 修正を蓄積し，来年度の指導計画の改善に役立てる。

総合的な学習では，例えば，人権劇参観者に生徒が伝えたいことが伝わったかどうかのアンケートを実施するなど各学年で活動の振り返りを行います。学年部で組んだ活動の成果と他教科等の関連を検討します。実践を終えての反省，特に，教科でこんな学習がほしかったという具体的な内容や時期が明確になれば，必ず指導計画を修正し，来年度に引き継ぎます。

2 生徒と授業者で評価の視点をそろえる

授業は生徒と授業者が共につくるものです。生徒と授業者が同じ視点で授業を振り返ることは，表現力をはぐくむ授業改善には欠かせません。

A 中学校では学期末に生徒に授業アンケートをとります。アンケート項目は表現力をはぐくむことに関する内容です。この結果に基づき授業者は自分の授業を振り返り，次学期への改善策を考えます。そして，全職員が小グループで自分の授業改善策を提案し，グループ内で意見交換をします。

生徒も授業者の取組と自分の授業への取組を振り返ります。右のような評価カードを用意します。

生徒と授業者が共に表現力をはぐくむことを意識した授業ができるように努めます。

<先生の授業の進め方について>

生徒が意見や考え方を伝え合う 場면을授業でつくっている	4	3	2	1
--------------------------------	---	---	---	---

<あなたの授業の受け方について>

自分の考え方を伝えたり，相手の 意見を聞いたりしている	4	3	2	1
--------------------------------	---	---	---	---

■ 職員研修や学校評価・教員評価・各種調査結果の活用

「生徒の実態を踏まえ，表現力をはぐくむために何の研修が必要なのか」を企画委員会，研究推進委員会，教科主任会などで話し合い，校内研修を実施します。年度当初の研修計画は，実践を積み重ねると修正が必要になってくる場合があります。そんなときは躊躇せず，計画を変更します。

教科部会，教科主任会，学年部会を定期的に行い表現力の現状把握と改善策の検討に努めます。全国学力調査，定期考査などの結果がでたら分析をかけ，そのテストでの成果と課題を把握し，改善策を該当教科で検討します。そしてその結果を全職員で共有することが大切です。

また，仕事の効率化や職員の意欲向上のために，学力向上の取組と学校評価や教員評価を連動させる工夫を図ることも大切です。

A 中学校では，学校評価の保護者アンケートに表現力にかかわる内容を入れたり，教員評価シートの学習指導の評価項目には表現力をはぐくむことにかかわる項目を入れたりしています。

このように生徒の表現力の把握に努め，部会・研修を通し，手だて，評価方法，研修のもち方などを修正し，表現力をはぐくむカリキュラムを改善していきます。

目指す「子ども像」「はぐくみたい力」の育成を目指すカリキュラムモデル<今日的な課題>

環境への理解を深め、より良い環境づくりを進めようとする子どもを育成するカリキュラム ～「環境教育」を視点として～

◆ カリキュラムづくりのポイント

■ 環境教育実践の方向性の位置づけ

私は、総合的な学習の環境についての勉強は、始めの頃は「環境問題や地球温暖化と言うものは世界規模の話で、私達だけがやったら現状が変わるわけがない。」と思っていました。でも、仲間と共に勉強してきた結果、「そのようなことを思う人がいるから問題が悪化すること」や「みんなで対策をすれば大きな変化が生まれること」、「温暖化とその原因とのつながりについてわかったこと」も新しい発見でした。このように勉強することによって、「いろいろなつながりを発見することは楽しい」ということもわかりました。今回のことを通じて、つまらないと思っていた勉強がプラスのものに変わりました。そして、生きていくことも、仲間と過ごすことも勉強だと思いました。N中学校Hさん

上越市では、学校教育の目標の4番目に「夢・希望・未来をつなぐ教育の推進」を掲げています。環境教育はその筆頭におかれ、環境への感受性と環境に配慮した態度を育てることを目標に位置づけています。そして、「実践の方向」を次のように示しています。

- ・各教科・領域での環境教育の位置づけを明確にする。
- ・環境問題への理解の促進と具体的な活動の実践を充実する。

環境教育を学校課題の中核に据えてカリキュラムを編成するためには、この重点を自校化し、年間を通して具体的な取組を計画的・継続的に進めていく必要があります。

■ カリキュラム編成の手順

1 地域素材の洗い出しから単元として編成するまでの手順

子どもたちの身近な環境を考えることなく、地球的規模の環境問題を考えることは、机上の空論で学習が終了してしまう可能性もあります。そこで大切なのは、地域の環境学習素材の発掘です。地域の自然や施設の現状を知り、学校が目指す環境教育の目標に合った地域素材を選択していきます。地域素材が決まったら、各教科・領域での単元として編成していきます。そのための手順は例えば次の通りです。

- ・目指す子ども像・はぐくみたい力の明確化
- ・地域資料等からの地域素材の情報収集
- ・資料からの情報を参考にしての現地調査や地域の関係機関や人材からの情報収集
- ・学校が目指す環境教育の目標や生徒の実態を考慮しての地域素材の決定
- ・担当者による全体計画案の作成と運営委員会への提示
- ・研究推進委員会等による具体的な実践的課題の設定
- ・各教科・領域での環境教育の位置づけや関連が分かるような年間指導計画の作成

このように学校や地域の実態に即した地域素材を決定し、環境保全や省エネルギー等の活動を実践しながら、全職員の環境教育の推進に対する参画意識を培っていきます。

2 3つの視点から環境学習を構築する

文部科学省は「環境保全の意欲の増進及び環境教育の推進に関する基本的な方針」の中で、学校における環境教育を進める上では、「人と環境とのかかわりに関するものと、環境に関連する人と人とのかかわりに関するもの、この両方を学ぶことで、持続可能な社会に向けての道筋を把握することができる。」と述べています。また、環境教育により、恵み豊かな環境の大切さやいのちを尊ぶ心をはぐくむことが期待されています。では、この3つの視点でどのように具体的な活動を設定していけばよいのか、2つの上越市の地域素材例で説明します。

(1) 上越市の地域素材例1「鮭に学ぶ」

上越市には、鮭が遡上する川が幾つかあります。この「鮭」を教材にして多くの学校で環境教育が進められています。

① 人と環境とのかかわりに関するもの

C中学校では、地元の川で捕獲した鮭の燻製づくりを行い、地元の食文化について学習しています。地元の食材の確保は健全な環境があって初めて実現します。T小学校では、鮭の学習を通して海と川と森のつながりを知り、川や森の保全活動へと発展させています。この2つの学校では、内水面漁業協同組合の方々や地域・保護者の方々と連携して学習を進めています。

② 環境に関連する人と人とのかかわりに関するもの

鮭漁にたずさわる漁師さんの人口が減少し、さらに高齢化してきている現状を調査し、食文化を守る上での問題点についても考えます。また、地元で捕れた魚がほとんど地域外の業者に購入され、地元には他地域で捕れた魚が高値で入ってきているという矛盾についても考えます。

③ 豊かな環境や命の大切さを学ぶこと

鮭の採卵受精から、受精卵の飼育・観察、稚魚の飼育・観察、稚魚放流までの一連の流れを体験することで、命の大切さを学習します。そして、理科の発生の単元や道德教育で行う命の大切さの授業と関連付けます。

(2) 上越市の地域素材例2「電力について考える」

私たちの生活に欠かせない「電力」をテーマにして、環境教育を進めます。

① 人と環境とのかかわりに関するもの

火力発電所や水力発電所は、山を削り、海を埋め立ててつくられます。このように、私たちの生活に必要な発電所を建設するために、自然環境に大きな影響を与えてしまう場合があります。このような背景を理解しながら、電力消費と環境保全について考えます。

② 環境に関連する人と人とのかかわりに関するもの

日本の電力の6割をまかなっている火力発電所からは、多くの二酸化炭素が排出され、地球温暖化の原因となっています。また、石油や石炭などの化石燃料の枯渇が心配されています。このような背景を理解しながら、私たちの生活の在り方について考え、日常生活の中で、一人一人が実践できる節電などの具体的な活動に保護者や地域と共に取り組みます。

③ 豊かな環境や命の大切さを学ぶこと

水力発電所のダム建設によって、川の水量が減り、魚が住みにくい川になってしまうことがあります。このような現実をとらえて、命の大切さについて学習します。

<その他上越市の地域素材例>

- | | |
|----------------------|----------------|
| ・海岸に打ち上げられるゴミの問題 | ・水生生物による川の水質調査 |
| ・松の葉の気孔をつかった大気汚染調べ | ・蛍の飼育 |
| ・外来生物の分布調べ | ・森の生きものを調べてみよう |
| ・湿地帯の生きものを調べてみよう | ・新エネルギーの活用 |
| ・地域にある自動販売機の消費電力調べ | ・雪室づくり |
| ・黄砂はどれだけ上越市に飛んできているか | ・野鳥観察 |

◆ 学習内容の構造化と体系化へのアプローチ

■ 視覚的カリキュラム例（中学校2年生での実践）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
行事	入学式	地域を知る活動1	全校育樹活動	地域を知る活動2	体育祭	親子育樹活動	学習成果発表会	
総合	省エネCMの制作（スライド作り）	地域を知る活動1 省エネCMの制作（ナレーション入力）	地域を知る活動2 （各事業所しゅうへ）	地域を知る活動2 職場体験事前学習	職場体験 職場体験のまとめ	学習成果発表会準備（環境学習のまとめ）	学習成果発表会	修学旅行先事前学習
学級活動		生徒会活動への取組 学習生活の反省と改善		省エネ活動の実践				
道徳		友情、信頼 異性の理解 公正、公平、正義 自然愛、勇気の志	生命の尊厳 基本的な生活習慣、態度 友情、信頼	礼儀、希望、勇気、強い意志 自然愛、勇気の志	誠實、奉仕、公共の福祉 人間の気高さ 家族愛、家庭愛	生命の尊厳 向上心、個性の伸長 公正、公平、正義 人権・同僚		
国際		話す・聞く 「聞く生活」を考えよう	話す・聞く モアイは語る－地球の未来	書く 人物紹介パンフレットを作ろう			話す・聞く プレゼンテーション	
社会			【地】3章 世界の国々の調査 【歴】3章 開国と近代日本の歩み		【地】第2編 1章 さまざまな面から見た日本 【歴】5章 開国と近代日本の歩み		【地】第2編 1章 さまざまな面から見た日本 【歴】6章 二度の世界大戦と	
理科		【2分野】3動物の世界 ○動物たちの世界へようこそ 第1章 動物の行動とからだのしくみ 第2章 動物のからだのはたらき		【1分野】3電流 第1章 静電気と電流 第2章 電流のはたらき			【1分野】4化学文化と原子・分子 第1章 物質の変化 第2章 物質どうしの化学文化	
音楽					合唱の喜び		日本の音楽に親しむ	
美術		自然の美みと造形						
体育			健康と環境					

- ◆総合的な学習を核にして、各教科と連携しながら、環境問題の背景を伝えられるようにカリキュラムを編成しています。
- ◆道徳や学級活動では、日常の中で環境保全や省エネ活動への意識が高まるようにカリキュラムを編成しています。
- ◆育樹活動等の環境保全活動と総合的な学習や各教科との連携を図れるようにカリキュラムを編成しています。
- ◆2学年末に実施する修学旅行のテーマを「環境」として、総合的な学習や各教科との連携を図れるようにカリキュラムを編成しています。

***1 「モッタイナイ」:**
ケニアの女性活動家ワ
ンガリ・マータイ氏は、
日本の「もったいない」
という言葉に感動し、
この言葉を世界に紹介
している。

***2 「潜在自然植生」:**
ある土地から一切の人
間の影響を取り除いた
ときに想定される、そ
の土地がその時点で支
え得る最も発達した植
生のこと。横浜国立大
学名誉教授宮脇昭氏が
提唱。



写真2 希望の森

***3 「モリアオガエル」:**新潟県の準絶滅
危惧種に指定されてい
る貴重なカエル。



写真3 森青ケ池

■ カリキュラムの実際

1 全校体制での環境教育

(1) 学校スローガン：「モッタイナイで地域を緑に」

学校全体で環境教育に取り組むことで、子どもの環境への意識をより一層高めていきます。N中学校では「モッタイナイ*1で地域を緑に」という全校スローガンを設定し、生徒、教職員、地域が一丸となって地域の環境を生かした環境活動を推進しています。人と環境とのかかわりについて考える「森づくり」と「森青ケ池づくり」、環境に関する人と人とのかかわりに関する「新エネルギー教育」と「省エネの取組」の4つに、学校全体として取り組んでいます。(図1)



写真1 宮脇 昭氏講演会
「本物の森を未来に！」



図1 環境教育における4つの取組

(2) 人と環境とのかかわりに関するもの

① 「森づくり」から自然を大切にすることを育てる

地球温暖化防止、災害防止、生物多様性・地域固有の生態系保全など、森林の役割の大きさが見直されてきています。N中学校では、「潜在自然植生理論*2」に基づいて希望の森づくり(写真1・2)が行われています。

② 「池づくり」から生物の多様性の重要性を学ぶ

生物の多様性を守ることの重要性を子ども達に伝える必要があります。N中学校では、学校のプールに産卵していたモリアオガエル*3を保護するために、プール脇の空地に穴を掘り、近くの湧水を取り入れて池(ピオトープ)(写真3)がつくられています。

(3) 環境に関連する人と人とのかかわりに関するもの

① 新エネルギーから科学のすばらしさを知る

N中学校では、新エネルギーの例として、上越市から太陽光パネルを借用し、授業で使用するパソコンの電源として活用しています。これにより、生徒は新エネルギーへの興味・関心を高め、科学のすばらしさを実感しています。

② 自ら考え実践する省エネルギーの取組

N中学校の生徒は、省エネルギーの必要性を総合的な学習や外部講師を招いて開催した省エネルギー教室等の授業の中で学び、「節電」や「節水」「給食を残さない」等の実践を日常生活の中で進めています。

2 総合的な学習での環境教育

(1) これからのエネルギーを考える活動

N中学校では、総合的な学習で、様々な発電の方法と長所と短所について調べ学習を進めた後、これからのエネルギーについて班や学級で討議を深めています。エネルギーピラミッドをグループで作ることで、活発な討議を促しています。また、ICTを活用し、他グループの活動の様子を情報交換し、議論がグループ内からクラスへとスムーズに移行していく工夫をしています。

(2) CM制作

生徒たちは、環境やエネルギーの現状や問題点を学習し、日常の中で省エネ活動を進めています。しかし、総合的な学習で得た知識と日々の省エネ活動がなかなか結び付きません。家庭や地域でも省エネ活動を自主的に進める生徒を育成するには、環境やエネルギーの現状や問題点と省エネ活動を積極的に結び付け、活動の意義や目的を十分に理解させておく必要があります。この課題を解決するために、N中学校ではCMを制作*5し、様々な人に「自分たちが実践している省エネ活動とその目的」を伝える活動を行っています。CM制作は、複合的な知識や技能を必要とするため、教科学習(理科・美術・技術・国語等)との関連を意識して指導しています。

3 特別活動との連携

環境教育では、日常的な実践力が求められています。そのために、生徒会の委員会活動と連携させていきます。N中学校では、生徒会室前に省エネナビ*6を設置して、毎日結果を生徒会だよりや昼の放送で報告しています。ボランティア委員会では、アルミカンのリサイクルに取り組んでいます。(写真4)生活委員会では、全校のスイッチに省エネラベルを貼って、省エネを呼び掛けています。給食委員会では、ビニールのゴミ袋の使用を止め、生徒が古紙を使って作ったゴミ入れを採用しています。また、残食を少なくするために、給食の残量調査を実施しています。購買委員会では、給食室から出る廃油を使って廃油石けんを製作しています。図書委員会では、古本を回収して本のリユースを進めています。

4 保護者や外部機関との連携

環境教育を進めていく上で、保護者や外部機関との連携はとても重要です。N中学校では、家庭での省エネの取組を進めるために、国際芸術技術協力機構ArTechのKids'ISO14000プログラムに取り組んでいます。また、「森づくり」の活動を、PTAウイークエンド事業として実施し、多くの保護者と共に育樹活動が行われています。また、くわどり市民の森や国際生態学センターから講師を招いて、講演会や体験活動を実施しています。(写真5)そして、「にいがた緑の百年物語推進委員会」からは、活動援助金を受けて、環境教育の活動資金としています。「新エネルギーや省エネルギーの学習」では、(財)省エネルギーセンターや上越市環境情報センター、上越市環境企画課、雪だるま財団から講師の派遣や教材の提供を受けています。

*4 「CMを制作」:

Microsoft(R)

Windowsムービーメーカーで制作。



節水のCM絵コンテ

*5 「省エネナビ」:

現在の消費電力量や電気料金、二酸化炭素排出量を知らせてくれる機器。



写真4 アルミカンのリサイクル



写真5 くわどり市民の森のスタッフによる講習

◆ マネジメントと組織づくりへのアプローチ

■ 学校評価によりカリキュラムを評価・改善する

1 学校評価

環境教育の取組についても、学校評価とともに評価し、改善していくことが大切です。N中学校では、以下のように評価・改善を行っています。

- (1) 学校のグランドデザインに環境教育の目標と評価方法を明示 (PD)
- (2) 各分掌で保護者・生徒からの学校評価を分析 (C)
- (3) 各分掌で分析結果によって目標の見直しと今後の対策を検討 (A)

2 実践の状況を数値化して評価

環境への感受性や態度は、実践化された行動を数値にして評価することができます。例えば、学校から排出されるゴミの減量やリサイクルされた缶・紙などの量なども目安となります。N中学校では、学校に設置した省エネナビの電気量の推移をグラフ化することで、省エネの取組の効果を調べています。また、生徒会の委員会では、学級の省エネの取組状況をグラフ化して掲示しています。

3 環境学習に対する生徒や保護者の感想文やアンケートによる評価

環境学習に関連した授業や講演会、行事等の後に感想文やアンケートを実施し、それにより評価をすることができます。また、国語の意見文から環境に関連した内容のものを取り上げて評価することもできます。

■ 日々の地道な取組を継続・発展させていくことが大切に

世界各地の「異常気象」や「水不足」、「森林破壊」、「生物の絶滅」等のニュースが連日報道されています。日本では、あまり実感が伴わない問題だけに、我々の危機意識は薄いですが、人類の生存にかかわる重要な問題です。危機意識をしっかりとっておく必要があります。N中学校では、この実践によって、生徒の環境への意識が着実に高まっています。このような現状を次の世代に伝える環境教育の責任は大きく、今後も地道な取組を継続・発展させていくことが大切です。

■ 環境教育を推進する上で連携を図ることのできる上越市の関係機関

環境教育を推進していく上で、地域の関係機関との連携が大変有効です。以下に上越市の関係機関を紹介します。

- ・環境情報センター (〒943-0821 上越市土橋1914-3 市民プラザ 2F TEL: 025-527-3616)
- ・上越市環境企画課 (〒943-8601 上越市木田1-1-3 TEL: 025-526-5111 (内線1733))
- ・NPO法人エコネット上越 (〒943-0823 上越市高土町1-9-7 TEL: 025-526-8466)
- ・上越市地球環境学校 (〒949-1742 上越市大字中ノ俣4652-2 TEL: 025-541-2310)
- ・上越教育大学エネルギー環境研究会 (〒943-8512 上越市山屋敷町1 TEL: 025-521-3418)
- ・上越市くわどり市民の森 (〒949-1737 上越市西谷内地内 TEL: 090-5775-1208)
- ・大潟水と森公園 (〒949-3103 上越市大潟区潟町1381 TEL: 025-534-6190)
- ・安塚雪だるま財団 (〒942-0411 上越市安塚区安塚722-3 TEL: 025-592-3988)
- ・大池いこいの森ビジターセンター (〒942-0216 上越市頸城区日根津116-1 TEL: 025-530-3160)
- ・上越地域振興局農林振興部林業振興課 (〒943-8551 上越市本城町5-6 TEL: 025-526-9464)

目指す「子ども像」「はぐくみたい力」の育成を目指すカリキュラムモデル<今日的な課題>

自分の将来に夢をもち、 主体的に活動する子どもの育成を目指すカリキュラム ～「キャリア教育」を視点として～

◆ カリキュラムづくりのポイント

■ 上越市におけるキャリア教育の位置づけ

上越市では、学校教育の目標の4番目に「夢・希望・未来をつなぐ教育の推進」を掲げています。キャリア教育では、『自分の将来と生き方を考える力、望ましい勤労観・職業観をはぐくむこと』が目標に位置づけられています。

「実践の方向」を次のように示しています。

自らの進路を選択、決定できる能力、しっかりとした勤労観や職業観を身に付け、将来、社会人、職業人として自立できる態度や能力をはぐくむ必要があります。

そのためには、キャリア教育の視点からの教育活動を見直し、保護者や地域と連携した勤労や職業にふれる体験活動を充実していくことが重要です。

キャリア教育を教育課程の中核に据えてカリキュラムを編成するためには、この重点の自校化を図り、年間を通して具体的な取組を計画的・発展的に進めていく必要があります。

キャリア教育では、「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の4つの能力領域における8つの能力・態度の育成を目指し、活動に取り組む姿勢として、役割に対する「勤労観」を土台とし、その上に職業に対する「職業観」が位置する二層構造を考えます。

また、具体的な取組として、上越市では以下の4点を考慮する必要があります。

- ・小・中学校が連携して推進します。
- ・家庭・地域と連携して推進します。
- ・実際に社会や生活とかかわるリアルな学びを大切にします。
- ・キャリア・カウンセリングの考え方を大切にします。

以上の取組により、社会の形成者として必要な資質としての「生きる力」「学ぶ力」「働く力」をキャリア教育ではぐくみます。

■ カリキュラム編成の手順

1 キャリア教育の意義や位置づけを全職員が共有する

キャリア教育の意義や位置づけなどの基礎的な理論を全職員で研修し、共通理解のもとに、自校の教育目標を達成するため、あるいは学校課題の解決のために、キャリア教育の必要性、重要性を全職員で理解し、取り組んでいくことが大切です。

2 キャリア教育の視点で教育内容を見直し、全体計画を作成する

キャリア教育は、学校の教育活動全体を通じて行うものであり、特別活動での「学業と進路」にかかわる内容はもとより、総合的な学習の時間、道徳及び各教科において、生徒の発達段階を考慮して適切な指導を行うようにします。

そのためには、教科、領域、総合的な学習の時間での学習活動をキャリア教育の視点で見直し、

児童・生徒の発達段階ごとに育成する能力や態度を明確にし、それぞれ活動の関連を図りながら体系化することが大切です。

3ページにあるのは、キャリア教育にかかわる年間指導計画の例です。学校行事や総合的な学習の時間における活動を中心として、道徳や特別活動との連携を図り、各教科においてもそれぞれの単元の特徴を生かしたキャリア教育を推進しています。

このように組織的に学校として対応しながら、全職員のキャリア教育の推進に対する参画意識を培っていきます。

3 グランドデザインにキャリア教育を位置づける

キャリア教育は、教育課程全体で行います。自校のグランドデザインにキャリア教育を位置づけ、学習指導、生徒指導、進路指導との関係を明確にし、有機的な校内組織の構築を図るようにします(図1)。

また、キャリア教育では、体験的な活動が重要です。地域、保護者との連携や小・中学校の連携を考慮し、進学や進級への不安や進路への不安を低減できるように工夫することが大切です。

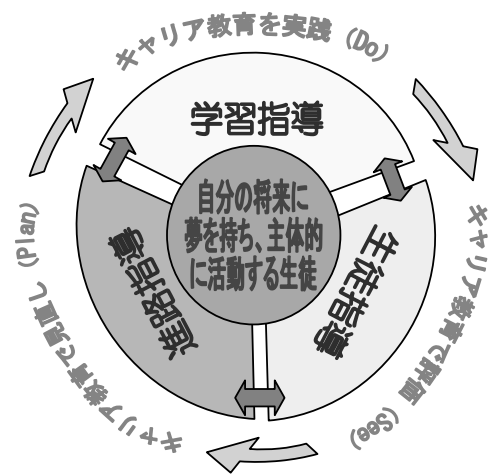


図1 教育課程におけるキャリア教育の位置づけ

4 キャリア教育を実践し、4つの能力領域、8つの能力・態度を育てる

キャリア教育では、勤労観・職業観をはぐくむため、学習プログラムの枠組みの例が国立教育政策研究所から示されています。その枠組み例を参考に、育てたい資質・能力を明確にし、授業に取り組みましょう。また、清掃指導や給食指導、学校行事等すべての教育活動のねらいや目的をキャリア教育の視点でとらえ、キャリア教育を実践しましょう。

4つの能力領域	8つの能力・態度
人間関係形成能力	自他の理解能力
	コミュニケーション能力
情報活用能力	情報収集・探索能力
	職業理解能力
将来設計能力	役割把握・認識能力
	計画実行能力
意思決定能力	選択能力
	課題解決能力

表1 4つの能力領域、8つの能力・態度

5 キャリア教育の視点で評価し、児童・生徒の変容を把握する

授業や活動の成果をキャリア教育の視点でしっかり評価しましょう。キャリア教育のカリキュラムを評価するためには、計画段階、実践段階、全体評価段階のそれぞれの段階において評価を行うことが大切です。カリキュラムの計画段階における「診断的評価」、カリキュラム実践過程での「形成的評価」、そして、1年間のカリキュラム全体を通して評価し、次の計画につなげるための「総括的評価」をPDSサイクルとして行っていくことが重要です(図2)。

さらに、これらの評価の具体的な方法として、それぞれの評価活動において、記述式アンケートやワークシート、ポートフォリオの記述を元に行う「質的評価」と生徒、職員、保護者などの選択式アンケートの集計などの数値による「量的評価」を併用し、生徒の変容を的確にとらえ、キャリア教育のカリキュラムの有効性をきちんと評価していくことが大切です。

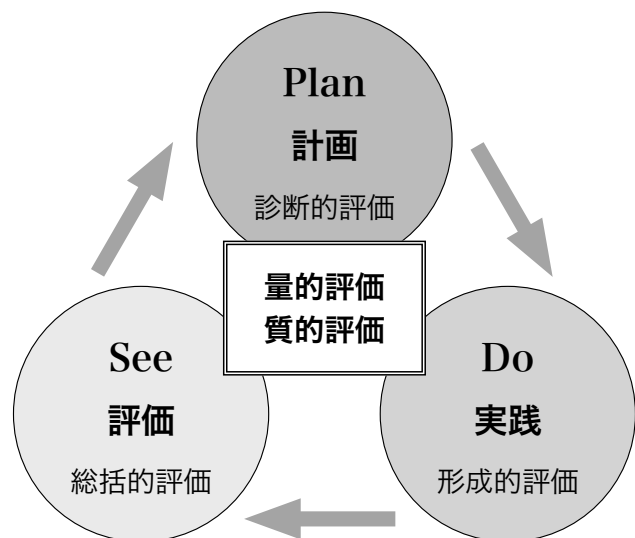
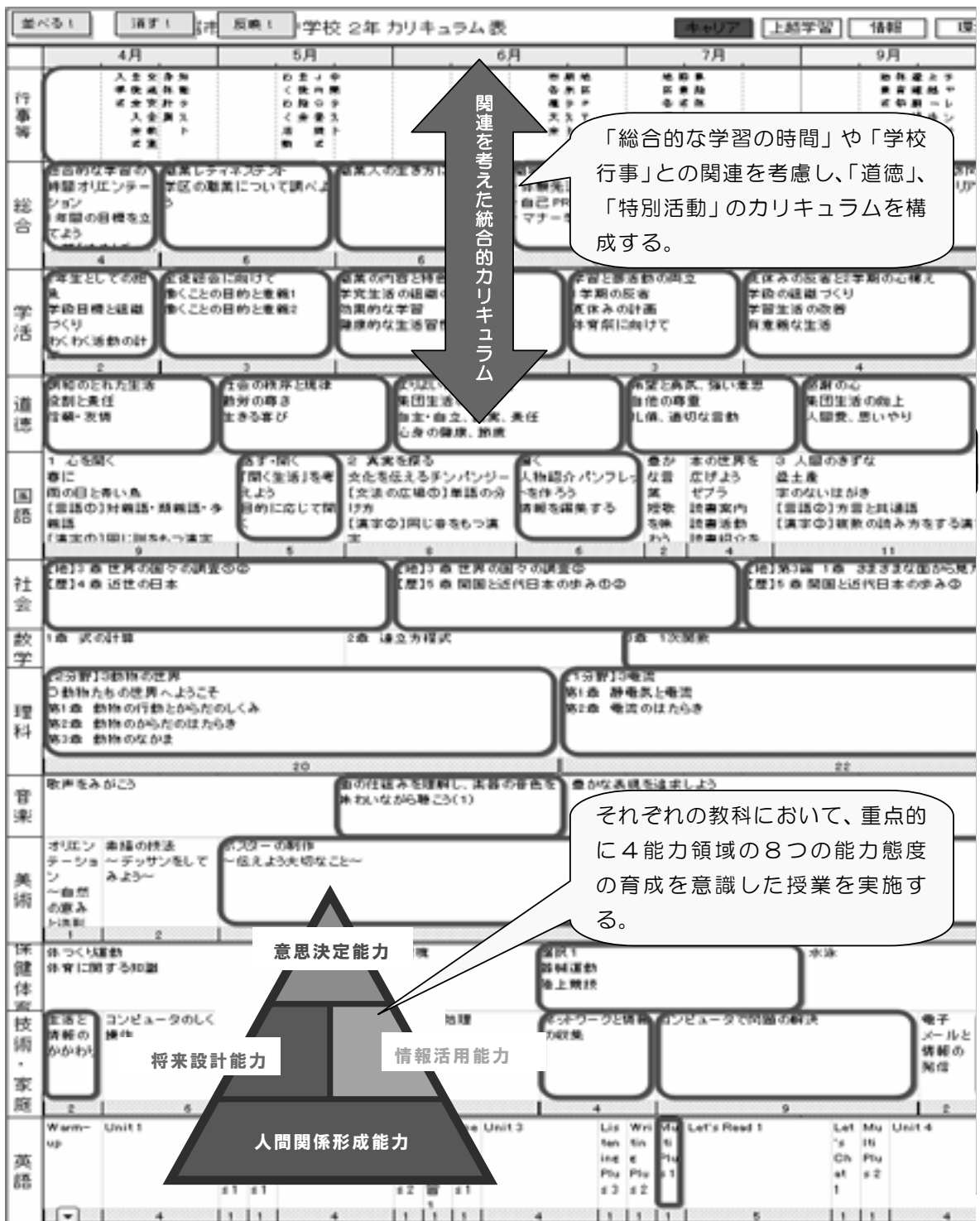


図2 キャリア教育と3つの評価

◆ 学習内の構造化と体系化へのアプローチ

■ 視覚的カリキュラム例（中学校2年生での実践）



- ◆ キャリア教育は、学校行事、総合的な学習の時間、特別活動、道徳を連携した統合的なカリキュラムを中核として行います。
- ◆ 教科では、教科のねらいを達成するために、キャリア教育の4つの能力領域の定着を意識した学習方法、学習活動や学ぶ目的や意義を考慮した学習内容を工夫します。

◆学活と進路学習

- ア 学ぶことと働くこととの意義の理解
- イ 自主的な学習態度の形成と学校図書館の利用
- ウ 進路適性の吟味と進路情報の活用
- エ 望ましい勤労観・職業観の形成
- オ 主体的な進路の選択と将来設計

◆3年間の系統的、発展的カリキュラムの推進

□1 学年

- 職業調べ
- 職業講話
- 職場見学
- 職業インタビュー
- 地域学習

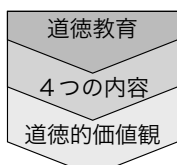
□2 学年

- 職業レディネステスト
- 職業講話
- 職場事前訪問
- キャリア・スタート・ウィーク
- 大学訪問
- 他地域に学ぶ

□3 学年

- 地域学習
- 地域貢献ボランティア
- 職業レディネステスト
- 上級学校調査
- 卒業生に学ぶ会
- 高校説明会
- 高校訪問
- 進路説明会
- 未来への提言

◆道徳教育とキャリア教育



未来を開く主体性のある日本人



■ カリキュラムの実際

1 学級活動とキャリア教育

特別活動の目標は、「望ましい集団活動を通して、心身の調和の取れた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」です。これは、キャリア教育の4能力領域における主に「人間関係形成能力」「意思決定能力」にかかわるものと考えます。特に、中学校の学級活動では、「学業と進路」の内容があり、進路学習が行われています。それらをキャリア教育の視点で、各教科、道徳及び総合的な学習の時間などの指導との関連を図るとともに、家庭や地域の人々と連携した活動を展開することで、より一層効果的にキャリア教育の中核である進路指導が充実すると考えます。

2 総合的な学習の時間とキャリア教育

総合的な学習の時間の目標は、「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする」です。これはキャリア教育の4能力領域における主に、「意思決定能力」「情報活用能力」「将来設計能力」にかかわるものと考えます。総合的な学習の時間の学習活動の全体目標を「地域とのかかわりを通して、自ら学び、自ら考え、主体的によりよい自己の生き方を考える。」とし、3年間の探究活動を系統的、発展的に構成することで、効率的にキャリア教育の4能力領域8能力・態度がはぐくまれ、生徒の発達段階に応じたキャリア発達が促されると考えます。

3 道徳の時間とキャリア教育

道徳教育の目標は、「学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うこととする。」です。内容では、「1主として自分自身に関すること。」「2主として他の人のかかわりに関すること。」「3主として自然や崇高なもののかかわりに関すること。」「4主として集団とのかかわりに関すること。」と道徳的価値観をはぐくむものです。これは、キャリア教育の勤労観・職業観とたくさんの共通性があります。道徳の時間のねらいを4能力領域で見直し、関連を意識して実践していくことで、道徳的価値観を身に付けるとともに、勤労観・職業観がはぐくまれます。また、特別活動や総合的な学習の時間における体験活動を道徳の授業に生かすことで、学習活動との関連を図ることができます。

4 教科とキャリア教育

各教科では、学習のねらいをキャリア教育の4能力領域の視点で見直すとともに、日常生活や社会、職業とのかかわりを考え、単元や題材の必要性や重要性を認識し、生徒に付けたい力を明確にした授業を行います。すなわち、学習のねらいを達成するために、学習活動にキャリア教育の4つの能力領域の8つの能力・態度の育成にかかわる活動を意識的に取り入れ、生徒のキャ

リア発達を促し、学習の内容を学習と生活、学習と社会、職業と関連させることで、「学ぶこと」と「生きること」、「働くこと」のかかわりを理解させ、それぞれの大切さを生徒が実感できる授業を展開します。

このように、教科の学習を通して、学習と生活や学習と社会、職業との関連を理解させるため、職業人の講師を招いての講師出前授業や生徒が職場に訪問し学習する職場訪問授業を行います。仕事のプロの知識や技能を学ぶだけでなく、その人の職業観や仕事に打ち込む姿に接することで、教科の学習の必要性、重要性を学び、学ぶ目的、学ぶ意義を実感するとともに学習への意欲の向上を図ります。



5 地域とキャリア教育

キャリア教育を推進するには、地域とかかわる学習活動が不可欠です。中でも、5日間の職場体験学習「キャリア・スタート・ウィーク」は、地域の協力なくしては行えません。「キャリア・スタート・ウィーク」は、キャリア教育の中核であり、生徒に「学ぶこと」「働くこと」「生きること」を理解させるための重要な活動です。その他には、「職場訪問」「職業人インタビュー」「高校訪問」「大学訪問」「ボランティア体験」など、学校では経験できない体験活動を地域と連携し、生徒の発達段階に応じて行います。このように、キャリア教育は「地域の子どもは地域で育てる」という理念のもとに活動を行うことが大切です。



また、学区の小学校と協力し、キャリアの視点で見直した学習プログラムを作成し、4能力領域における小・中の連携を図るとともに、「小学生体験授業」「リトルティーチャー授業」「子どもフォーラム」など、小・中が連携した活動を工夫することによって、進学への不安を減少し、それぞれ発達段階においてのキャリア教育を充実させることができます。

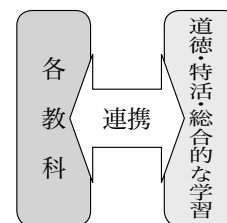
6 PTA活動とキャリア教育

これまでも行われているPTA活動をキャリア教育の視点で見直すことで、学校教育との関連が明確になり、活動の意義が再認識され、活動内容の工夫につながります。また、保護者がキャリア教育を理解することで、学校の教育活動への理解が深まり、学校と保護者との連携がより一層高まると考えます。

具体的には、「親子校地整備作業」や「冬囲い作業」を通して、保護者の責任感のあるきびきびとした仕事を生徒が見ながら、一緒に活動することで、仕事に対する姿勢や学校に対する思いを実感することができます。PTA活動を通して、働くことの意義を学ぶとともに、愛校心や地域の学校としての意識を高めることができます。

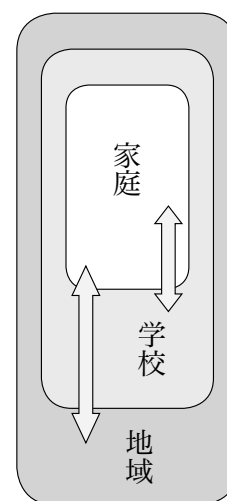


◆教科との連携



- 講師出前授業
- 職場訪問授業
- 職業教材開発

◆「地域の学校」



◆PTA活動で 付けたい力

- 人間関係形成能力
様々な人とコミュニケーションを図り、協力、共同して取り組む力
- 情報活用能力
体験を通して得たことを学校生活に生かそうとする力
- 将来設計能力
目標を立て、その達成に向けて計画的に努力する力
- 意思決定能力
活動に積極的に取り組み、主体的に解決していこうとする力

◆ マネジメントと組織づくりへのアプローチ

■ カリキュラムの推進と組織

キャリア教育を推進するには、学校、保護者および地域の組織の改善および充実、そして連携が大切です。校外において、様々な団体や組織のそれぞれの活動をキャリア教育の視点で見直すことで、組織の活動のねらいや目的が明確となり、活動の意義も深まると考えます。また、それぞれの活動をキャリア教育の視点で結び付けることで、それぞれ単独で行われていた活動の目指す生徒像や付けたい力を一致させ、互いに相乗効果を上げることができると考えます。

そこで、キャリア教育のカリキュラムを推進するに当たっては、主に学校内の教育活動における計画、実践、評価を行う「キャリア教育推進部」、保護者との協力によって体験的活動を行う「PTA組織」、そして、地域との協力、連携によって学校づくりや生徒の育成を支援する「校外の組織・団体」の3つに分類します。これらの組織の活動を学校企画委員会において企画し連絡や調整、活動内容の検討等を行います（図3）。

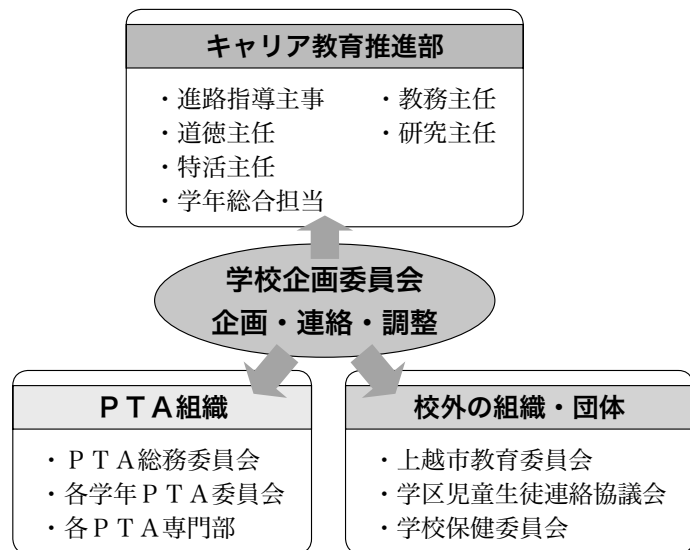


図3 キャリア教育と3つの組織

■ カリキュラム推進と教育環境

キャリア教育を中心としたカリキュラムを推進するに当たっては、教育環境の整備と充実が必要です。教育環境を「人的環境」、「物的環境」、「施設環境」、「設備環境」の4つに分類しました。「人的環境」とは、体験的活動や授業における講師等の人材であり、「物的環境」とは、必要な道具や機器等、活動における必要な機材です。「施設環境」とは、職場体験での受け入れ事業所や図書館、博物館等の校外学習の施設であり、「設備環境」は、学校の設備、施設等の学校内の教育設備です。

これらを地域住民、保護者、行政や企業、学校が共通な認識、理解のもと、協力して整備していくことで、より充実した体験活動を実施することができ、キャリア教育を中核としたカリキュラムのねらいを達成できると考えます（図4）。

以上のような様々な組織や団体が有機的に機能するためには、それぞれがキャリア教育への具体的な理解が必要不可欠です。学校における教職員への校内研修はもちろんですが、保護者や地域に対して、保護者会や職場体験説明会、PTAだより、学校だよりなどを通して活動のねらいや目的を紹介し、学校の取組を知ってもらうようにしましょう。

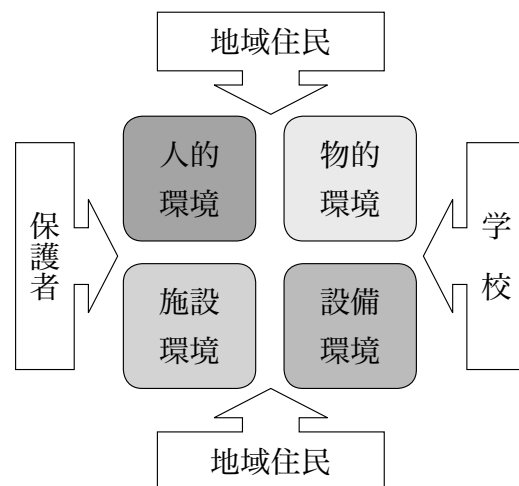


図4 キャリア教育と4つの教育環境

目指す「子ども像」「はぐくみたい力」の育成を目指すカリキュラムモデル<今日的な課題>

地球的視野に立ち、主体的に行動するための 資質・能力を高めるカリキュラム ～「国際理解教育」を視点として～

◆ カリキュラムづくりのポイント

■ 上越市における国際理解教育の位置づけ

上越市では、学校教育の目標の4番目に「夢・希望・未来をつなぐ教育の推進」を掲げています。ここでは、「実践の方向」の一つに国際理解教育を挙げ、子どもたちに異文化を理解し、共生できる資質・能力を育てることをねらいとしています。積極的に異文化を理解し、交流を図ろうとする態度を育て、主体的に行動できる能力を育成するための「実践の方向」を次のように示しています。

- ・異なる文化や多様な価値観を理解し、認め合える資質・能力をはぐくむための場を意図的に設定する。
- ・教育活動全体でコミュニケーション能力を高めるための活動を充実する。

この国際理解教育の「実践の方向」を踏まえ、子どもたちに、これからますます国際化が進む社会において地球的視野に立ち、主体的に行動するために必要な資質・能力の基礎を育成することが重要です。これまでの国際理解教育は、他の国の異文化を理解する教育や、単に体験したり交流活動を行ったりすることに留まることが多かったようです。しかし、これからの国際理解教育は、理解だけでなく、主体性や発信力も重視していかなくてはなりません。

- ① 自分とは異なる文化や価値観をもつ人々を受容し、「つながる」ことのできる力
=受容・共生の能力
- ② 自らの国の伝統・文化に根ざした自己の確立=郷土や自己を愛する心
- ③ 自ら発信し行動することのできる力=コミュニケーション能力

これらの資質・能力をはぐくむことにより、子どもたちは、出会う多様な文化や考えをもつ人々と互いに心を通い合わせ、理解し合い、共に協力してより良い社会を築き、生きていくことができると考えます。

■ カリキュラム編成の手順

1 全体計画・年間指導計画の作成・見直しを行う

各学校で国際理解教育に取り組むためには、まず、国際理解教育の目的やはぐくみたい資質・能力等について全職員が共通理解を図ることが必要です。その上で、自校の子どもたちの実態や取り巻く環境等を踏まえ、全職員が組織的・計画的に国際理解教育の取組を進めることが大切です。

- ・国際理解教育についての十分な理解
- ・子どもたちの実態の明確化と重点を置いたはぐくみたい資質・能力の決定
- ・研究推進委員会を中心とした全体計画案の作成
- ・研究推進委員会による具体的な実践的課題の設定
- ・各学年の年間指導計画の作成と研究推進委員会による取りまとめ

このように組織的に学校として対応しながら、全職員の国際理解教育の推進に対する参画意識を

高めていきます。3ページにあるのは、H小学校の国際理解教育にかかわるカリキュラムです。多様な人とかかわり合う活動を通して目指す資質・能力をはぐくむことが重要であると考え、生活科や総合的な学習の時間を中核に据え、「ふるさとを見つめ、国際感覚を豊かにする子どもの育成」を研究主題とし、目指す3つの資質・能力の育成に取り組んでいます。

2 発達段階や関連学習を考慮し、国際理解教育の学習を構築する

市内I区にある小・中学校では、国際理解教育ではぐくみたい3つの資質・能力を共通して下記のように細分化してとらえています。これらを子どもたちの発達段階や学校を取り巻く環境等を考慮し、全教育活動を通じて計画的にはぐくむことを目指します。

<受容・共生の能力の育成>

【他者理解】	多様な人々の考え方を理解し、その良さを大切にできる力
【異文化理解】	異なる地域や国の文化を理解し、異文化を尊重する態度
【協 力】	個々の考え方や能力を生かしながら助け合って生活できる力

<郷土や自己を愛する心の育成>

【自文化理解】	自分の地域や国の文化を理解し、尊重する態度
【自己開発】	自分らしさや自分のよさを認め、自己の伸長を図る力

<コミュニケーション能力の育成>

【受信（聞く）】	相手意識をもって話を聞く力
【発信（話す）】	相手意識をもって自分の意見を伝える力
【交流（かかわり合う）】	相手意識をもって聞いたり、話したりしながらよりよい考えを導き出す力

国際理解教育は、全教育活動を通して取り組みます。国際理解教育を進める上で、無理に新しい活動を生み出す必要はありません。これまでの自校の様々な教育活動を国際理解教育の視点から整理し直すことが必要です。各活動が国際理解教育ではぐくみたい3つの資質・能力のいずれにかかわるものであるかを明確にし、意識して実践することが大切です。

3 全体研修の場で年間の見直しをもつ

取組を進めるに当たり、教職員全員が共通理解を図り、国際理解教育について同じイメージをもたなくてはなりません。個々が抱くイメージに差異があっては、目指す子どもの姿、はぐくみたい資質・能力等にぶれが生じることになります。

- | |
|---|
| ◇目指す資質・能力や具体的な取組等国際理解教育についての研修
→先進校の取組等に学び、全職員が目指す子どもたちの姿についての具体的なイメージをもち、取組を進めます。 |
| ◇国際理解教育の3つの資質・能力の育成の視点からの自校の教育活動の見直し
→自校のこれまで取り組んできた教育活動や各教科の内容を国際理解教育の3つの資質・能力の視点から見直し、関連するものを抽出し整理します。 |
| ◇自校の子どもたちの実態や取り巻く教育資源等の把握
→はぐくみたい3つの資質・能力にかかわり、自校の子どもたちの実態や国際理解教育を進める上で活用できる物的・人的教育資源等を確認・把握します。 |

■ カリキュラムの実際

1 全教育活動を通じた取組（国際理解教育のベースとなる部分）

(1) 受容・共生の能力の育成

国際理解教育を通じて身近な世界から発展させ、異文化を理解し尊重していくなど広い視野をもたせます。子どもたちがこれから出会う異なる文化や考え方をもつ人々に対して、それを認め、受け入れ、そして力を合わせて共に生きていこうとする態度をはぐくみます。

- ◇低学年では、家族や友達のような身近な他者とのかかわりを大切にし、受容・共生の能力をはぐくみます。
- ◇中学年では、かかわりの範囲を広げ、自分の住む地域住民等とのかかわりを通して受容・共生の能力を高めます。
- ◇高学年では、障害のある人や外国人等とのかかわりを通して、様々な立場や考えをもった人々がいることを知り、互いに協力してよりよい社会を築こうとする受容・共生の能力を高めます。

(2) 郷土や自己を愛する心の育成

郷土や日本の生活習慣、文化、伝統、自然環境、歴史を学習したり、地域の人たちとふれ合ったりする活動を通して、郷土のよさや特色等に気づき、郷土に愛着をもたせます。同時に、これらの活動を通して自己を見つめ、自分の長所に気づき、より高めようとする力をはぐくみます。

- ◇異文化を理解するためには、まず比較対象となる自分の住む地域社会や日本についての自文化理解を深めることが大切です。
- ◇郷土について調べる活動を通して様々な人々とかかわります。そこからその人の考えや技術等のすばらしさを学び、自分自身をより高めていこうとする心をはぐくみます。

(3) コミュニケーション能力育成

多様な人とふれ合い、かかわり合う中で、互いに意思を通い合わせようとする相互活動を行い、自分の考えを自分なりの方法ではっきり表現できる力をはぐくみます。

- ◇子どもたちのコミュニケーション能力の実態を把握し、コミュニケーションスキル習得学習に取り組みます。場面や状況に応じた適切な会話を通して、自分の思いや願いを伝えたり、相手の考えを正しく聞き取ったりする力をはぐくみます。

2 はぐくみたい資質・能力に応じた学習活動の展開

(1) 受容・共生の能力をはぐくむ学習活動

子どもたちに受容・共生の能力をはぐくむには、多様な人と継続的に、繰り返しかかわり合う学習活動を行うことが重要です。単発的な交流では、本当の意味でのお互いの理解、交流が図られたとはいえません。学校での異学年の子ども同士、家族や地域住民、保育園児やお年寄り等の身近な他者、老人介護施設のお年寄り、特別支援学校の子どもたち、外国人等々、多様な人たちとの継続的なかかわりを通して、相手を理解し思いやる心、共に力を合

受容・共生の能力の育成

- 他者理解
- 異文化理解
- 協 力

郷土や自己を愛する心の育成

- 自文化理解
- 自己開発

コミュニケーション能力の育成

- 受信（聞く）
- 発信（話す）
- 交流（かかわり合う）

わせて生きていこうとする態度をはぐくみます

H小学校では、年間を通して縦割り班を生かした活動を進めています。春には各班で歩くコースを決め、チェックポイントでその場所(郷土)等に関する問題を協力して解いて回るフィールドワークを取り入れた遠足を実施するなど、異学年間のかかわりを深めています。また、近くにある老人介護施設や保育園、市内にある養護学校を定期的に訪問し、交流を通して受容・共生の能力の育成に取り組んでいます。さらに、毎年日本を含めいろいろな国の人がブースを開き、自国の遊びやプレゼンテーション等を通して文化を紹介する「ワールドフェスティバル」を開催するなど、ALTを含めた外国人とのかかわりを通して異文化理解にも取り組んでいます。

(2) 郷土や自己を愛する心をはぐくむ学習活動

異文化を理解するためには、まず身近な地域や文化についての理解、すなわち自文化理解が大切です。郷土の史跡・名所、様々な技能をもつ人たちが郷土が生んだ偉人、自然環境等を調べる活動を通して、子どもたちに郷土の特色等に気付き、愛する心をはぐくみます。

3年の総合的な学習の時間では、自校の校歌の歌詞にある「美しい町」「歴史に薫る町」「教育の町」等の言葉に着目し、自分の住む郷土の自然や人等について調べる学習を進めています。その活動を通して郷土のよさや美しさ等についての理解を深め、それを守り育てて行こうとする心をはぐくんでいます。

また、これらの学習活動の過程において出会う様々な人々とかかわる中から、その考え方や生き方、残した偉大な功績等にふれ、学習活動を通して自分自身を見つめ直し、自己を高めていこうとする気持ちをはぐくんでいます。

(3) コミュニケーション能力をはぐくむ学習活動

国際理解教育ではぐくみたい3つの資質・能力の中で、コミュニケーション能力は多様な人々とかかわるための重要な基盤となります。互いの思いや考えを伝え合い、理解し合うためにはこの能力が不可欠です。そこで、計画的にコミュニケーションスキル

習得学習に取り組めます。

左図はH小学校のコミュニケーション能力育成モデルです。これを核として、子どもたちにはぐくみたいコミュニケーションスキルの育成に取り組んでいます。

国語科を中心に、基本的なコミュニケーションスキルの習得に取り組めます。そして、生活科や総合的な学習の時間等で、習得したスキルの応用力の育成に努めます。全教育活動を通してコミュニケーション能力をはぐくんでいくことが大切です。



○異学年とかかわり合い、協力して郷土を学ぶ全校縦割り班遠足



○外国の文化を学ぶワールドフェスティバル



○郷土についての理解を深める調査活動



○コミュニケーション能力の育成を目指した話し合い活動



・役割分担を決めての話し合い学習
・話し合いの基本パターンの学習

◆ マネジメントと組織づくりへのアプローチ

■ 授業実践によるカリキュラム評価・改善のサイクル

＜H小学校におけるコミュニケーション・スキル育成表＞

学年	目標	学習内容	評価方法
1	自分の話を相手に伝えることができる。	自分の話を相手に伝える練習。	相手の話を聞き、自分の話を伝える練習。
2	相手の話を聞き、自分の話を伝えることができる。	相手の話を聞き、自分の話を伝える練習。	相手の話を聞き、自分の話を伝える練習。
3	相手の話を聞き、自分の話を伝えることができる。	相手の話を聞き、自分の話を伝える練習。	相手の話を聞き、自分の話を伝える練習。
4	相手の話を聞き、自分の話を伝えることができる。	相手の話を聞き、自分の話を伝える練習。	相手の話を聞き、自分の話を伝える練習。
5	相手の話を聞き、自分の話を伝えることができる。	相手の話を聞き、自分の話を伝える練習。	相手の話を聞き、自分の話を伝える練習。
6	相手の話を聞き、自分の話を伝えることができる。	相手の話を聞き、自分の話を伝える練習。	相手の話を聞き、自分の話を伝える練習。

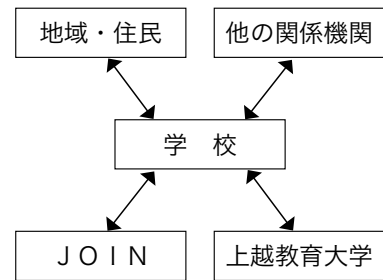
目指す資質・能力をはぐくむためには、その手立ての有効性を評価したり、はぐくんできた資質・能力を子どもの姿で確認したりしなければなりません。また年間を見通し、目指す資質・能力がどの程度はぐくまれているか、そのための取組や指導のあり方が適切であったか等について、常に評価・改善に努めることが重要です。

国際理解教育の取組を進めるH小学校では、左のようなコミュニケーションスキル育成表を作成し、子どもたちにはぐくみたいコミュニケーションスキルを明確にしています。この育成表では「受信(聞くこと)」、「発信(話すこと)」、「交流(かわり合うこと)」の3つの観点から、各学年ではぐくみたい力を具体的な子どもの姿として表しています。さらに各学年・学級ごとにコミュニケーション能力見取り表を作成し、個々の子どもたちに目指すコミュニケーション能力がどの程度はぐくまれているかを常にチェックし、成果や課題を把握して、次の改善へとつなげています。このように、常に目指す子どもの姿で取組を評価し、改善に取り組むことが大切です。

握して、次の改善へとつなげています。このように、常に目指す子どもの姿で取組を評価し、改善に取り組むことが大切です。

■ 共同性・協同性・協働性を大切にした組織づくり

国際理解教育を通して子どもたちに目指す資質・能力をはぐくむためには、共同性・協同性・協働性が大切です。国際理解教育を進める上で、学校内だけの活動では十分な成果を上げることはできません。子どもたちは、地域、住民や外国人等年齢も性別も、そして国籍も異なる多様な人々とのかかわりからたくさんのことを学びます。そのかかわりをより充実したものにするためには、各関係機関との連携・協力が不可欠です。市内には上越国際交流協会(JOIN)や上越教育大学を始めとするたくさんの団体・組織があります。それらと連携を密にして、目指す資質・能力をはぐくむために、学校と関係機関とが共同性と協同性を発揮することが重要です。



学校内においても職員一人一人の英知を結集し、全員が同じ方向を向いて取組を進めることが大切です。前述のように国際理解教育は、低学年では生活科、中・高学年では総合的な学習の時間を中核として、各教科、道徳、特別活動等学校における全教育活動を通して行われます。それぞれの教員が専門性を意識し、強い当事者意識をもって国際理解教育を担うことが重要です。そして、一人一人が力を発揮するとともに、互いに連携し、協働性を発揮して自校の国際理解教育を推進することが必要です。

国際理解教育支援ネットワーク

- 上越国際交流協会 (JOIN) <http://www.valley.ne.jp/~join/>
- 上越教育大学 <http://www.juen.ac.jp/>
- 上越地域学校教育支援センター (JSIRC) <http://www.jsirc.jp/>

目指す「子ども像」「はぐくみたい力」の育成を目指すカリキュラムモデル<今日的な課題>

人とかがわる体験活動を通して、 思いやりの心をはぐくむカリキュラム ～「道徳教育」を視点として～

◆ カリキュラムづくりのポイント

■ 上越市における道徳教育の位置づけ

子どもたちの現状として、規範意識の希薄化、人間関係を築く力の不十分さ等が指摘されています。また、自分に自信がもてないといった自己肯定感や自己有用感の低さは、「自立し、共生する」ための基盤の弱さにつながっていきます。これらを踏まえて上越市では、学校教育の目標の2番目に「思いやりに満ちた豊かな心の育成」を掲げています。道徳教育はその筆頭におかれ、よりよく生きる実践力をはぐくむことが目標に位置づけられています。そして、「実践の方向」を次のように示しています。

- ・道徳の時間を要として、全教育活動を通して、道徳性を培い、自己の生き方についての考えを深め、道徳的実践力をはぐくむ。
- ・「宿泊体験活動」や「職場体験活動」等の豊かな体験活動を工夫し、活用するとともに、指導体制や指導方法、教材開発等の視点から道徳の時間の改善・充実を図る。

道徳教育を学校課題の中核に据えてカリキュラムを編成するためには、この方向から自校化し、年間を通して具体的な取組を計画的・継続的に進めていく必要があります。

■ カリキュラム編成の手順

1 道徳教育における重点目標の設定

カリキュラムを編成する際、校長の方針の下、道徳教育の推進を主に担当する教師（道徳教育推進教師）が中心となり、全教師が協力して子どもや学校の実態、保護者の願い等を把握し、学校全体における道徳教育の重点目標を決めることが必要です。子どもたちの実態を把握するために、ヒューマンテスト（道徳性テスト）やQ-U学級満足度テストなどを実施することもよいでしょう。また、子どもたちに身に付けさせたい道徳性のアンケートを保護者に実施することもよいと思います。

市内U小学校では、子どもたちの課題を全職員で検討したところ、進んで話したり行動したりすることができない子が多いこと、相手への思いやりに欠ける言動が見られることなどが、挙げられました。そこで、一人一人の子どもが自信をもって行動できるようになること、他人への思いやりの心をはぐくむ必要があることを確認しました。そのため、道徳教育を通して、下の表のような子どもの姿を育てていきたいと考えました。さらに、目指す子どもの姿を焦点化するため、今年度は特に人とかがわる体験活動を重視しながら、相手を思いやる心をはぐくむことを重点目標としました。

心の育ち	道徳的心情	道徳的判断	道徳的実践意欲と態度
自分を見つめる心	よい行いの喜びを感じる。	自分の行動を律する。	よりよく生きようとする気持ちをもつ。
相手を思いやる心	相手のよさを感じる。	相手の立場に立って考える。	一緒になってやろうとする気持ちをもつ。

2 発達段階を考慮した目指す子どもの姿の明確化

小学校の6年間で子どもが道徳的価値の自覚を深め、自分のものとして身に付け発展させていくためには、子どもたちの発達段階や実態に合った指導をしていくことが大切です。そこで、各学年で目指す子どもの姿を明確化する必要があります。U小学校では、子どもたちに思いやりの心をはぐくむために、目指す子どもの姿を次のように設定しました。

- 【1・2年】身近にいる幼い人や高齢者等との触れ合いの中で、相手のことを考え、優しく接し、具体的に親切な行為ができるようになる。
- 【3・4年】相手の現在の状況、困っていることなどを想像することによって、相手のことを考え、親切な行為を自ら進んで行うことができるようになる。
- 【5・6年】多様な他者と触れ合い、助け合う機会を増やすとともに、その体験を生かし、思いやりの心をもつことの大切さについて深く考え、行動できるようになる。

3 年間指導計画の作成

道徳の時間の年間指導計画の作成に当たっては、道徳教育の全体計画に基づき、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動との関連を考慮する必要があります。各教科等における指導の目標、内容や教材が、道徳の時間の指導のねらい、主題、資料とのかかわりが見られ、関連を図ることにより効果を高めることが期待できる場合は、指導時期を配慮するなどして、指導の工夫を図ることが大切です。また、各教科等の目標や内容には、子どもの道徳性の育成に関係の深い事柄が含まれています。各教科等においては道徳的価値を踏まえた指導によって、子どもの道徳性をはぐくんでいきましょう。

教科等	道徳教育にかかわる側面	含まれている道徳的価値
国語	伝え合う力、思考力や想像力及び言語感覚を養う。	道徳的心情や道徳的判断力を養う基本になる。
社会	地域の発展に尽くした先人の働き、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育てる。	伝統と文化を尊重し、我が国と郷土を愛することにつながる。
算数	見通しをもち、筋道を立てて考え、表現する能力を育てる。	道徳的判断力や工夫して生活や学習する態度の育成にも資する。
理科	栽培や飼育などの体験活動を通して自然を愛する心情、科学的な見方や考え方を養う。	生命尊重、真理を大切にする態度の育成につながる。
生活	身近な人々、社会及び自然とかかわる活動や、体験をする。	生活上必要な習慣を身に付け、自立への基礎を養う。
音楽	音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、豊かな情操を養う。	美しいものや崇高なものを尊重する心につながる。
図画工作	つくりだす喜びを味わうようにするとともに、豊かな情操を養う。	美しいものや崇高なものを尊重する心につながる。
家庭	日常生活に必要な基礎的な知識や技能を身に付け、生活をよりよくしようとする態度を育てる。	生活習慣の大切さを知り、自分の生活を見直すことにつながる。
体育	集団でゲームなどの運動をする。	きまりを守る、協力するなどの態度を養う。
外国語活動	外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める。	日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努めることにつながる。
総合的な学習の時間	自ら課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成する。	自己の生き方を考えたり、自己の目標を実現したり、他者と協調したりする態度の育成につながる。
特別活動	学級や学校生活における望ましい集団活動や体験的な活動を実施する。	日常生活における道徳的実践の指導をする重要な機会となる。

◆ 学習内容の構造化と体系化へのアプローチ

■ 視覚的カリキュラム例（小学校2年生での実践）

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	
行事等	入学式 学年集会 迎える会	全校遠足 体育大会	ピクニック 参観日 読書週間	水泳記録 SGE	発表会 自由研究 学習参観	マラソン 文化祭	
生活	町のひみつ 町たんけん1	なつやさいをそだてよう 市へ苗を買いに行く なえうえ、やさいのせわ	生きものともだち 生きものがし、おせわ	やさいのしゅうかく なつやさいパーティ 生きもののせわ	町たんけん2 町のはっぴよう あきやさいをそだてよう 畑の準備 野菜のお世話、観察	いもほり	
学級活動	係をきめよう 学級のめあて 給食の準備、片付け 安全な生活、避難の仕方	全校ウォークラリー がんばるぞ体育大会 体育大会を振り返って	SST「友達の話方」 雨の日の遊び方 図書館の使い方 6歳臼歯を大切に	SGE「ハートびつたり」 1学期を振り返ろう もうすぐ夏休み お楽しみ会	夏の思い出発表 2学期の係を決めよう 2学期のめあて 不審者からの避難の仕方	係活動を工夫しよう 目を大切にしよう 楽しい文化祭 学級の問題を話し合おう	
道徳	1-1 節度ある生活態度 2-1 礼儀 4-1 規則の尊重	4-1 公徳心 3-2 自然愛、動植物愛 2-3 信頼、友情	3-1 生命尊重 2-2 思いやり、親切 1-2 勤勉、努力 1-3 勇気	3-2 自然愛、動植物愛 1-5 正直誠実、明朗 2-2 思いやり、親切	1-1 節度ある生活態度 2-1 礼儀 4-5 郷土愛 1-2 勤勉、努力	4-2 勤労 2-3 信頼友情 4-4 愛校心 2-2 思いやり、親切	
国語	一 みんなでよもう ふきのとう 今週のニュース	二 じゅんじょに気をつけてよう たんぼのちえ かん字のひろば	三 書いて知らせよう かんさつ名人になろう ともこさんはどこかな 同じぶぶんをもつかん 字/かん字の書きじゅ	四 本と友だちになろう スイミー かん字のひろば もうすぐ夏休み/丸・点・かき おおきくなあれ	五 友だちにわかるように話そう あつたらいいな なみの カンジーはかせのつめい	六 だいじなところに気をつけよう 読んで読もう サンゴの海の生きものたち かん字のひろば	七 ようすを考えて読もう お手紙/何が どうした かん字の読み方 見たこと、感じたこと
書写	しせいといえびつ のもち方をたしかめよう	かん字のひみつをさぐる	かたかなのことは書いてみよう かたかなのひょうしよしゃのひろば	かん字を書いて見よう(一) しよしゃのひろば			
算数	ジャンケン ゲーム ひょうとグラフ	1000までの数の計算のしかたをかんがえよう たし算のひっ算	計算のしかたをかんがえよう ひき算のひっ算	いろいろな形とけい ふく長さ しゅう①	たし算とひき算 かけ算(1)	かけ算(2)	
図工	たのしいな いっばい	いっばい いっばい	いっばい いっばい	おしゃよく見て書こう れなど友だちの顔うぶつ	よく見て書こう れなど友だちの顔うぶつ	どんでんき 見て、見て、おはなし 見て、見て、おはなし おはなし おはなし	おはなし おはなし おはなし おはなし
音楽	☆うたでもだちのわをひろげよう みんな1・2・3 ・ロンドンばし/こむぎをそびうた/おちちがまい /子犬のピンゴ(鑑) ・かくれんぼ(共) ◎えがおできようも	☆ドレミであそぼう ・ドレミのうた(鑑) ・ドレミあそび ・かっこう ・かえるのがつしよう ◎ぶっかりくじら	☆リズムにのってあそぼう ・トルコこうしんきょく/メヌエット(鑑) ・いるかはざんぶらこ ◎山のボルカ *音楽フェスティバルの曲	☆リズムにのってあそぼう ・トルコこうしんきょく/メヌエット(鑑) ・いるかはざんぶらこ ◎山のボルカ *音楽フェスティバルの曲	☆リズムにのってあそぼう ・トルコこうしんきょく/メヌエット(鑑) ・いるかはざんぶらこ ◎山のボルカ *音楽フェスティバルの曲	☆リズムにのってあそぼう ・トルコこうしんきょく/メヌエット(鑑) ・いるかはざんぶらこ ◎山のボルカ *音楽フェスティバルの曲	☆いい音を見つけてあそぼう ・虫のこえ(共) ・シンコペテッド クロック(鑑) ・音さがし ◎かぼちゃ
体育	固定施設遊び かけっこ リレー	かけっこ 表現リズム遊び	表現リズム遊び 平均台遊び	てつぼう遊び 水遊び	水遊び 平均台遊び	水遊び 平均台遊び	

- ◆道徳の時間は、各学年とも思いやり・親切(2-2)に関する指導を学期に2時間以上設定しています。
- ◆道徳の時間を核にしながら、特に関連が深い教科学習・生活科、総合的な学習の時間・学校行事などとの関連性を矢印で示しています。



全校遠足



縦割り班での遊び



2年生の栽培活動



夕日コンサート

心のノートの活用例

- ・導入で用いる場合
主題に対する興味・関心を高める。
- ・展開で用いる場合
中心資料を補助するものとして活用する。
- ・終末で用いる場合
道徳的価値についてまとめたり、考えを整理したりすることの手助けとなる。

■ カリキュラムの実際

1 全教育活動での取組（道徳教育のベースとなる部分）

(1) 認め合い、励まし合い、共に高まるうとする学級づくり

学級づくりは道徳教育のベースです。日常的な生活の場面で、あいさつなどの基本的な生活習慣、礼儀等の生活上のきまり、人間としてしてはならないことなどを身に付けたり、教師と子ども及び子ども相互の人間関係を深めたりすることが大切です。例えば、帰りの時間に、うれしかったことの発表を取り入れたり、教師自身もうれしかったことや願いなどを語ったりすることも、学級内に温かな心の通い合いを生み出すとともに、道徳的価値の耕しにつながっていきます。

さまざまな活動を通して、子ども相互の交流を深め、節度を持ち、伸び伸びと生活する中で、認め合い、励まし合い、学び合う場と機会を積極的に設けていきましょう。また、職員研修では情報交換を行い、互いの学級づくりのよさを学ぶ場としていきましょう。

(2) 人間関係づくりの継続的な取組

友達や保護者、地域の人とかかわる場を設定し、様々な人と好ましい人間関係を築こうとする心情や態度をはぐくんでいきましょう。

- ◇構成的グループエンカウンター（SGE）やソーシャルスキルトレーニング（SST）等を計画的に実施し、学級内の温かい雰囲気づくりに努めます。
- ◇縦割り班で様々な活動を行ったり、行事等の体験活動を充実させたりして、相手のことを考え、協力して活動する態度を育てます。
＜縦割り遠足・縦割り給食・縦割り遊び・集団宿泊活動など＞
- ◇行事や学習活動で、学習ボランティア（保護者、地域の人など）とかかわる機会を積極的に設定し、基本的な礼儀や対人関係のマナー等を身に付けさせることに取り組みます。
＜米や野菜の栽培活動、水泳や陸上練習、調理実習、夕日コンサートなど＞

2 道徳の時間の授業づくり

(1) 子どもの心に響く道徳の時間の授業づくり

道徳の時間の学習指導を構想する際には、学級の実態、子どもの発達段階、指導の内容や意図、資料の特質、他の教育活動との関連などに応じて柔軟な発想をすることが大切です。例えば、次のような学習指導を構想することができます。

- 子どもの実態に即した読み物資料等の提示方法を検討
- 体験の生かし方の工夫
体験活動で感じたことや考えたことを道徳の時間の話合いに生かしたり、体験活動の内容と似た題材等を扱ったりすることによって、指導の効果を高めたりすることが考えられます。
- 家庭や地域社会との連携の工夫
家庭や地域での話合いや取材を生かした学習、地域の人や保護者の参加を得た学習など、連携を図った指導も考えられます。
- 心のノートの活用

(2) 教材の開発と資料収集

道徳の時間に使用する教材は、子どもが道徳的価値の自覚を深めていくための手掛かりとして、大きな意味をもっています。道徳の時間の資料となる教材を選択したり開発したりして、その効果的な活用に努めることが大切です。U小学校では、子どもの興味・関心や、体験活動との関連等を考慮して、よりふさわしい教材を選択するため、数社の副読本から教材を選択できるようにしています。また、学級の実態や子どもの興味・関心を考慮して、自作資料の作成や資料の改作にも積極的に取り組んでいます。

また主資料だけでなく、補助資料(例えば、場面絵や写真資料、ワークシート)も資料開発ととらえ、それらをひとまとめにした教材ユニットを作成し、道徳資料室等に保管しておくようにします。それらを共有化することによって、さらなる授業の改善につなげていきます。

3 各教科等における道徳教育

各教科等の目標や内容には、子どもの道徳性の育成にかかわりの深いものが多くあります。また、学習に取り組む姿勢や態度の育成を通して、子どもの道徳性がはぐくまれます。それぞれの学習場面において、子どもが伸び伸びとかつ真剣に学習に打ち込めるよう留意し、学級の雰囲気や人間関係に思いやりがあり、自主的で協力的なものになるよう配慮することが大切です。話合いの中で自分の考えをしっかりと発表すると同時に友達の意見に耳を傾けること、各自で、あるいは協同で課題に最後まで取り組むことなどは、各教科等の学習効果を高めるとともに、望ましい道徳性をはぐくんでいくことにもなります。

以下に各教科等における道徳教育の例を示します。

- ① 簡単な調理の学習で家族の一員として、進んで役にたとうとする心をはぐくむ。(家庭科・5年)
- ② 水泳で努力が実った自分に自信を深める。(体育科・4年)
- ③ 学校たんけんの活動を通して、時と場に応じた礼儀や態度の大切さを感じ取る。(生活科・1年)
- ④ 力を合わせて教室や廊下の長さを測る。(算数科・3年)

4 保護者や地域社会との連携を図る取組

家庭や地域社会との連携を充実していくには、多様な連携の在り方を考え、学校及び家庭や地域の実態に合った方法を工夫していく必要があります。

U小学校では学校通信や学年通信、インターネットのホームページ等で、学校の道徳教育の方針や子どもの成長の様子がうかがわれる取組などを伝え、共に考えたり子どもに働き掛けたりする呼び掛けを行っています。また、保護者会や学校評議員会の折に、児童の様子や課題について話し合い、意見交流を行う機会を設けています。さらに、道徳の時間の授業の公開を学校の年間計画に位置づけ、学校における道徳教育への理解と協力を家庭や地域社会から得る取組を行っています。

保護者や地域の人々との共通理解を深め、相互の協力によって道徳教育の充実を図っていきましょう。

魅力的な資料とは

- ・ 親近感もてるもの
- ・ 感動性の豊かなもの
- ・ 子どもが自分の問題としてとらえることができるもの
- ・ 主人公の迷い、弱さ、葛藤などが浮き彫りになっているもの、など

各教科等における道徳教育充実のためのポイント

- ① 内容や教材に含まれている道徳的内容を通してはぐくむ。
- ② 子どもの学習活動への取組を援助することではぐくむ。
- ③ 学ぶ姿勢や態度を身に付けていくことではぐくむ。
- ④ 友達と一緒に活動する楽しさや充実感を感じられるようにすることではぐくむ。



6年生の学習場面

◆ マネジメントと組織づくりへのアプローチ

■ 子どもの実態把握を通して、カリキュラムを評価・改善する

1 子どもの道徳性の評価

子どもの道徳性を評価するためには、教師と子どもの心の触れ合いを通して、共感的に理解し、評価する必要があります。評価する方法には、実際の生活場面における子どもの行動観察や会話による方法、作文やシートなどの記述による方法等があります。考えたことや感じたことを関連する心のノートのページに書き込むことも一つの方法です。なお、これらの記述に教師が受容的なコメントを加えて返却することは、教師と子どもの心の触れ合いを深め、子どものよりよく生きる意欲を喚起することにもつながります。子どもの道徳性については、その実態を多面的・継続的に把握して、指導の改善に生かすよう努めましょう。

2 教育活動に関する評価

カリキュラムの中核をなすのは、授業です。U小学校では、「体験活動と関連付けた思いやりの心を培う道徳の時間の実践」を研究主題に掲げ、道徳の時間の授業を年2回以上公開することにして、授業前の学習指導案の検討会や、授業後の協議会を行い、主に右のようなことを中心に指導法の改善について話し合い、相互に情報交換をしたり、学び合いをしたりする場としています。授業後の協議会では、「思いやりの心をはぐくむために体験活動との関連のさせ方をどうしたらよいか」を中心に協議を行っています。協議会で話し合われたことは、「研推だより」にまとめられ、次の授業実践に生かされていきます。

- ① 道徳の時間と体験活動の関連のさせ方の工夫
- ② 体験活動を生かした資料選定の工夫
- ③ 話し合い活動、書く活動、説話等の工夫
- ④ 心のノートの活用の仕方

各学期末に道徳教育に関する評価アンケートを児童や保護者に実施し、学校の道徳教育の評価や改善に生かしています。実践の成果や残された課題を振り返り、次学期、次年度のカリキュラムに反映させていきたいと思います。

■ 道徳教育・道徳の時間を充実させるために

人間は本来、だれもがよりよく生きたいという願いをもっています。道徳教育は、人間が本来もっているこのような願いやよりよい生き方を求め実践する人間の育成を目指し、その基盤となる道徳性を養う教育活動です。道徳教育・道徳の時間を充実させて、子どもたちに「生きることのよさ」や「生きることの楽しさ」等を感じ取らせたいものです。そのためには、まず教師自身が道徳教育・道徳の時間にプラス志向をもち、手間ひまをかけて授業づくりを楽しもうとする姿勢が大切です。また、教師同士で指導方法の違いを学び合い、道徳の時間の指導の質を高めていくことにより、学校全体で進める道徳教育が一層充実する原動力となります。それらの活動の連続が、カリキュラムの改善につながっていきます。

よりよく生きたいという思いや願いに、大人と子どもの違いはありません。教師自身が一人一人の子どもに温かく接し、共に考え、悩み、夢や感動を共有するという姿勢を大切にしながら、道徳教育・道徳の時間の指導を充実させていきたいと思います。参考となるホームページを以下に紹介していきます。

道徳教育に関するリンク集 <http://fish.miracle.ne.jp/adaken/link/dotoku.htm>

道徳教育に関する情報発信（上越教育大学 林 泰成先生）<http://home.interlink.or.jp/~yasunari/>

目指す「子ども像」「はぐくみたい力」の育成を目指すカリキュラムモデル<今日的な課題>

全教育活動を通し、差別に気付き、 差別を許さない子どもをはぐくむカリキュラム ～「同和教育」を視点としたカリキュラムモデル～

◆ カリキュラムづくりのポイント

■ 上越市における同和教育の位置づけ

上越市では、あらゆる差別解消のため、人権意識の啓発を進め、さまざまな機会や場面を通じての同和教育を推進してきました。

子どもたちに人権尊重の精神を体得させるためには、「かかわる同和教育」を実践し、部落差別問題をはじめとする人権問題を主体的に解決する力を育てる必要があります。そのためには、

- ・自校の全体計画・年間指導計画の見直しと小・中連携による9年間を見通した指導計画の作成・実践に努める。
- ・「差別の存在に気付く」「差別に憤る」「差別の解消に取り組む」授業づくりを目指す校内研修を推進する。
- ・教師自らが積極的に研修会へ参加し、人権感覚を磨き、差別や偏見を見逃さない集団の育成に努める。

などのことが大切になってきます。

同和教育を学校課題の中核に据えてカリキュラムを編成するためには、上記のことを自校化し、年間を通して具体的な取組を計画的・継続的に進めていく必要があります。

■ カリキュラム編成の手順

1 全体計画・年間指導計画の作成・見直しを行う

各学校において同和教育に取り組むには、まず、同和教育にかかわる概念や同和教育が目指すものについて明確にします。そして、職員がこれを十分に理解し、組織的・計画的に進めることが大切です。そのための手順は例えば次のようになります。

- ・管理職及び担当者による全体計画案の作成と運営委員会への提示
- ・研究推進委員会による具体的な実践的課題の設定
- ・各学年の年間指導計画の作成と研究推進委員会によるとりまとめ
- ・職員会議での全職員の共通理解

このように組織的に対応しながら、同和教育の推進に対する参画意識を全職員に培っていきます。同和教育は単発的に行っても、決してうまくいきません。息の長い取組、全教育活動を通じた取組が必要です。

3ページにあるのは、H小学校の同和教育にかかわる年間指導計画です。H小学校では教育活動全般にわたり「人権（愛・いのち）尊重」の精神を基盤に据え、同和教育を中核とした教育課程の改善と充実を図り、地域・保護者の信頼と願いに応える学校づくりに努めています。

2 発達段階や関連学習を考慮し、同和学习を構築する

同和学习では、差別を自分の問題としてとらえ、それを実践的態度として生きた力に育て広げて

いくための指導法の研究を継続・深化していく必要があります。

H小学校では、子どもの発達段階に即して指導内容を三つの「期」に分け、一年生からの学習の積み重ねにより、部落差別をはじめとするあらゆる差別の解消に向けた学習を行っています。

<Ⅰ期（1，2年）> 身の回りの差別問題を中心に

<Ⅱ期（3，4，5年）> 身の回りの差別問題と社会で起きている差別問題を中心に

<Ⅲ期（6年）> 部落差別問題を中心に

また、内容の取り上げ方から同和学習を3つに分類しています。

<生活同和学習> 1年～6年

学級の子どもの生活実態をもとに、同和教育の深化に結び付けることが可能なものについて、学校生活の中で起こりうる差別問題を取り上げる学習。

<体験同和学習> 3年～6年

総合的な学習の時間や各教科・道徳・特別活動の中での体験を通して認識を深めたことをもとに、同和教育の深化に結び付けることが可能なものについて、それと直結した差別問題を取り上げる学習。

<部落差別問題学習> 6年

部落差別問題について、社会科で関連学習として扱った内容の中で、発展的に同和教育の深化に結び付けることが可能なものや、社会生活の中で起きている差別問題を取り上げる学習。

これら三つの同和学習を支える学習として、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間などとの関連学習があります。(次ページの年間指導計画をご覧ください)

特に、部落差別問題学習においては社会科との関連指導がとて重要になります。部落差別問題を扱った同和学習は、他の差別問題と違って、児童の生活に密着したものではありません。児童が差別の不当性に憤るためには、知的理解が不可欠です。そのために、社会科で部落問題にかかわる内容をふくらませて取り扱う必要があります。これがベースにないと、同和学習時に資料の読み取りに終始し、その差別に対する被差別者の心情に迫ることができないのです。

3 職員研修の充実により、教師自身の人権感覚を養う

同和教育を進めるに当たっては、感性と知的理解の両面から、職員研修の充実と強化を図っていかねばいけません。

そのポイントは、教師自身が「人権感覚を豊かにすること」と「差別の要因やその歴史的背景について正しく理解すること」を通して意識改革を図ることにあります。

実際の研修では、次のような内容が考えられます。

<研修の具体的なねらいは>

厳しい差別の現実を知ることで教師自身が憤りを感じ、人権についての意識を高揚させるとともに、その現実に関心をもち、自分自身を照らし合わせて考えます。自分の教育観や世界観の中にその実態を生み出す、または放置する部分がないかを検証し、自分自身を変革することを目指します。

<研修の具体的な中身は>

◇部落差別の起こりや広がり、解消を目指した闘いを講師や史実から学ぶ研修

◇現在も起きている差別の実態を、現地を訪ねたり、当事者からお話を聞いたりして学ぶ研修

このような研修をカリキュラムの中に積極的に組み込んでいきましょう。

◆ 学習内容の構造化と体系化へのアプローチ

■ 視覚的カリキュラム例（小学校6年生での実践）

一自ら学び、認め合い、心豊か 6年生 『第Ⅲ期：めあてを

	4	5	6	7	8	9	
教科	社会 国語 理科	社会：『源朝と鎌倉幕府』（朝岡寺）『徳川家光と江戸幕府』 差別されていた人々が室町時代の文化の担い手であったことを知り、尊敬の念を抱く。	理科：動物・植物のからだのほたらき 観察や実験から、動物が生きていくために必要な物を考え、大切にしようとする気持ちを高める。	社会：『江戸の文化』『解体新書』（蘭学の人々が文化の担い手であったこと、解放会に			
道徳	「オトちゃん（個性の伸張）」 「サケの一生」（自然愛と環境保全） 「ロレンゾの友達」（信頼・友情）	「木のいのち」（創意工夫） 「エイズと闘った少年の記録」（生命尊重） 「生まれ出るもの」（感動・畏敬）	「自分の気持ちよしやべりしあお」（個性の伸張） 「地球があふない」（自然愛と環境保全） 「しらんぷりはできないよ」（思いやり） 「朝のリズム」（寛容・謙虚）	「加代ちゃん（理想・努力）」 「親しき仲にも礼儀あり」（礼儀） 「いやと言えたとき」（自由と規律）	「母の日記」（生命） 「積極的に聞」（信頼・		
同和学習		人の作り出す差別「つくられた差別」（ID） ①「差別は人間がつくり出すものである」ことが分かり、社会の中にある差別的な言動に留意する態度と感性を育てる。	人権の歴史「人権の歴史」（ID） ①生きる糧の「人権の歴史」を資料に、「大いなる力」「おそれる」「ケガレ」「キヨメ」などの用語及び概念を理解させる。	中世の差別「東四郎のつぶやき」（ID） ①室町時代に差別を受けていた人々が、現代に残るすばらしい民衆文化を築き支えたことを理解し、差別を受けた又四郎の気持ちに共感し、差別者への憤りの気持ちを高める。	江戸時代は蘭学が盛んで、蘭学は蘭学の人々が文化の担い手であったこと、解放会に		
タイム	オリエンテーション 出合いふれ合い人間愛 自分の将来を考える 周囲には様々な職業があり、様々な生き方があることをつかむ。	東本町小の伝統を残していこう 特色あるマーチング活動を通して、伝統を受け継いでいくことを大切に思う気持ちをもつ。	様々な生き方 発見 ①障害のある人（疑似体験活動） 様々な障害を体験する。アイマスク・手話・口話・身体験をし、これからの自分の在るべき姿を考える。	②佐渡で伝統を引き継ぐ人（調査・体験活動） 佐渡の伝統や自然について調べ、友達と協力しながらのインタビューの準備をする。佐渡で生きがい、思いや願いを調べ、生き方を考えたり、自覚を促したりする。			
特別活動	入学式	e-スポ 2007	ふれあいウォーク				
ふれあい班活動	1年生を迎える会	前期友達ふれあい月間 ふれあい集会① ふれあいランチ e-スポ2007 ふれあい給食 ふれあいウォーク ふれあい集会②				前期ふれあい班のリーダーとしての活動を振り返ろう	
学級活動	友達をもっと知ろう 自分や友達の秘密を知り合う中で、多くの友達と仲良くしようとする気持ちを高める	花の世話	e-スポに向かって 最高学年としての自分の役割を自覚し、仲間と共に協力し合い、運動会を成功させようとする意欲を高める。	一学期を振り返ろう 目当てを振り返り、自分のがんばりや不足点を考える。友達の支えに気付く。		学級学年の絆を深め、佐渡宿泊体験学習に向ける仲間や係の仲間、でも仲良くし、絆を深うとする気持ちを高め	

◆同和学習を余剰時数の中から各学年とも年間11時間設定しています。

◆同和学習を核にしなが、特に関連が深い教科学習・道徳・総合的な学習の時間・全校縦割り班活動などとの関連性を矢印で示しています。



縦割り班遠足



栽培活動の様子



縦割り班給食



縦割り班での遊び



同和学习の様子(6年)

■ カリキュラムの実際

1 全教育活動での取組(同和教育のベースとなる部分)

(1) 認め合い、支え合い、みがき合う学級づくりの推進

学級づくりは同和教育のベースです。そこでは、一人一人の問題をみんなの問題としてとらえ、進んで解決していく力を高めるための手だてや学年・学級としての高まりを目指す活動を工夫していく必要があります。その中で、個別指導に力を入れ、一人一人の子どもたちの理解に努め、個に応じた心の耕しを図っていくのです。そのために、「心のノート」「心のアンケート」「教育相談」などを活用します。

レポートによる「学級づくり交流会」などを年1回以上行い、情報交換しながら、お互いの学級づくりのよさを学び合っていくことも大切です。

(2) 人間関係づくりの継続的な取組

異学年集団(縦割り班)による活動を通して、好ましい人間関係と正しい人権感覚を育てます。

◇「友達ふれあい月間」(人権強調月間)を設定し、自分の心や相手の心を見つめ直します。実際の活動例を以下に掲載します。

○縦割り班遠足・縦割り班集体会・縦割り班での栽培活動・縦割り班での給食・縦割り班での遊び・班内でのよい所発見カード交換 など

◇日常的な清掃活動や栽培活動などを縦割り班で行い、友達のことを考えながら協力して仕事をする態度を育てます。

2 同和学习の授業づくり

(1) 『生きるシリーズ』を活用した授業づくり

同和学习の基本は『生きるシリーズ』の活用です。発達段階や学習の履歴などを考慮しながら、自学年・自学級に合った教材を選定しましょう。基本的には道徳の時間を活用する例が多いですが、総合的な学習の時間を使って大単元を構成することもできますし、6年生なら社会科の時間を活用することもできます。

授業づくりのためのポイントを以下に示します。

○子どもの感性に訴える資料や題材を検討しましょう。

○「総合的な学習の時間」や他の教科・領域と関連した同和学习の在り方を工夫しましょう。

○子どもが差別問題に正対し、感性に訴えることのできる授業であるかどうか検討しましょう。

①子どもが差別に憤っているか、被差別者に共感しているか、生き方を見直しているか

②知識・理解の習得のみで終わっていないか。

③子どもの発言に対する教師の支援が、認識を深める上で有効だったか。

④資料から離れ、差別問題を自分の問題としてとらえる展開だったか。

⑤部落差別への憤りをもち、人として自分はどう生きていくかに正対する展開だったか。

(2) 教材開発と資料収集を計画的に

同和学習では意図的に資料収集を図ることが大切です。

「学年専用の棚」や「個人毎のファイル」「ビデオラック」などを活用しながら、授業で使用したシートやカード、掲示物、ビデオ等の整理をしましょう。これらが、その学年を担当した職員の同和学習の授業づくりに役立つのです。

3 職員の資質・指導力を高める取組

差別の実態に学び、鋭い人権感覚を磨くため、年間を通した組織的、体験的な職員研修を実施していかなければなりません。

H小学校では次のような職員研修を行っています。

- 新任職員に対する校内研修（4月1日実施）
- 現地学習会（4月10日実施）
→現地に学び、差別の現実学ぶことの重要性を確認しました。
- 外部講師を招いての研修会
→同和教育の先達を招き、「かかわる同和教育」についてのお話を伺いました。
- 県内外での現地学習
→本年度は東京での現地学習を行いました。ハンセン病問題やと場における差別問題について、直接語り部の方や解放同盟の支部役員からお話を伺いました。また、屠場で実際の牛や豚の解体について研修しました。
- 夏の現地学習会（白山会館）への自主的参加
→夏季休業中の現地研修会へ、自主的に参加しています。5回以上参加する教師も大勢います。
- 部落解放同盟新潟県連合会や新潟県同和教育研究協議会主催の研究集会、県教委・市教委等主催の研修会への参加

4 保護者の理解と認識を高める取組

H小学校では、「同和教育だより」を定期的に発行し保護者の同和教育への理解を促しています。内容は実際の各学年の同和学習の流れや研修会の内容など、多岐にわたります。

また、保護者対象の授業参観や講演会などの充実を図っています。授業参観などの機会を利用して、全学級が同和学習の授業を公開するなど、学校一丸となった取組が大切です。

今年H小学校では、保護者と子どもと一緒に同和教育について学ぶ「同和教育学習会」を開きました。この会では部落解放同盟の県連委員長、長谷川サナエさんから、現代における差別について学びました。

文化祭では同和学習での学びを発表しました。5年生は、「ハンセン病問題」「新潟水俣病問題」「食にかかわる問題（屠畜に関する差別問題）」の3つについて、保護者や地域の方々を招いて発表したのです。発表会には新潟から専門家も来校され、感想を述べていらっしゃいました。保護者からも多数の意見や感想をいただくことができました。

このように、保護者・地域を巻き込んだ同和教育を進めます。

<同和学習を参観した保護者の感想>

◇授業を参観すると親も、看板や新聞記事に目がいき、考えるようになります。毎年、その繰り返して親も少しずつ、一つずつ意識を積んでいくのだと思います。子どもは、差別はいけないと分かっているながらも、自分の心の弱さも分かっており、これからいろんな場面のなかで、授業で教わったことを思い出して進んでいってほしいと思います。



国立ハンセン病資料館語り部の平沢さんと



親子同和教育学習会
長谷川サナエさんが講師



文化祭開会式
5年生の見所発表

◆ マネジメントと組織づくりへのアプローチ

■ 同和教育における実践的態度の育成

「差別をしない、させない、許さない」という同和教育で培われた力が、日常生活の中でその態度として具現化することが大切です。そのためには、同和学习はもちろんですが、各教科の学習や道徳の時間、特別活動等の中で、日常的に児童の実態に合った指導を続けていかなければなりません。

具体的には、次のような指導が有効ですが、各学校でそれぞれ工夫してみてください。

I 期 (1・2年)

<日常における指導の手だて>

- ・学習・生活のルールの徹底
- ・心がつながるあいさつや仲間づくりのためのソーシャルスキルトレーニング
- ・ちくちく言葉とほかほか&にこにこ言葉
- ・自分の行動や気持ちを振り返る連絡帳等の活用とその時間の設定
- ・アサガオの栽培やウサギの飼育を通した命をはぐくむ活動
- ・「友達のよさを見つけたカード」の交換
- ・グループエンカウンターによる仲間づくり
- ・互いに協力し合うグループ学習の設定
- ・差別的な言動に対する指導
- ・一人一人の児童の話を書く教育相談

II 期 (3・4・5年)

<日常における指導の手だて>

- ・集団生活ルールの徹底
- ・Q-Uアンケートの実施
- ・温かい言動の具体的な例示と「友達とのかわり方」のソーシャルスキルトレーニング
- ・「そうだねゲーム」で受容的態度の育成
- ・信頼関係を深める教育相談
- ・休み時間の人間関係の把握
- ・めあてについて振り返ることの継続
- ・友達や周りの人々のよさに気付く場や「みんなで遊ぶ日」の設定

III 期 (6年)

<日常における指導の手だて>

- ・学級でのルールづくりと徹底
- ・心温まる言葉と冷める言葉
- ・「友達のいいところ発見カード」の交換
- ・グループエンカウンターによる仲間づくり
- ・班学習等の互いに協力し合う場の設定
- ・「自分がされて嫌なことは、人にしない」ことの指導の徹底
- ・差別を許さない・見逃さない学級づくり
- ・差別的な言動に対して意見文を書く活動と、これからの在り方を考える話合いの活動の設定
- ・一人一人の話を書く教育相談の実施

このような具体的な手だての中から、自校や自学級に合うものを選び、継続的に実践していきましょう。

■ 先進校に学びながら、同和教育を実践する

上越市は同和教育の先進地です。様々な学校が同和教育に取り組んでいます。また、行政も一体となった取組がすすめられています。これから同和教育を更に深めようという学校にとって、参考になる実践、事例がたくさんあります。

「無理をせず」「欲張らず」「できるところから」同和教育を始めましょう。

<同和教育を中核とした学校づくり・同和学习の授業づくりならこちらへ>

- 上越市立東本町小学校「愛・いのち 第2集」(同和学习の指導案集) TEL 523-2446
※実際の授業を通して検討された指導案集です。82本の指導案が掲載されています。

<行政の相談窓口はこちらへ>

- 同和行政事業は上越市総務課同和対策室へ TEL 526-5111
- 学校同和教育事業は上越市教育委員会学校教育課へ TEL 545-9244
- 社会同和教育事業は上越市教育委員会生涯学習推進課社会教育係へ TEL 545-9268

※白山会館での現地学習の窓口は生涯学習推進課社会教育係です。また、ここでは、人権・同和教育関係資料の貸出も行っています。関連図書が235冊、関連ビデオが33本あります。

目指す「子ども像」「はぐくみたい力」の育成を目指すカリキュラムモデル<今日的な課題>

情報活用能力とICT利活用を高めるカリキュラム ～「情報教育」を視点として～

◆ カリキュラムづくりのポイント

■ 上越市における情報教育の位置づけ

「インターネットで『福祉士』について調べていたら、たくさんの興味深い情報が収集できて、ますます興味をもつようになりました。そして、もっと調べてみたいと思うようになりました。職場体験学習が待ち遠しいです」 Y中学校 生徒A

「職場体験のまとめを、電子情報ボードを使って発表しました。僕のレポートの『図書館のレファレンス・サービス』をクリックすると、職場体験を行った高田図書館のWebサイトにリンクして、詳しい説明が出るようにしてあったので、説明がとてもうまくできました」 Y中学校 生徒B

上越市では、学校教育の目標の4番目に「夢・希望・未来をつなぐ教育の推進」を掲げています。情報教育は其中で、環境教育、キャリア教育、国際理解教育と並ぶ4つの柱の一つとして、「情報活用能力を育てること」を目標に位置づけられています。情報活用能力は、文部科学省によって、以下の3観点と8要素に体系化されています。

○情報活用の実践力

- ・課題や目的に応じた情報手段の適切な活用
- ・必要な情報の主体的な収集、判断、表現、処理、創造
- ・受け手の状況などを踏まえた発信・伝達能力

○情報の科学的な理解

- ・情報活用の基礎となる情報手段の特性の理解
- ・情報を適切に扱ったり、自らの情報活用を評価・改善したりするための基礎的な理論や方法の理解

○情報社会に参画する態度

- ・社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響の理解
- ・情報モラルの必要性や情報に対する責任
- ・望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度

また、上越市では、情報教育にかかわる「実践の方向」を次のように示しています。

情報活用能力を育てる

インターネットや情報機器を活用することで学ぶ意欲を喚起し、情報を主体的に活用する情報活用能力を向上させるとともに情報モラルの向上を図る必要があります。

そのためには、教職員がICT活用指導力を発揮し、授業や教育活動を工夫するとともに、情報モラルを身に付けさせる授業や家庭と連携した取組を充実していくことが重要です。

情報教育を学校課題の中核に据えてカリキュラムを編成するときには、学習内容（情報活用能力の3観点と8要素：以下、情報活用能力）を身に付けさせることと、学習手段として利活用すること（各教科等の目標を達成する際に効果的に情報機器を活用すること※以下、ICT利活用）の両方を大切にして編成する必要があります。また、社会全体で急速な情報化が進んでいる状況を見ると、児童・生徒のみならず、保護者等周りの大人も含めて情報活用能力の向上を図ることが、「教育の情報化」に対する理解と支えにつながり、ひいては社会全体の健全な発展につながると考えます。

■ カリキュラム編成の手順

1 全体計画・指導計画の作成・見直しを行う

各学校において、情報教育に取り組むには、各教科等の指導を担うすべての教員が、自らが指導する教科・領域で「情報活用能力を育てること」を念頭において、効果的なICT利活用を図りながら、日々の教育活動を進めていくことが必要です。そして、その中で効果的にICTを利活用していきます。そのための手順は、例えば次のようになります。

- ・教育の情報化推進リーダー（推進委員会）を校務分掌に位置づけ、企画・立案を担当
- ・情報活用能力の育成とICT利活用を両輪として、「教育の情報化」を推進していくことを全職員で共通理解
- ・各教科等の「3年間の指導計画（中学校）」作成と教育の情報化推進委員会によるとりまとめ

このように組織的に学校全体で対応しながら、全職員に情報教育の推進に対する参画意識を培っていきます。3ページは、市内Y中学校の情報教育にかかわる指導計画の一部です。Y中学校では「教育の情報化」を推進して情報教育を中核とした教育課程の改善と充実を図り、地域・保護者の信頼と願いに応える学校づくりに努めています。

2 発達段階や関連学習を考慮して情報学習を積み重ねていくカリキュラムを構築する

小学校段階では、情報活用の実践力を中心に情報学習を積み重ねつつ、学習内容によっては、情報社会に参画する態度、さらには情報の科学的な理解の育成を図ることが望まれます。その際、情報活用能力の3観点と8要素との対応を考慮しながら取り組むことが重要です。

中学校段階では、情報活用の実践力、情報の科学的な理解及び情報社会に参画する態度の育成が包括的に扱われることが重要です。その際、情報の科学的な理解の充実を図ることが望ましく、教科「技術・家庭（技術分野）」における「D情報に関する技術」（現行指導要領では「B情報とコンピュータ」）で扱うことができます。

また、小・中学校を通して児童・生徒の発達段階や特性等を考慮し、道徳の内容との関連を踏まえ、情報モラルに関する指導を積み重ねていくことが重要です。

3 職員研修の充実によって、教師自身のICT利活用能力を養う

Y中学校では、「子どもたちの情報活用能力を育てること」を目的とした情報教育と、「効果的に各教科等の目標を達成すること」を目的としたICT利活用を両輪とした職員研修の充実を図っています。情報活用能力の育成を目標としている教科「技術・家庭（技術分野）」の教員のみならず、すべての教員が「各教科等における学習活動やICT利活用が子どもたちの情報活用能力の育成にどのように資するか」を理解できるように研修を進めることがポイントです。各教科等の指導計画については、「情報教育に係る学習活動の具体的展開について—ICT時代の子どもたちのために、すべての教科で情報教育を—」（文部科学省：別添2が小学校段階、別添3が中学・高校段階）が参考になります。

<http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/08/06082512/001/003.htm>

- ◇小学校3年生国語における「ローマ字指導」（現行学習指導要領では4年生）において、文字に関する事項について学習することが、コンピュータ等の情報機器におけるキーボードの活用能力へつながっていくこと。
- ◇中学校「技術・家庭（技術分野）」における「情報通信ネットワークの仕組み」でIPアドレスについて学習することが、インターネットに匿名性があると妄信し、ネットいじめをしてしまいそうになる生徒の内面を変化させることへつながっていくこと。

このように、各教科等と情報活用能力とのつながりを全職員で研修しましょう。

◆ 学習内容の構造化と体系化へのアプローチ

■ 視覚的カリキュラム例（中学校3年生での実践）

	環境		健康		キャリア		国際理解		情報															
	10月				11月				12月				1月				2月							
行事等																								
総合	自己のPBL学習のまとめ①				自己のPBL学習のまとめ②				障害者福祉施設訪問事前学習				障害者福祉施設訪問体験学習ふりかえり				一年間のまとめと発信				二年間の総合を通しての自分自身のふりかえりとまとめ①			
道徳	5		6		3		4		6		4		3		4		6		3		4			
道徳	<p>はじめを許さぬ心 「卒業文集最後の二行」 思いやりの心 「月明かりで見送った夜汽中」</p> <p>美しい生活習慣 「りんごのなにを食べるのか」 礼儀の意義 「おはようございます」</p> <p>父母への感謝 「スダチの苗木」 深い人間愛 「もっとも悲しむべきことは、病めることでも皆しいことでもな</p> <p>郷土を愛する心 「ようこそ「やねせん」へ」</p>																							
国語	3		4		4		4		3		3		3		3		3		3		3			
国語	<p>3 状況に生きる挨拶—原爆の写真によせて</p> <p>話す・聞く話して考えてを深めよう パネル・ディスカッション</p> <p>4 古典を楽しむ 音読を楽しもう 集 仮名序 君待つと—万葉・古今・新古今 —夏草—「おくのほそ道」</p> <p>5 論理の展開 生き物として生きる 説得力のある文章を書こう 意見を主張する [文法の広場②] コミュニケーション [漢字②] 同音異義語・似かよ</p> <p>6 人間と言葉 未来に向かって アルバムを編み、語り合う アラスカとの出会い 温かいスープ おぼろに</p>																							
技家	10		5		9		13		2		19		2		19		2		19		2			
技家	<p>幼児との交流</p> <p>情報モラルをまもろう</p> <p>マルチメディアで表現しよう</p> <p>予測・制御で人にやさしい生活を目指そう</p>																							
英語	12.5		3		7		7		8		8		8		8		8		8		8			
英語	<p>Unit 3 Listen ing Plus 3</p> <p>まとめと練習 Plus 1</p> <p>Speak ing Plus 1</p> <p>Multi Plus 3</p> <p>Let's Read 1</p> <p>Let's Chat 1</p> <p>Speak ing Plus 2</p> <p>Unit 4 Listen ing Plus 4</p>																							
社会	4		1		1		5		1		4		1		4		1		4		1			
社会	<p>3章 現代の民主政治と社会</p> <p>4章 わたしたちの暮らしと経済</p> <p>5章 地球社会とわたしたち</p>																							
理科	18		18		18		18		18		18		18		18		18		18		18			
理科	<p>【2分野】6地球と宇宙 ○夜空をながめよう 第1章 地球の運動と天体の動き 第2章 惑星と恒星 第3章 宇宙の広がり</p> <p>【1分野】7科学技術と人間 第1章 エネルギー資源の利用 終章 科学技術の進歩と人間生活</p> <p>【2分野】7自然と人間 第1章 自然のなかの生物 第2章 自然と環境保全 終章 自然と人間生活</p>																							

- ◆技術・家庭（技術分野）では、教科の目標として情報活用能力の育成を目指しています。
- ◆国語と英語では、単元によってデジタル教科書を活用しています。
- ◆すべての教科が、ICT（今年度は、電子情報ボード）利活用の授業を、指導計画に位置づけて、実践しています。（各教科1回以上）
- ◆総合的な学習の時間では、調べ学習や、まとめ、発表でICT利活用を進めています。
- ◆道徳の時間では、情報モラル教育につながるように、「いじめにつながるブログへの書き込み」などを資料として取り上げています。

■ カリキュラムの実際

1 全教育活動での取組（情報教育のベースとなる部分）

～情報活用能力の育成は、各教科の目標達成のためにも極めて有効です～

情報教育は、コンピュータ等の情報手段を適切に活用することを含め、あふれる情報の中で必要な情報を主体的に選択・活用できる能力を育成することをねらいとしています。これらの能力は各教科の目的達成のためにも極めて有効です。

担当している学年や各教科等の中で、以下のような学習活動を洗い出して実践を進めましょう。

- ◇必要な情報や資料を収集・取捨選択し、それらを活用して自分の考えをまとめて適切に表現したり、参考資料を利用して調べたことをもとに説明したりする
- ◇必要な資料を、情報通信ネットワークや学校図書館などを利用して収集、活用する
- ◇調べ学習やインタビュー、観察・実験等で得たデータについて、コンピュータ等を使って処理（集計、グラフ化、分析等）し、その結果から自分の考えをまとめていく
- ◇様々な事象を量的にとらえ、コンピュータ等を使ってそれらを計測・制御する
- ◇作文、記録や報告などの「書くこと」にワープロソフト等を活用する
- ◇シミュレーションで事象の因果関係等を考察する



電子情報ボード
の活用



生徒会活動で
パソコンを活用



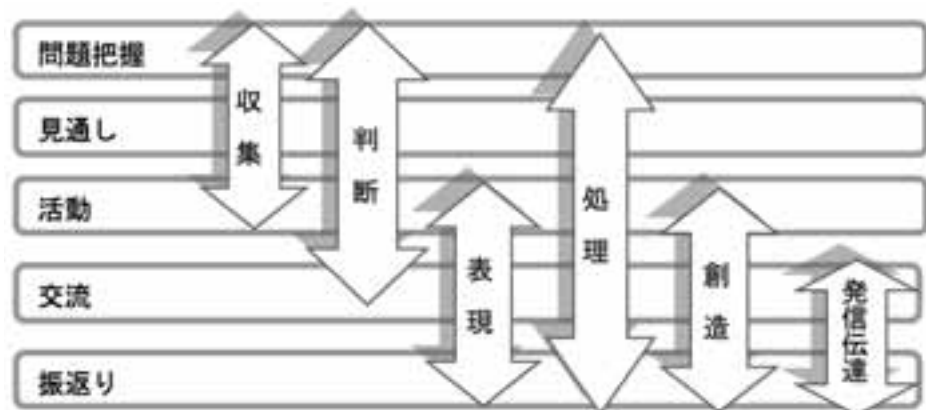
デジタル教科書
の活用

2 情報教育，ICTを利活用した教育の授業づくり

(1) 問題解決学習と情報活用の実践力

各教科の学習指導の中で、問題解決的な学習活動を行うとき、また、教科の中で学び方や問題解決の仕方を指導しようとするときなどに、情報教育を意識して取り組むことが大切です。

一般的な問題解決学習の過程である「問題の把握→解決のための見通しをもつ→解決を目指して活動する→解決したことを交流する→活動を振り返る」の5段階と情報活用の実践力は下図のように表わすことができます。

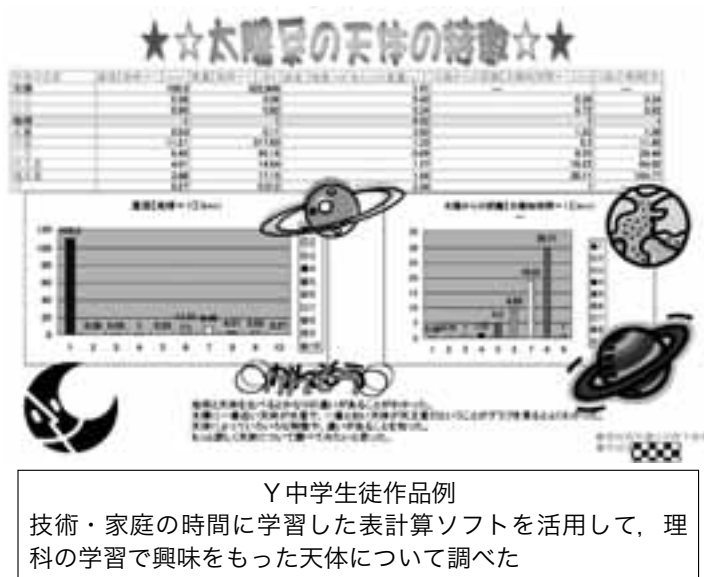


例えば、子どもたちが解決しなければならない問題に向き合い、自力で解決するために、その糸口となる資料を収集したり、収集した情報を判断、処理したりする学習を展開します。その学習の各段階で、情報活用の実践力の

育成を意識して指導することが大切です。

(2) ICT利活用を各教科1実践以上取り組む

市内J S中学校、Y中学校では、電子情報ボードの継続的な利活用の研究に取り組んでいます。生徒は、技術・家庭（技術分野）で、電子情報ボードやそのソフトウェアの利用について学習します。その後、国語や英語ではデジタル教科書を活用するなど、マルチメディアの特性を生かした視覚効果のある情報提示を行っています。社会の授業では、生徒が電子地球儀ソフトを操作しながら意見交流したり、数学では、生徒が図形を操作しながら証明問題を説明したりするなど、相互交流機能、協調学習機能を生かした学習を行っています。



各教科等の取組は、上越市学校支援システムの<学校間共有リンク集の【小・中学校】教科指導で使えるリンク>などから授業で使える資料を探すこともできます。ICT利活用については、学習情報指導員の来校日に行うと、機器操作等が苦手な職員も安心して取り組むことができます。

3 児童・生徒の発達段階に応じた情報モラル学習の実践

～地域・保護者と連携・協力して、情報の「影」の部分から子どもを守るために～

情報モラル教育を体系的に推進するために情報モラルの指導内容を以下の5つに分類し、それぞれの分類ごとに、児童・生徒の発達段階に応じて指導内容を設定していきます。

「①情報社会の倫理 ②法の理解と遵守 ③安全への知恵 ④情報セキュリティ ⑤公共的なネットワーク社会の構築」

文部科学省「情報モラル指導モデルカリキュラムや指導用ガイドブック」を参考に各校で作成しましょう。

<http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/05/07052403/001.pdf>

情報モラルの指導は、学校のみならず地域・保護者と連携・協力して進めることが重要です。地域・保護者用の資料として、上越市教育委員会の「H20情報モラル指導資料(主に携帯電話)」、「家庭における情報モラル育成の手引き」や文部科学省エル・ネットの「ちょっと待ってケータイ」が参考になります。

<<http://www.jecomite.jorne.ed.jp/moral/infomoral.pdf>>

<http://www.elnet.go.jp/elnet_web/portalTop.do>

これらの資料を有効活用して、地域・保護者を巻き込んだ情報教育を進めましょう。

「学校教育におけるICT利活用の日常化」調査研究

上越地域学校教育支援センターが中心となり、H20～H22に進めている研究。

上越市では、小・中2校ずつを研究指定し、全普通教室に電子情報ボードを整備し、その活用の可能性を調査・研究する。

情報モラル

「情報社会で適正な活動を行うためのものになる考え方と態度」と定義されている。

エル・ネット

文部科学省がインターネットを活用して、教育・文化・スポーツ・科学技術に関する学習コンテンツ(映像・音声やテキスト資料等からなる内容)や情報等を全国に提供する教育情報通信ネットワーク。

◆ マネジメントと組織づくりへのアプローチ

■ 縦軸（発達段階）と横軸（各教科等）両面からの評価・改善を大切に

情報教育のカリキュラム評価・改善は、情報活用能力の育成に直接かかわる授業だけでなく、ICT利活用を含むカリキュラム全体で行うことが重要です。

縦軸（発達段階）では、「触れる」、「親しむ」、「慣れる」、「利用する」、「活用する」など、児童・生徒の発達段階を考慮して、各学年レベルではぐくむべき情報教育の目標リストを作成します。横軸（各教科等）では、教科・領域などの学習過程で、情報活用能力の育成やICTを利活用する学習活動を想定し、単元や題材を工夫します。そして、縦軸、横軸の両方向から目標達成について評価し、改善を図ります。上越市の視覚的カリキュラム表を活用する場合は、シートの縦軸に、各学年レベルの目標リストを加筆するとよいでしょう。

また、目標の達成状況のみならず、全体計画や地域・保護者との連携、職員の協働体制についても評価・改善を図っていくことが大切です。

■ 校内全職員の協働、小・中、地域・保護者との連携協力を大切に

教育の情報化を進めるためには、校内の推進体制の整備や小・中の連携、地域・保護者との協力
 中学校技術・家庭科（技術分野）新旧学習指導要領対応

技術・家庭（技術分野）新学習指導要領	技術・家庭（技術分野）現行学習指導要領
<p><D 情報に関する技術></p> <p>(1) 情報通信ネットワークと情報モラルについて、次の事項を指導する。</p> <p>ア コンピュータの構成と基本的な情報処理の仕組みを知ること。</p> <p>イ 情報通信ネットワークにおける基本的な情報利用の仕組みを知ること。</p> <p>ウ 著作権や発信した情報に対する責任を知り、情報モラルについて考えること。</p> <p>エ 情報に関する技術の適切な評価・活用について考えること。</p> <p>(2) デジタル作品の設計・制作について、次の事項を指導する。</p> <p>ア メディアの特徴と利用方法を知り、制作品の設計ができること。</p> <p>イ 多様なメディアを複合し、表現や発信ができること。</p> <p>(3) プログラムによる計画・制御について、次の事項を指導する。</p> <p>ア コンピュータを利用した計画・制御の基本的な仕組みを知ること。</p> <p>イ 情報処理の手続きを考え、簡単なプログラムが作成できること。</p>	<p><D 情報とコンピュータ></p> <p>(1) 生活や産業の中で情報手段の果たしている役割について、次の事項を指導する。</p> <p>ア 情報手段の特徴や生活とコンピュータとの関わりについて知る。</p> <p>イ 情報化が社会や生活に及ぼす影響を知り、情報モラルの必要性について考えること。</p> <p>(2) コンピュータの基本的な構成と機能及び操作について、次の事項を指導する。</p> <p>ア コンピュータの基本的な構成と機能を知り、操作ができること。</p> <p>イ ソフトウェアの機能を知ること。</p> <p>(3) コンピュータの利用について、次の事項を指導する。</p> <p>ア コンピュータの利用形態を知ること。</p> <p>イ ソフトウェアを用いて、基本的な情報の処理ができること。</p> <p>(4) 情報通信ネットワークについて、次の事項を指導する。</p> <p>ア 情報の伝達方法の特徴と利用方法を知ること。</p> <p>イ 情報と収集、利用、発信し、発信ができること。</p> <p>(5) コンピュータを利用したマルチメディアの活用について、次の事項を指導する。</p> <p>ア マルチメディアの特徴と利用方法を知ること。</p> <p>イ ソフトウェアを選択して、表現や発信ができること。</p> <p>(6) プログラムと計画・制御について、次の事項を指導する。</p> <p>ア プログラムの機能を知り、簡単なプログラムの作成ができること。</p> <p>イ コンピュータを用いて、簡単な計画・制御ができること。</p>

右が現行、左が新。
下線部分が、削除
 (今後は小学校を含む他の学習で行う)

体制が必要になります。Y中学校では、教育の情報化を適切に推進することを目的に、教育の情報化推進委員会を校務分掌に位置づけ、情報教育のカリキュラム編成の企画・立案、ICT利活用推進のための教員の指導力向上研修の実施、校内ICTの維持管理（ガイドライン作成やトラブルの対処）、情報の発信や学校Webサイトの管理などについての学校全体としての教育の情報化計画・ビジョンの策定に取り組んでいます。

また、新学習指導要領移行に合わせて小学校との連携を進めています。左図は、中学校技術・家庭（技術分野）の新旧学習指導要領の対応を表しています。右（現行）の下線部分は、今後、技術分野の授業以外で行うこととなります。例えば(1)のアは小5社会「我が国の情報産業や情報化した社会の様子、国民の生活への影響」の学習で行うことが確認できます。しかし、「ソフトウェアの活用」はどうでしょう。中1技術で学んでいた表計算ソフトの活用等は、

どの段階で行うべきでしょうか。小・中の連携・協議が必要です。

さらに、携帯電話等の普及によって、学校だけでは対応できない「ネットいじめ」等が心配されます。地域・保護者との連携・協力をさらに深めていきましょう。